

北 裏 遺 跡

国道41号線名濃バイパス建設地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

可児町北裏遺跡発掘調査団

序

国道41号線バイパス建設地点が発表されて以来、その計画路線内における埋蔵文化財の予備調査が、関係各位によって進められ、北裏遺跡の一部が存在することが知られた。こうした遺跡が、道路建設等の開発事業によっていん滅する事は、開発と文化財保護をどう調和して行く事はむつかしい問題点である。

県教育委員会と町教育関係者と協議の上、調査記録保存をすべきであるとして、これ等の関係者と建設省中部建設局岐阜国道工事事務所と協議の結果、今回の発掘調査を行なう運びとなった。そこで可児町北裏遺跡発掘調査団を結成して調査を実施する事にしたのである。発掘調査に当っては、日本考古学協会員大江侖氏を主任調査員とし、日本考古学協会員紅村弘氏を副主任調査員に、調査員として岐阜県考古学会員中島勝国氏、田口昭二氏、大江上氏等の参加を得て調査を完了し、学術的成果をあげ、発掘調査を完了する事が出来た。調査団各位を始め、可児町文化財審議委員各位・猛暑厳寒を通して作業を行なわれた婦人会等の協力者やその他関係機関の各位、財的援助を煩わした建設省（中部建設局）岐阜国道工事事務所各位に深く謝意を表するとともに、今後この大事業を契機として、この種文化財保護の上に各方面の御理解と御協力を賜わりたく御願ひ申し上げます。

ここに貴重な資料をまとめて報告するとともに、今後の研究資料となれば幸いである。本報告書の作成は、大江侖、紅村弘、田口昭二、中島勝国、古川庄作、大江上諸氏の労をわずらわしたことを付記して感謝の意を表します。

昭和48年3月20日

可児町北裏遺跡発掘調査団長

可児町長 林 桂

例 言

○岐阜県可児郡可児町土田地区、北裏埋蔵文化財地域内を国道41号線バイパスが通り、建設省によって道路建設工事が行なわれることになったため、昭和46年5月より昭和47年3月までの期間にわたって調査を行なった報告書である。

○発掘調査団の構成は下記の通りである。

団 長 副 団 長 主 任 調 査 員 副 主 任 調 査 員 調 査 員 “ “ 県 文 化 課 調 査 団 委 員	日 本 考 古 学 協 会 員 日 本 考 古 学 協 会 員 岐 阜 県 考 古 学 協 会 員 “ “	林 桂 只 腰 左 門 大 江 村 命 紅 村 弘 大 江 上 田 口 昭 二 中 島 勝 国 安 藤 定 竹 内 益 男 三 宅 富 雄 溝 口 緑 杉 山 鈴 夫 前 田 三 之 夫 三 宅 利 男 佐 藤 鉤 平 丹 羽 利 男 奥 村 一 美 多 賀 丈 平 森 川 益 三 金 子 一 郎 日 比 野 義 博 上 野 晃 司 奥 谷 一 勝 統 木 重 数 奥 村 一 可 児 正 雄 岡 田 東 佐 藤 忠 男 日 比 野 光 子 藤 田 美 知 子 堀 純 宝 安 藤 寿 作 田 口 茂	波 多 野 寿 勝 鈴 木 告 也 可 児 郁 男 宮 地 義 道 前 田 好 治 日 比 野 末 松 丹 羽 保 郎 可 児 六 美 堀 井 丑 男 金子 龜 遊 奥 村 智 雄 岡 部 基 咲 稻 垣 雄 之 助 統 木 正 小 栗 清 志 岡 田 公 平 可 児 鋼 平 小 栗 英 美 小 沢 末 広 鈴 木 益 広
---	---	---	---

事務局長代理
 事務局員

事務担当

- 発掘調査は、昭和46年度内に行ない、昭和47年度に調査出土品等の整理並びに報告書の作成作業を行なったのであり、調査及び報告書の費用は建設省によって財的援助を賜ったのである。
- 調査報告書の作成は、日本考古学協会員大江 命、紅村弘、岐阜県考古学会員中島勝国・田口昭二・古川庄作・大江上・調査協力員可児鋼平諸氏によるものである。
- 本書は出来る限り、図版及び挿図を多く用いた。また文中 ϕ はグリットを表わすものである。寸法はm, cmによって表わしたのである。用語に付いては当用漢字以外のものも使用した。
- 調査に当られた調査員を始め、事務局職員、発掘に参加された作業員、その他関係各位、また協力を賜った多くの方々に深く感謝するとともに今後のご協力を切望する次第である。
- 私事であるが土地の住民の一人として、縄文式早期から弥生式時代、古墳時代、歴史時代の遺構、遺物の発掘によって再び土中から陽光の下に甦ったものに接する時、原日本人の息吹きを肌を感じ深い感激を覚えざるを得ない。

可児町北裏遺跡発掘調査副団長

可児町教育長 只 腰 左 門

目 次

序	
例 言	
ま え が き	7
北裏遺跡付近の地形と立地の概観	9
遺跡周辺の歴史的環境	11
発掘経過	14
層序と出土状態	17
遺 構	23
石 製 遺 物	28
縄文式土器	41
弥生式土器	69
土師式土器	74
須 恵 器	76
灰 釉 陶 器	79
山茶碗系陶器	81
中 世 陶 器	88
土 製 品	91
自 然 遺 物	94
結 語	95

挿 図 目 録

挿 図 1	遺跡付近の地形図……………	9
挿 図 2	北裏遺跡地形図……………	14
挿 図 3	第1地点地層断面図……………	18
挿 図 4	第1地点・第3地点地層断面図……………	19
挿 図 5	合口甕棺出土状態……………	21
挿 図 6	第1地点炉址 合口甕棺実測図……………	23
挿 図 7	石 組 遺 構……………	24
挿 図 8	第1地点溝状遺構実測図……………	25
挿 図 9	方形住居址実測図……………	27
挿 図 10	第1地点出土石鍬実測図……………	30
挿 図 11	石 器 類 実 測 図……………	33
挿 図 12	〃……………	34
挿 図 13	第1地点グリット別石鍬種別出土数表……………	35
挿 図 14	石 匙 実 測 図……………	37
挿 図 15	縄文式早期・前期前葉～後葉土器拓影……………	43
挿 図 16	縄文式前期後葉～中期前葉土器拓影……………	44
挿 図 17	縄文式中期土器及び前期中期底部実測図……………	45
挿 図 18	縄文式中期前葉土器拓影……………	47
挿 図 19	縄文式中期及び後期土器拓影……………	48
挿 図 20	縄文式後期・晩期土器拓影……………	51
挿 図 21	縄文式晩期土器拓影……………	52
挿 図 22	〃……………	54
挿 図 23	〃……………	56
挿 図 24	〃……………	57
挿 図 25	縄文式晩期土器実測図……………	58
挿 図 26	〃……………	59
挿 図 27	縄文式晩期土器拓影……………	60

挿図 28	縄文式晩期土器実測図	63
挿図 29	〃	64
挿図 30	〃	65
挿図 31	〃	66
挿図 32	縄文式晩期土器底部実測図	67
挿図 33	〃	68
挿図 34	弥生式土器拓影	70
挿図 35	弥生式土器拓影及び実測図	72
挿図 36	第3地点出土土師式土器拓影及び実測図	75
挿図 37	須恵器・灰釉陶器実測図及び拓影	77
挿図 38	耳付き広口瓶実測図	79
挿図 39	灰釉陶器・山茶碗系陶器実測図	84
挿図 40	第1地点出土山茶碗実測図	85
挿図 41	中世陶器拓影	89
挿図 42	土製品実測図	92
挿図 43	ドングリの実	94

図 版 目 録

- 図版 1 発掘地点全景 北方より第2地点を望む
- 図版 2 北方より第1地点を望む(杭打ち)
第1地点グリット内における埋甕出土状態
- 図版 3 南方より発掘中の第1地点 西方より第1地点南部の層序
第1地点北部の層序 前方に見えるのは発掘中の第3地点
- 図版 4 第1地点溝状遺構
- 図版 5 第1地点 炉址 第1地点石組遺構
- 図版 6 第1地点発掘状態 第1地点ピットと合口甕棺
- 図版 7 縄文式晩期土器出土状態 第1地点ピットの状態 石刀出土状態
山茶碗出土状態
- 図版 8 石組遺構 第3地点出土住居址
- 図版 9 縄文式早期~前期土器 縄文式前期土器
- 図版 10 縄文式前期土器
- 図版 11 縄文式中期土器
- 図版 12 縄文式中期土器残存部
縄文式中期深鉢土器
縄文式中期浅鉢形土器
- 図版 13 縄文式中期土器
- 図版 14 縄文式中期土器
- 図版 15 縄文式晩期土器残存部 縄文式晩期土器
- 図版 16 縄文式後期土器
- 図版 17 縄文式晩期土器
- 図版 18 縄文式晩期土器
- 図版 19 縄文式晩期土器
- 図版 20 縄文式晩期土器
- 図版 21 縄文式晩期土器
- 図版 22 縄文式晩期土器
- 図版 23 縄文式晩期土器 左同出土状態
- 図版 24 縄文式晩期甕形土器残存部

縄文式晩期甕形土器

- 図版 25 縄文式晩期甕形土器 左同出土状態
- 図版 26 縄文式晩期浅鉢形土器
縄文式晩期甕形土器残存部
- 図版 27 縄文式晩期甕形土器残存部
縄文式晩期小形甕形土器
- 図版 28 縄文式晩期甕形土器
- 図版 29 縄文式晩期甕形土器
- 図版 30 縄文式晩期甕形土器
- 図版 31 弥生式土器同底部・同口縁部残存部 弥生式中期土器
- 図版 32 弥生式中期土器 弥生式中期貝田町式土器
- 図版 33 弥生式中期土器
- 図版 34 上中段 滑車形耳飾・下段左 耳栓形土製品・下段中右 白状耳飾
紡錘車
- 図版 35 土 錘
- 図版 36 杯 土師式甕 短頸壺 横瓶 耳付き広口瓶
- 図版 37 山 茶 碗
- 図版 38 山茶碗 耳皿 同底部 小皿 同底部
- 図版 39 山茶碗 蓋 小皿 碗 皿
- 図版 40 土 偶
- 図版 41 陶 器 片
- 図版 42 打 製 石 鏃
- 図版 43 打 製 石 鏃
- 図版 44 石 匙 石 錐
- 図版 45 石 錘
- 図版 46 磨 製 石 斧
- 図版 47 打 製 石 斧
- 図版 48 石 刀
- 図版 49 石冠 独鈷石 石包丁 円盤状打製石器
- 図版 50 スクレイバー 磨石 凹石
- 図版 51 砥石 石皿
- 図版 52 第1地点実測図

ま え が き

岐阜県可児郡可児町土田字北裏は木曾川と可児川の合流点に発達した。下位段丘の高位段丘、低位段丘上に位置し、古くより石器、土器が表採された地域が、北裏遺跡であり、今回、国道21号線と41号線をつなぐ名濃バイパスの建設がなされるため、昭和46年5月1日調査主任を依頼され、発掘調査団が前述の様に編成された。

発掘調査準備を5月4日よりはじめ、発掘は5月26日より開始したのである。7月1日より紅村弘先生が調査員に参加され、調査は昭和47年3月30日まで行なわれた。

発掘は第1地点、第2地点、第3地点に区画して行なった。

第1地点は、遺跡の中心地点である事は過去における表採などによって知られていた。発掘の結果、縄文式時代の遺物及び遺構を始め、弥生式時代の遺物、歴史時代の遺物を出土した。中でも合口甕棺の出土例を多く認めた。

第2地点は、石鏃、打製石斧、須恵器片、山茶碗片及び陶磁器片等が混在し出土しているが摩耗が著しい。

第3地点は、第1地点に北接する地点であり、溝状遺構及び方形の掘込みと縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片、須恵器片、山茶碗片及び石器類が出土している。この地点の北端には、昭和の初年に横穴式土壇が存在し、そこに白山神社が祀られていた関係上、それらに関係のあると思われる遺物の出土を見た。

今回の発掘において、特に縄文式早期、前期、中期、後期、晩期を始め弥生式時代の遺物、その他、須恵器、山茶碗等を中心とする貴重な成果を得て発掘を終了したのである。

調査は長期間にわたって行なわれ、その間、町当局を始め調査員及び補助調査員にいろいろと困難な指示を行なった。中でも遺物の記録と整理は、多量の出土品を整理するため、いろいろと工夫をこらしていただいた。これにはハムの無線の資格保有者可児鋼平氏と、発掘当時より測量班として参加された大森寿子・可児貞子・長谷川さえ子各氏の協力によるものである。

更に、発掘事務所事務関係者及び調査補助員として、奥村 一・岡田公平・岡田 東・小栗清志・可児正雄・佐藤忠男・小栗英美・藤田美知子・日比野光子各氏には記録などにおいて夜遅くまで協力を得た。

また、発掘作業に欠く事の出来ない調査協力者、作業員の皆さん及び国道事務所、県教育委員会、岐阜県考古学会員松田典夫・後藤啓次・吉田英敏の諸氏、町当局関係各位に対して、心から御礼申し上げる次第である。(大江 命)

ている。今回の発掘に関係のある土壌は第1地点、第3地点は（高位段丘面）表土が黒色土層、その下が黄色砂層、砂礫層となっている。また第2地点は（低位段丘面）表土が粘性をおびた褐色土層、砂礫層となっている。

発掘地点の土地利用は、第1地点が畑地、第3地点の一部が工場敷地となっていた。尚、第2地点は水田となっていた。また高位段丘面と低位段丘面の傾斜変換線の付近に住宅があったのである。^{註3}かような地形の中に遺跡が立地していたのである。（大江 上）

- 註 1. 吉川虎雄はこの段丘面をL₁・L₂・L₄・L₅に分類されている。L₃面に高位段丘面L₄面に低位段丘面が相当すると考えられる。
2. 関道明, 木村一朗 GEOLOGICMAP OF THE MINO-KAMO. BOSIN
3. 長谷川元宥氏宅があった。

遺跡周辺の歴史的環境

北裏遺跡は、考古学者や好事家によって遺物の採集が古くからおこなわれ、その存在が知られていた遺跡の一つである。中央の考古学界に当遺跡の事が報じられたのは、岐阜県の考古学の先駆者の一人である故林魁一氏が、木曾川をへだてた旧太田町（美濃加茂市）に住んでいて同町を中心としてその周辺の遺跡の踏査を続けておられた。

東京人類学雑誌の166号（明治33）に「美濃国諸地方の古物遺跡」という題の論文のなかに当遺跡の遺物についての報告が掲載されている。

多くの人々によって色々な遺物が採集されていて、それ等の遺物より長い期間にわたって人間の生活が営まれていることが知られ、当地域の主要遺跡である。

次に、ここでは可児町内に関係する先史遺跡、歴史的遺跡及び史実、史話などの順でみるととした。

縄文時代の遺跡の分布は、当北裏遺跡の他に

- ① 宿 (土田)
- ② 富士野井 (土田・東山)
- ③ 袖 裏 (土田・渡)
- ④ 井 之 鼻 (土田・井之鼻)
- ⑤ 坂 戸 (春里・坂戸)
- ⑥ 徳 野 (今渡・徳野)
- ⑦ 川 合 (今渡・川合)

と7カ所を数える。いずれも木曾川・可児川沿いの河岸段丘に位置している。今回の調査する数年前に調査地域から約300m隔った民家で塵芥穴を掘った時に、縄文中期を中心とする土器が相当数出土した宿遺跡が存在している。今回調査地域の西約50mと、東へ約300mの土田段丘（下位段丘）の上段の南面沿いに土器片や石器などが散布していると言われ、従って北裏遺跡及び宿遺跡までの間には点々として遺構等が存在すると推察される。

川合遺跡については、昭和34年に道路建設中に住居址が見出され、名古屋大学澄田教授等によってその住居址一基分だけ調査され、加曾利E式土器のみを伴う一時期の住居址と確認されたが、付近にはそれと異なる時期の土器片も表面採集されている。

他の遺跡については本格的調査が実施されていないが、縄文式土器などの散布が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、北裏遺跡以外に

⑧ 久々利銅鐸出土地（久々利柿下・番場）

⑨ 富士野井

⑩ 川合

⑪ 禅台寺山（今渡・沢渡）

⑫ 山岸（広見・山岸）

の5カ所が知られている。

久々利銅鐸は、享保18年に久々利柿下番場地区の狐塚において、農民林八が開墾中に発見という。当銅鐸との必然的関係をもつ弥生期の集落跡はまだ確認されていない。禅台寺山遺跡は標高120mの残丘状の段丘の南部に位置し、古くから壁土などに利用される赤土を採土中に弥生式土器が出土せりというが、現在は大部分宅地となり確認することが困難である。尚、近年、山岸の山頂（標高100m）から弥生式中期の古い時期の土器が住居址と思われる遺構とともに出土した。

古墳時代ともなると、当地域は数多くの古墳があったので、美濃国の四大拠点の一つでもあったと推定され、なお現在でも100基近く存在している。明治末期に開畑された土田東山・渡地区だけでも150～200基の群集墳があったと伝えられている。

代表的なものをあげれば

⑬ 身隠山古墳（広見・伊川）

⑭ 長塚古墳群（中恵土・前渡）

⑮ 熊野古墳（広見・伊川）

⑯ 渡・八幡古墳群（土田・渡）

⑰ 次郎兵衛塚（今渡・川合）

⑱ 羽崎・中洞古墳（平牧・羽崎）

などがある。

身隠山古墳は、白山・御嶽の二古墳であるが古くは、天保・明治の頃に発掘され、内行花文鏡をはじめ鍬形石・車輪石など数多くの副葬品やその立地（山頂にあって自然の地形を利用）などから前Ⅱ期末～前Ⅲ期初頭のもと考えられている。^{註1}残念なことに近年、町水道貯水地とされその景観は変わっている。

また長塚古墳群の長塚・西寺山・野中の各古墳（古くから前波の三つ塚といっている）のうち野中古墳は、明治の頃破壊され現在は、墳丘の一部が残っているのみであるが、竪穴式石室であったことと三角縁神獸鏡などが出土していることを考えると前Ⅲ期のものと思われている。^{註2}

川合の次郎兵衛塚は、一辺が約30mの上円下方墳であり、^{註3}可児川上流部や久々利川・大森川流域の丘陵中に横穴墓がいたるところに作られている。

当北裏地内にも古墳が存在していて、現在も近くにその残骸が見られる。それとは別に大正の頃までに第三地点の中央西寄りに白山古墳と称するやや大型の円墳があったが、昭和初期の開田時や戦時中の青年学校の建設の為に破壊され整地されたという。

奈良時代になり、東山道が設置されたが、各務駅から可児駅へ行く径路として古くは、犬山で木曾川を渡って来て帷子を通り当地を通ったという。それがいつ頃よりか不明だが、鶯沼～坂祝～土田へと「大炊戸の渡し」といって当地を渡河したものである。尚、「倭類聚鈔」の可児七郷の「大炊戸とか大井とか」あるのは、現在の土田の地を指しているという。

久々利川の流域には現在も条理制の名残りを見ることで出来る。

また、平安・鎌倉の陶器類を焼いた窯跡が、久々利から姫・春里地内の山林に散在している。まだ十分調査されていないが、灰釉窯跡は数が少なく、山茶碗類の窯は数が多いと思われる。

鎌倉時代には、承久の乱の時にこの「大炊戸の渡し」も戦場となり、西軍（朝廷方）は美濃国守護大内惟義の子惟信をおいたという。これに対して東軍（幕府方）は、武田五郎信光を大将として、「大炊戸の渡し」の夜戦から承久の乱の決戦ははじまったと伝えられている。

室町時代に入り、観応元年に、「周済の乱」がおき、足利義詮・高師直が兵三万を従えて守護の土岐頼康を助けた際に、土田鳩吹に陣をとり合戦し、土岐周済を破ったという。

安土・桃山期には、久々利の大萱・大平に陶工らが窯をきずき、志野・織部の名品を焼いた。それらの古窯は現在も残っている。

その頃、可児郡一带は諸小豪に支配された頃であって、ある時期には、当北裏遺跡の近くの城山に生駒氏がいて、付近を支配していたが天正年間、兼山に進出した森長可によって退去させられている。（中島勝国）

註1 旧岐阜県報10

註2 旧岐阜県報3

註3 旧岐阜県報8

参考文献 岐阜県史 原始編

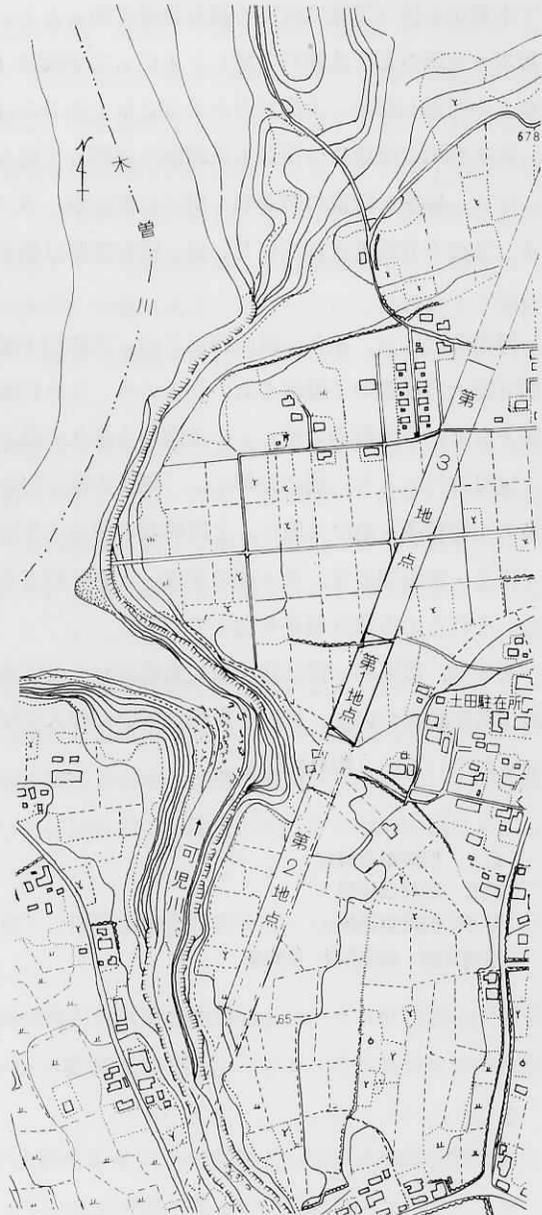
発掘経過

発掘に至るまでの経過

北裏遺跡の一部が国道41号バイパスの建設計画内に相当することが知られ、昭和45年度においても種々の機関、また地元の人の中においても調査の要望は高まっていた。昭和46年2月1日、建設省中部建設局岐阜国道工事事務所と岐阜県教育委員会と協議がもたれ、同2月8日に建設省と県教育委員会、可児町教育委員会、調査主任担当者の四者にて現地の状況を踏査し、その後、県教委において調査の予算等の折衝が行なわれ、4月8日に県教委、町教委、主任調査員にて発掘に対する最初の打合せを持つ。同年5月1日、北裏遺跡発掘調査事務局員8名に辞令を交付し、5月4日に事務局を組織して発掘調査の準備を進めたのである。5月7日、県教委、主任調査員、発掘事務局員で打合せを行なう。

発掘作業員の人選、事務所内の整備等をして、5月24日、発掘起工式を行ない事務所開きとなる。発掘に必要な機材等は一応準備完了し、発掘調査にかかるばかりとなったのである。

挿図2 北裏遺跡地形図



発掘経過の概要

北裏遺跡の調査は、第1地点・第2地点・第3地点、その他に分け、発掘計画が立てられて遂行したので、それぞれの地点別に経過の概要を発掘日誌より抜萃する事にする。

第1地点の発掘区画内の除草作業を5月26日より開始したのである。5月31日より調査員によって地形測量を開始し、また他班は6月1日に4㎡のグリット設定を行なう。除草、測量、グリット設定を平行して行なう。6月2日より一部は設定されたグリットの表土を除く作業を始める。この地点は表土中に石鏃等が見られるので、最初から移植ゴテにて除去作業を行なう。まず表土層（耕作土層）を約10cm程を掘込むと少量の土器・石鏃等が出土する。6月12日山茶碗片なども伴出する。6月18日にg-B6より合口甕棺の一部が出土する縄文晩期の遺跡である事が推察される。6月19日、土錘が出土する。石器類が多く出土する様になる。6月22日、g-G8・g-F8・g-E5などから石器類が出土する。またg-F9より石包丁の破片、g-C9ヒスイの玉類が出土する。その他、磨製石斧、石錘、石匙、山茶碗などが出土する。6月23日、g-E6より中心に石冠状の石を置いた石組遺構が検出された。周囲に数個の石が組合せられている。6月29日、g-A9第二層より長方形ビットが検出される。この手前に合口甕棺状の土器が出土する。またビット内よりは山茶碗の破片が出土した。また石剣片が出土する。g-B14より土偶片が出土する。6月30日、g-G17より石冠、g-E16より合口甕棺などが出土する。7月3日、g-F16に甕、g-G14に土器群が出土する。その他、g-F16・g-E14・g-B13など第2層を掘進めると土器群が一括して出土を始める。7月8日、g-B13より土偶の顔面が出土した。作業員一部で第2地点の除草を行なう。7月21日、g-E9で、大形の掘込のある部分に山茶碗が数個体出土した。この時期に攪乱の様子が知られた。8月2日、g-D14に石刀がビットに直立して出土する。

8月3日、台風の接近のためか強風があり、砂ほこりが立ち作業が困難である。8月5日、19号台風の接近のため、職員と測量班にて出土遺物の整理作業を行なう。9月15日、g-D14より炉址が検出される。また、その炉址の南に合口甕棺が出土する。9月20日、土層断面図測量を始める。10月2日、土層の実測を行なう。10月3日、中間報告展示会を可児町広見農協を会場として3日間開催する。以後、発掘作業を続ける。10月6日、g-C34のセクションの除去を始め逐次これを進める。以後、各グリットごとの最終平面図等の実測及び細部の調査を続ける。11月18日、g-H7のビット内より縄文式中期の土器、数個体出土する。11月26日、第1地点北部の溝状遺構の発掘を行なう。1月26日、第1地点の発掘を終了する。第2、第3、

第4地点の調査は、作業員等の関係で平行して行なったのである。

第2地点は7月20日より除草作業を開始する。8月8日に発掘地点内の杭打作業を行なう。第1地点と同様、4㎡のグリットを設定する。地形測量も平行して行なう。第2地点は設定グリットを市松状に発掘し遺跡の存否の確認を行なう。地形の上から見ても遺跡の存在する可能性が無く、すでに開田作業の時に基盤が整地されていて、水田の底面が見られ、その上層の部分の流土の中から石鏃、打製石斧等が少量出土したのみであり、更に深掘をして層序の関係を見たが、全く遺跡の存在する可能性がないため、8月29日で作業を打切ったのである。

第3地点は9月1日より除草作業を行なう。9月8日より地形測量及びグリット設定を行ない、9月15日より発掘作業を開始する。第1地点よりのg-D3・g-D4・g-C6・g-C7・g-B7・g-D3.4より発掘を進める。この地点はかつて戦時中萱場工業の青年学校グラウンドになり整地されていたため、この地点も市松状に発掘を進めたのである。石鏃、打製石斧、石錘、土錘などが出土したが、黒色土層が深く、遺物も全く散在しているに過ぎず、第1地点よりの流込と考えられる。

9月20日、第3地点のg-C9・g-A11・g-B11などは山茶碗の小破片が多く出土している。12月5日、g-B34を中心とした地点より山茶碗などが多く出土する。12月12日、山茶碗、耳皿などが出土する。

北に行くにしたがって層が浅くなるが、道路をはさんで北の地点は、萱場の軍事工場の寮が建てられた基礎のコンクリートが残されていたが、かつて、この付近は白山神社が円墳上にあっただけで、その円墳は、昭和15年頃にこわされて寮が建てられたのである。その当時、堀が円墳の周囲に存在していたとの事であるので、グリットを北に延長し発掘を行なったのである。2月14日に出土層はすでに攪乱され、三耳壺(灰釉)、須恵器などの破片が見られ、その付近まで基礎が掘込まれている。また3月6日、第3地点g-H43.44より方形ピット住居址と思われる遺構が知られる。覆土中より土師式土器片が発見される。また、土製鏡も伴出する。3月13日より第3地点の測量等を行なう。3月30日完了報告会を行ない、発掘を終了する。職員は3月31日付で解職辞令を発す。その後、調査員5名と事務職員1名、整理員3名によって昭和48年3月31日までに遺物整理及び報告書の作成の作業を一応完了したのである。

(大江 命)

層序と出土状態

層序

北裏遺跡における発掘地点を、地形の変換線を地点を区画の目当として、第1地点・第2地点・第3地点と区別して調査を行なったのである。この3地点は比較的平坦な地形であるので4mのグリットを設定して、調査を行なったのである。その他一部ではトレンチを設定して遺跡の存在を確認した地点がある。

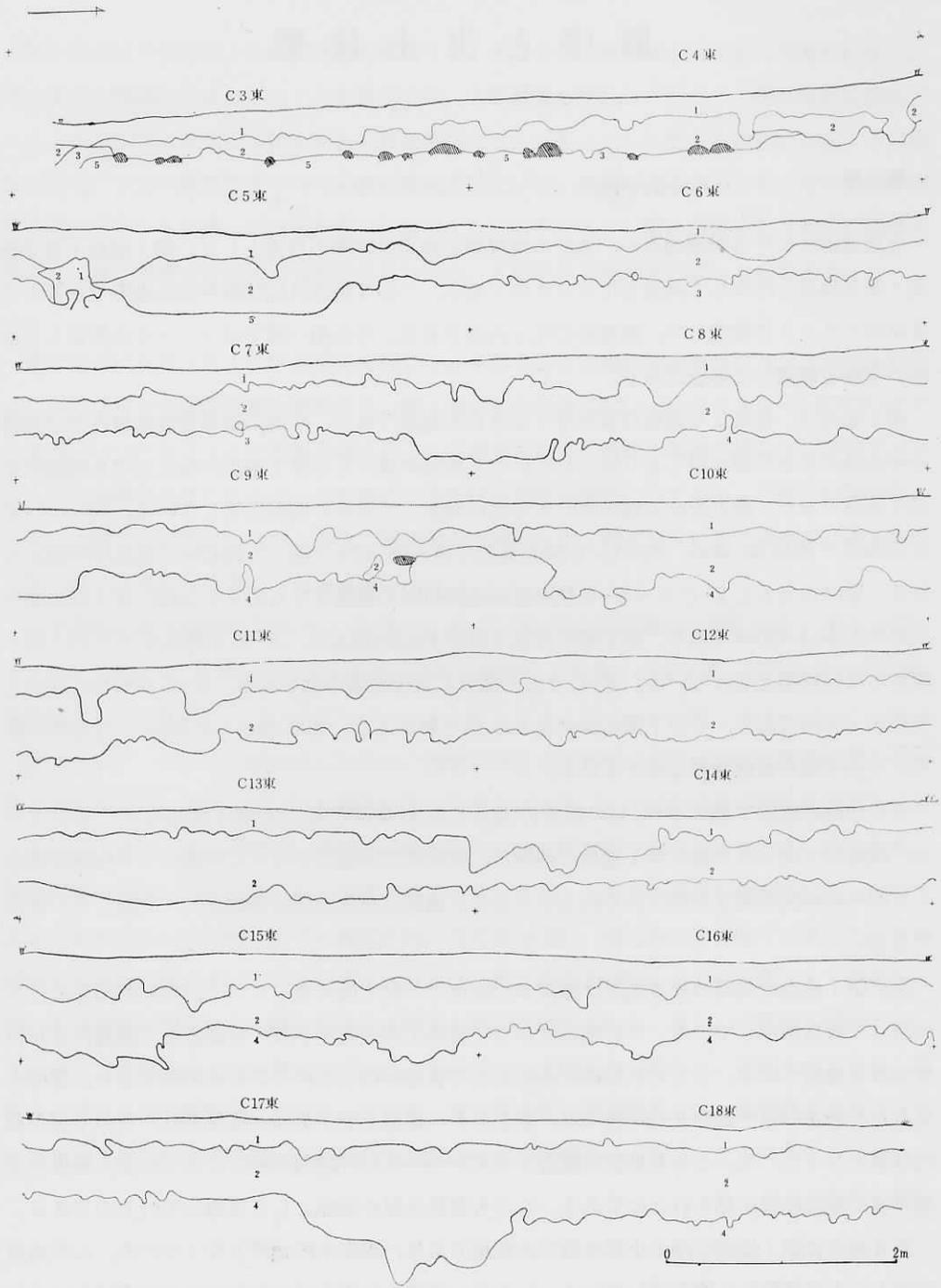
第1地点は、従来より表面採集が多くなされた地点であり、今回の道路建設地域内では遺跡の中心地点である事は早くより知られていた。前述の様にこの第1地点は段丘上でも比較的平坦な地点であり、南の段丘の端の部分から北に向かってゆるい傾斜を示している。南のg-E2の地点で標高68.96m、北のg-E20の地点で標高68.43mで随って約43cmの比高差が認められる。層序を見るとg-C3～g-C18南北の地層断面の挿図3でも明らかな様に第1層の耕作土層が大体15～20cmであり、第2層に黒色土層が約15cm程あり、g-C5地点までその下層が礫または砂礫層となっている。g-C3の一部分に黄色土層が見られる。g-C6～13には表土層約20～30cmであり、その下部に25cm以上の黒土層があり、北に向かうに随ってその層は厚く、その下部が黄色砂層となっている。

また東西の地層で特にg-C13の部分に見られる砂礫層の部分が東に幅をもって伸びている。図版52で見られる様に第1地点の地層は、南端部は全般にわたって砂礫による河床が表土より30～40cm程の深さの所で見られたのである。遺跡は黄色土層を基盤として立地しているのである。

次に第1地点の北部の第3地点は標高67.30mで一段と低くなっていて、だんだん北に行くに随って微高を示している。この地点はかつて萱場工業の青年学校の校庭として整地作業が行なわれた地点である。またそれ以前は水田として整地が行なわれていたとの事であり、層序を見るとK3-g-B1～K3-g-B3までは、表土の下に黒色土層が約80cm程見られ、その下部が黄色砂層となっている。これも地形が微高するK3-g-B4では約40cmで、ここでは表土層黒色土層が浅く黄色砂層が見られたのである。ここも黄色土層を基盤として立地しているのである。

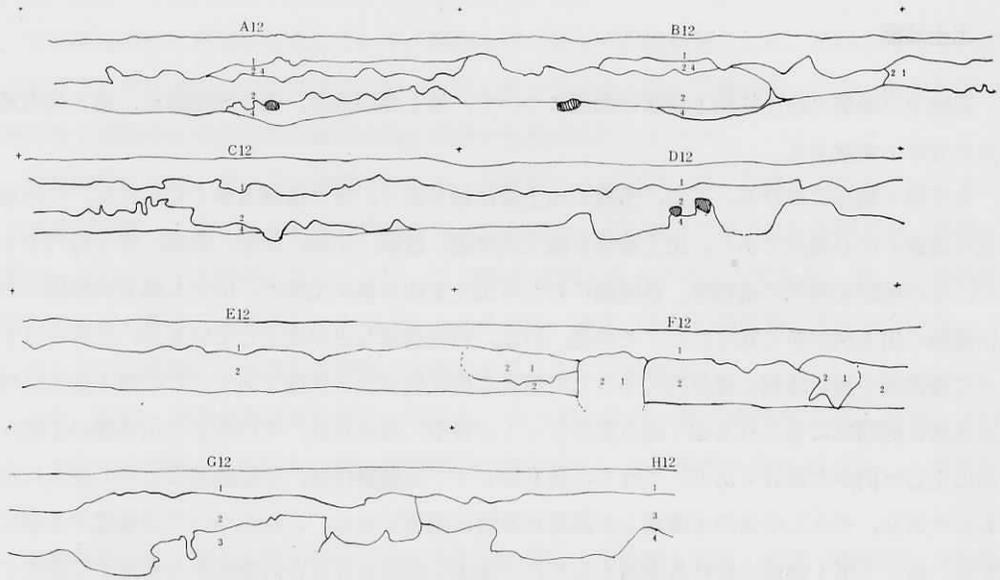
第2地点は第1地点の南の小谷を隔てた低地であり、現在水田地帯となっている。この地点は流入による推積した層を示している。したがって遺物も流入によるものであり磨耗もいちじるしい。

挿図3 第1点g-C3 C18の地層断面図

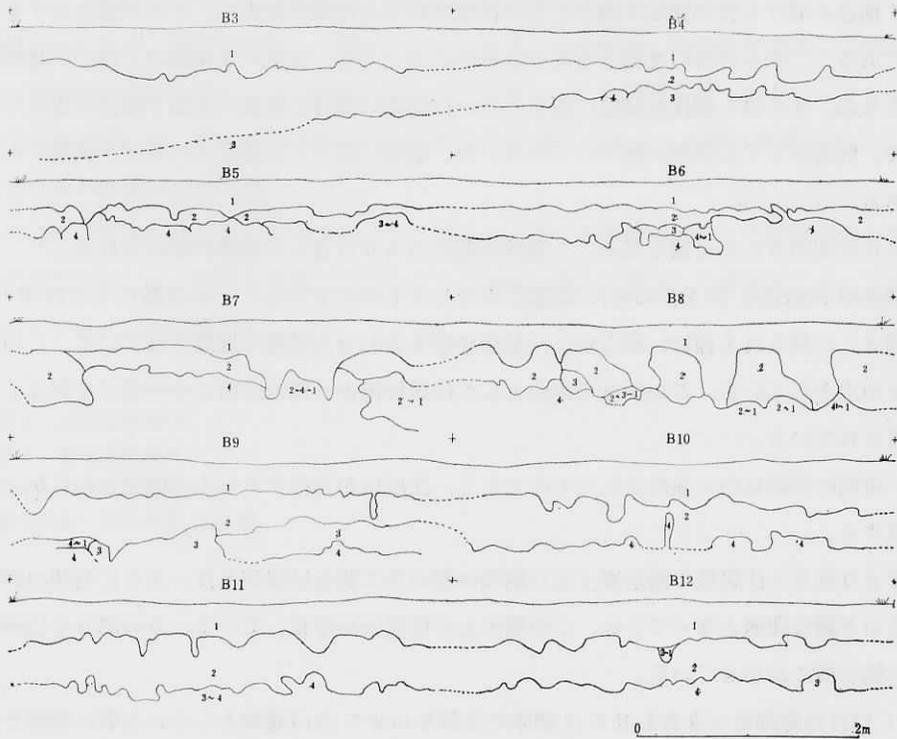


1. 表土層 2. 黒土層 3. 茶褐色土層 4. 黄土層 5. 砂礫層

挿図4 第1地点g-A12~H12の地層断面図



第3地点g-B3~B12の地層断面図



1. 表土層 2. 黒土層 3. 茶褐色土層 4. 黄土層 5. 砂礫層~攪乱層

出土状態

遺物及び遺構の出土状態と層序の関係について、第1発掘地点、第2発掘地点、第3発掘地点に分けて考察する。

まず第1地点に於ける、石器、土器の出土量は最も多く、また遺構も多く知られた。この地点は遺跡の中心地点であり、出土遺物も縄文式早期、前期、中期、後期、晩期、弥生時代のもの、その他歴史時代の遺物等、各時期にわたる出土を知る事が出来た。中でも縄文式晩期の合口甕棺の出土例が多く知られた。その他、炉址、石組遺構などが出土しているが、これらはすべて廃棄後の長い時間に部分的に辛うじて攪乱を免れ残された状態である。この第1地点は特に各所に挿図52に見られる如く長方形のピットが各所に認められ、その中より山茶碗の小破片が出土した例が大部分である。これらの長方形ピットも農耕作業、芋貯蔵等のために掘られたものであり、それと中世の土墳墓との区別が非常に困難である。これについては後述する事にする。従って第1地点に於ける遺構として、一番多く確認された合口甕棺から考察する事にする。

第1地点に於ける合口甕棺の残存として推定されるもの及び確実に、その状態を示すものは9例である。これらの合口甕棺と考えられる中においても、完全に2個体の土器の口縁部を合わせたもの。または1個体を横位に置き、その口縁部の部分に別個の土器で縦位に蓋をしているもの。前者ほどその全貌が残されていないが、前者に類すると推定される出土状態のものなどがある。

これらに使用された土器を見ると、煮沸の際にスガ付着した痕跡が認められる。

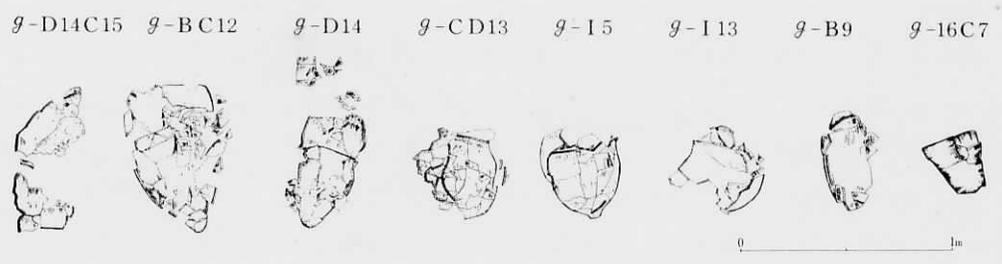
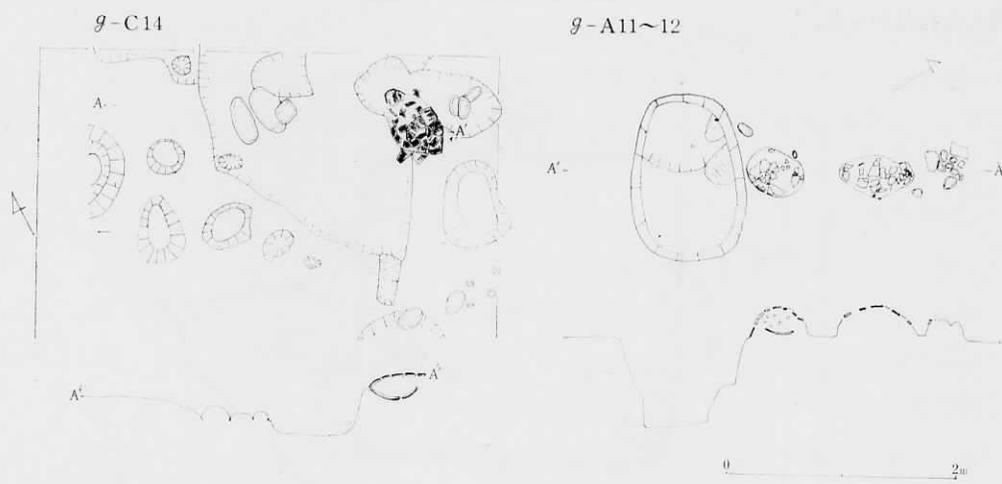
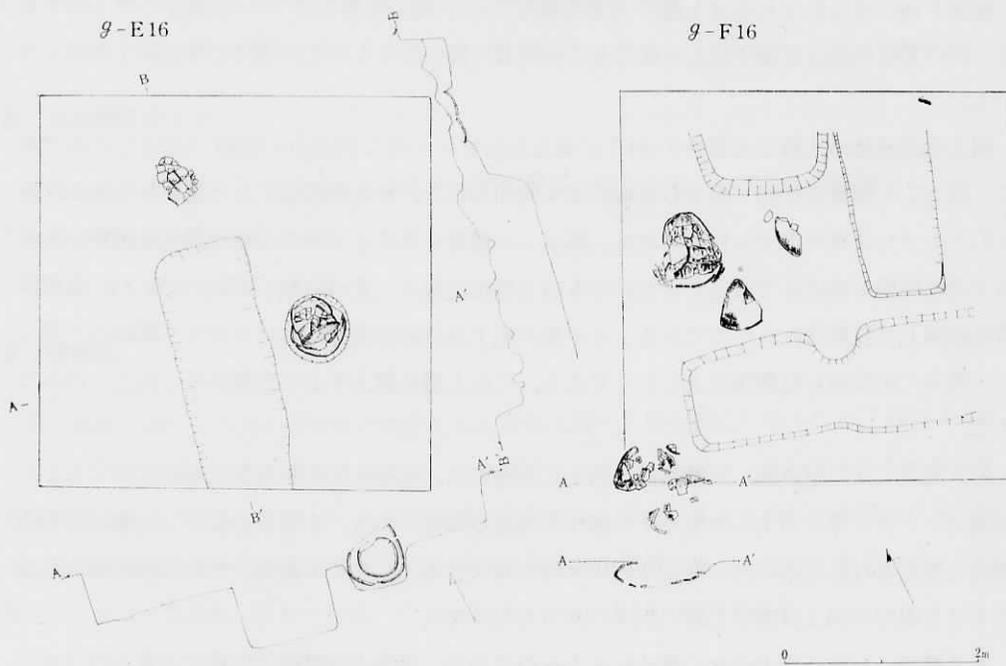
2個体の口縁部を突き合わせた状態で出土したものの中から、その明瞭なものはg-D14(挿図5)に見られる様に、明らかに口縁部を突き合わせた状態で施設されている。この北面に炉址が出土している。この炉址を中心とした住居址内の一部分の所にその部分を掘りくずして施設されている。

同一時期に住居址内に施設されたものでなく、住居址が先行するものと推定されるが、これは後述する。

層序より見ると住居址の面が表土より約80cm程の所に黄色砂層があり、そこに石囲の炉があり、その下層は礫層となっている。この層の上に住居址が存在している。その部分を15cm程掘下げた処に横にねかせている。

g-C14は口縁部をつき合わせて2個体の土器をねせて合口甕棺としている事は明瞭であるが、上面の部分が後世の攪乱によって欠失しているが底部は残っている。

插图5 合口甕棺出土状态



挿図F 16は、黄色砂層を掘込み、3個の土器にて明瞭に埋められたものである。

挿図F 16に見られるものは1個の土器を横位にし、他の土器片によって蓋をしたものである。合口甕棺の出土状態は以上の様なものが顕著に知られたもので大体同じ様な出土を示している。

縄文中期前葉の土器は大部分g-H7に見られたピット内に流込みの状態出土したのである。直立した埋甕の状態出土したものが4例知られた、その内図版7Aで見られたものは蓋に石をのせた状態で出土したのである。直立した埋甕を見ると三分の二程が黒色土層中にあるので黄色砂層を埋込んで直立させていたものと推定出来る。g-D14の石囲炉址などの遺構は黄色砂層上に設置されたものである。その他の第1地点の中央部において大きく掘込みが見られた部分に山茶碗が数個体出土したのであり、その上層の覆土中より土錘が多く出土したのである。

第3地点では、須恵器、灰釉陶器の出土した地点は、近年に凹みが埋立てられたのであり、基礎コンクリー等の出土したすぐ下に破片で出土したのである。土師器の出土した処は方形住居址と推定される住居址内の床より約10cm程の層より出土したのである。それ以外に第3地点における遺物の出土は層序と深い関係のあるものはない。

第2地点における出土は全く流込によるものであり、層序との関係で注意すべきものは全く考えられなかった。

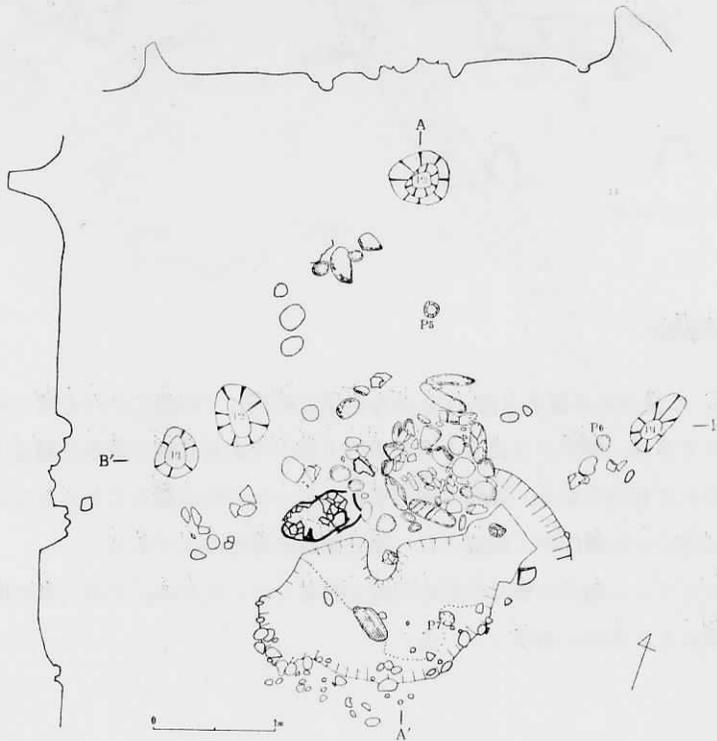
遺 構

第1地点における遺構は、炉址、石組遺構、ピット、溝状遺構などが出土している。また第3地点においては、方形住居址が知られたのである。第3地点は萱場工業の青年学校のため整地されたり、また住宅地として基礎工事などにより攪乱されているため遺構の全貌を知る事が困難であった。

1 炉 址 (図版5)

第1地点の9D14の地点において、第2地層下に挿図6の様に川原石15個をもって囲んだ直径90cmの炉址が見られ、炉址の内面にも同様な川原石が大小27個敷かれていた。また炉址の西南の地点に合口甕棺が出土している。この炉址を中心とするプランは確認する事が出来なかつ

挿図6 第1地点炉址合口甕棺実測図



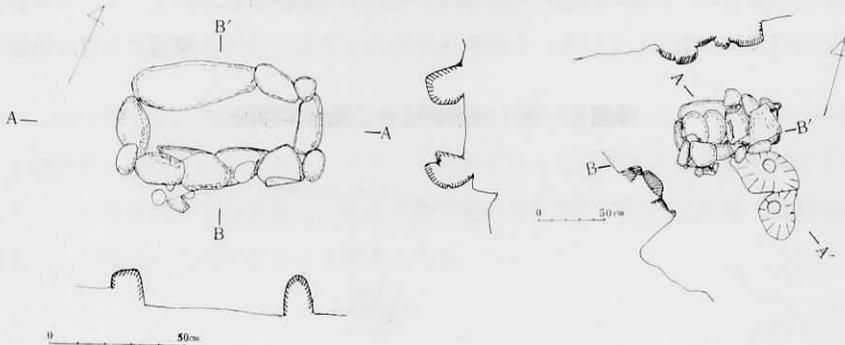
た。しかし挿図6に知られる同住居址の柱穴と見られるものが四カ所見られた。その大きさは P 1—34×42×51cm, P 2—42×53×43cm, P 3—50×42×105 cm, P 4—25×56×82cmである。

また炉址の北に2個の細長い石が炉址面と同じ高さの所に埋められている。これは明瞭に同時に施設されたものである。炉址の南の部分に礫層まで攪乱による掘込が見られた。

2 石組遺構 (図版5)

挿図7に見られる様な 9-B 9, C 9の所に12個の川原石によって長方形に囲んだ石囲の上
に扁平な川原石による蓋石をした長径75cm, 幅48cmの石囲遺構が検出されたのである。石囲内
よりは、石斧の破片1点が東隅の石にそって見られた。発掘当時の所見によるとこれは意識的
に入れられたものでなく石囲を造る時に混入されたものと考えられる。

挿図7 石 組 遺 構

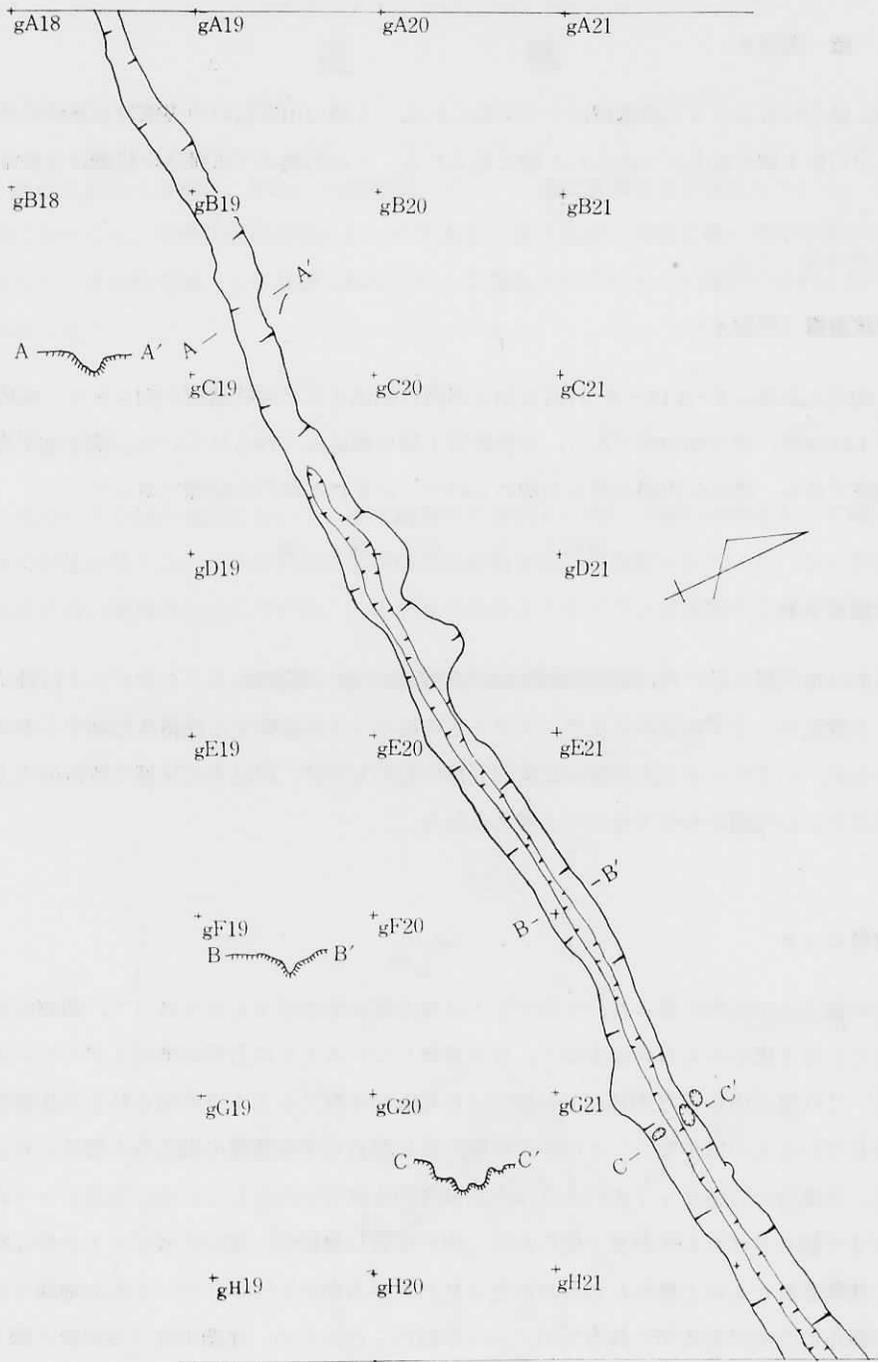


3 石 囲 (図版52)

9-H15H16, に見られる様に川原石を長方形に配列して内部に小石を敷いたものの一部
分が出土したのである。層序から見ると第2黒色土層中であり基盤の黄色土層までに至らず第
2層中に設営されたものである。周囲に掘込まれたビットのため掘りこわされているのと、基
底部の石以外は浅いため耕作中に破壊され一部分確認出来たのみである。

この遺構はかつてこの地点に多く小形の円墳が存在していたため、その一基の床面の一部と
考えられる。現にその東に一基残っている。

插图8 第1地点溝状遺構実測図



4 石組 (図版8)

同図に見られるような石組遺構が1カ所知られる。5個の川原石の中央部に石冠状の石を置き東に小石が4個その上につめられた様に見られる。この石組の下は埋込の状態は全然認められなかった。

5 溝状遺構 (図版4)

第1地点の北端にg-A18～g-H21に至る東西に掘込まれた溝状遺構が知られた。溝幅は広い所で140cm狭い所で80cm程であり、黄色砂質土層を掘込んで作られていた。深さは平均して60cm前後である。溝内に円礫の流入が認められた。いずれも浮石の状態であった。

6 大型ピット

平面形は楕円形に近い角ばった東西4mの大型のピットが見られる。このピットは他のピットによる攪乱や、くずれ込みにより、プランとそのピットの意味する性格を把握する事が出来なかったが、いずれにせよ山茶碗の比較的完形に近いものが、流込んだ状態で数個体出土している点よりこの時期のものであろうと考えられる。

7 方形ピット

方形の掘込みが各所に見られ、このピットは長方形の形を示すものであって、明確に原形をとどめていると思われるものは少なく、また重複しているために方形の形がくずれているものもある。これ等の中から方形ピットと推定されるものを数えると1カ所知られるが比較的明確に残されているものは少ない。この中には明らかに最近の芋貯蔵用の掘込みと認められるものもある。大部分の方形ピットの内からは山茶碗等の小破片が出土している。方形ピットの中には礫床まで掘りさげたものが多く見られた。中には合口壘棺の一部が方形ピットを作る時に明らかに切断されたものと思われるものが見られた。長方形のピットについてこの地域では芋等の冬期保存のために至る所に長方形のピットが設けられるため、発掘中及び発掘後に種々の疑問を持って調査をしたのである。そこで次の様な調査を行なったのである。先ず旧所有者と土地区画による方形ピットの方向と規模の関係をみると次の様な関係が知られたのである。同一

所有者の区画土地内において方向と大きさがほぼ一定していることが知られる。なお畑境に対して平行、または直交してピットが掘られている事が知られる。

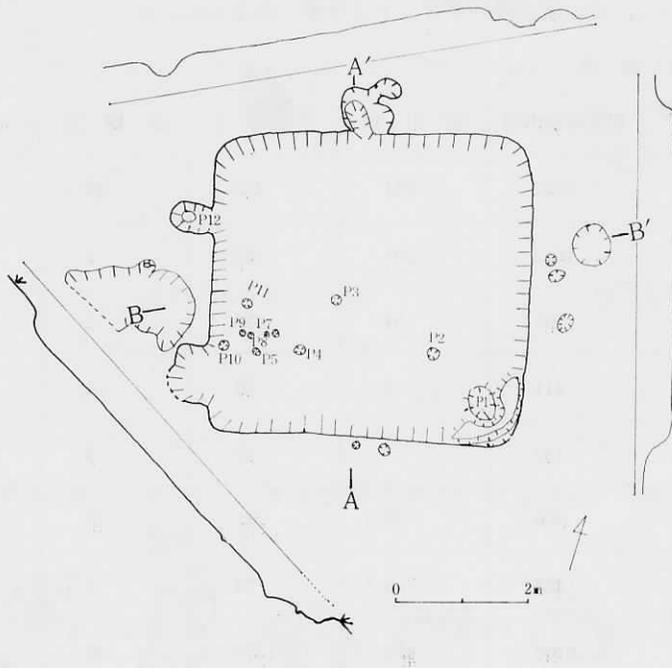
8 その他のピット

柱穴と思われるピットまたはその他の不定形な掘込が見られるがいずれも攪乱等によってその性格を知る事が出来なかった。

9 住居址

第3地点において方形の住居址と推察される黄色土層に方形の掘込が見られた。径は4.5mであり、住居址内に柱穴と推定するには、やや問題があるが一応ピットとして4~5cmの深さの凹が見られたのであり、21cmのものが西壁の部分にそって掘込まれた所に一カ所だけ見られた。また底面より10~15cm上より土中に土師式土器及び土製鏡が出土したのである。ピットの深さは、P1—5.5cm, P2—5cm, P3~P11—4cm, P12—21cmである。

挿図9 方形住居址実測図



石 製 遺 物

1 打 製 石 鏃 (図版42, 43)

打製石鏃の出土状態を見ると、第一地点、7,883点で、次の第三地点が191点であり、第二地点ではわずかであるが出土している。特に当遺跡の中心地点とされる第一地点における出土数は非常に多く、層序的に見ると、第一層表土耕作土層より第二層の攪乱土層に、より多く出土を見たのである。これは、比較的新しい時代(中世頃)まで攪乱が知られる点より当然である。この下層に黒色の土層がありこの土層は地点によって浅深の差があるが、大体全域に認められたのである。全般的に土器片等が多く出る土層及び地点からは石鏃が多く出土している。

グリット別にその出土数を見ると下表の様である。

これにも明らかなように、第一地点の北部に東から西に知られる溝状遺構に対して、黒色土層が深くなっていて、その溝に近いグリットより多く出土している。

第1表 第 1 地 点

型 \ 石 質	黒雲母安山岩	安 山 岩	チャート	黒 耀 石	合 計
鍬 形	2322	244	433	19	3018
三 角	1612	104	325	2	2043
有 柄	561	51	116	1	729
柳 葉	111	7	36	1	155
そ の 他	138	7	43	4	192
不 定 形	906	35	252	16	1209
破 片	458	3	74	2	537
	6108	451	1279	45	7883

◎不定形はいずれにもつきがたいもの

その他、石鏃の多量に出土した地点は、後世の土壙墓、または農作業による深掘りがさけられた地点に当遺物がよく残されているが、これらの文化期における攪乱または流入等によって土器片石器類が、層序的出土を示さず、各時期のものが伴出出土している。

従って図表に示すごとく石鏃も色々な型のもものが出土している。

第一地点における石鏃を分類してみると前頁の表の様に出土しているのである。

器型及び石質から見ると、鏃型鏃が一番多く中でも黒雲母安山岩が全体の約30%を占めている。

第2地点、第3地点は下表の如くであるが、この地点は全面発掘でない為、その数も少量である。

第2表 第2地点

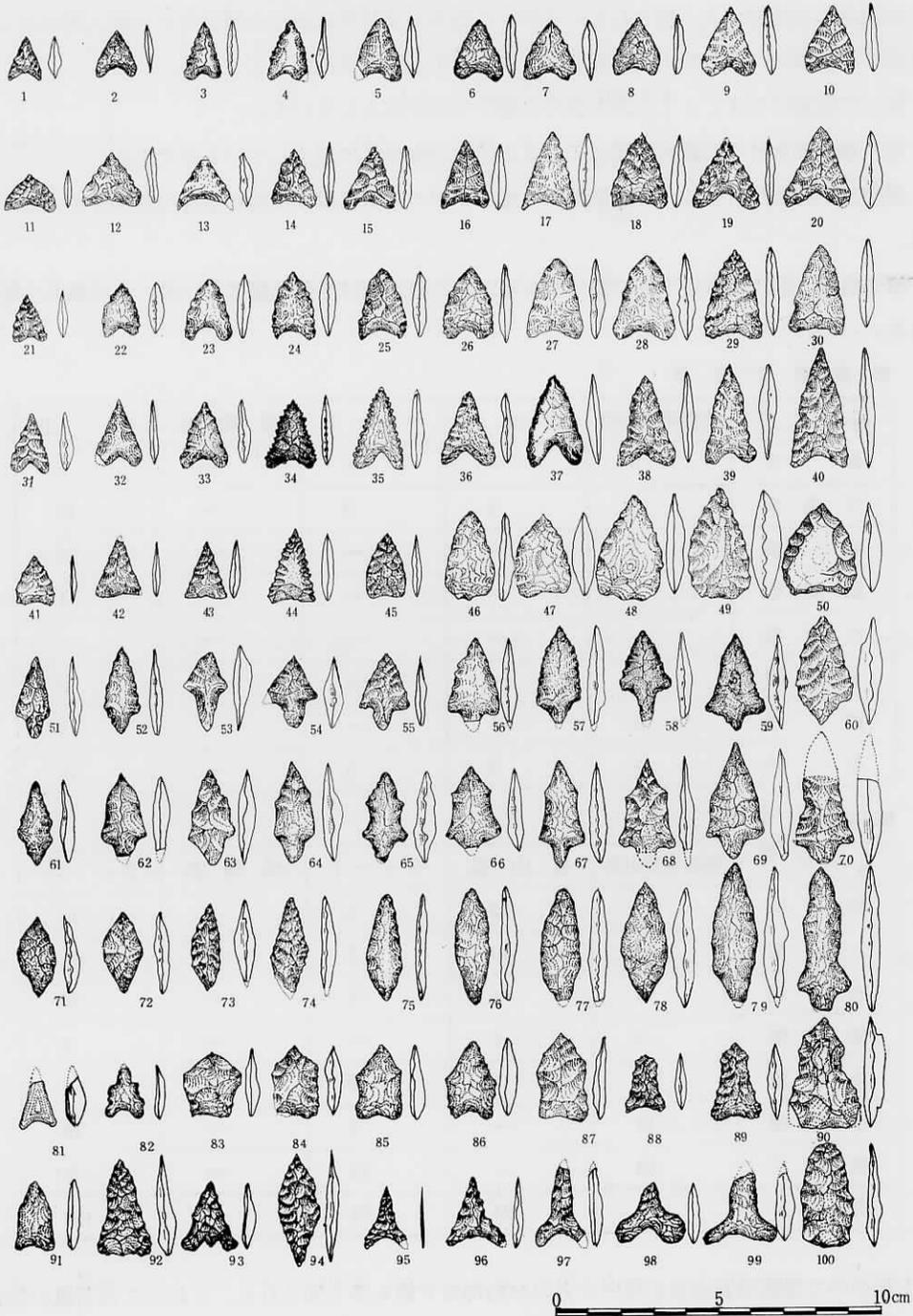
型 \ 石質	黒雲母安山岩	安山岩	チャート	黒耀石	合計
鏃型	5	—	—	—	5
三角型	5	2	5	—	12
有柄	3	—	—	—	3
柳葉型	1	—	—	—	1
その他	—	—	—	—	—
不定型	2	—	—	—	2
破片	3	1	—	—	4
合計	19	3	5	—	27

第3表 第3地点

型 \ 石質	黒雲母安山岩	安山岩	チャート	黒耀石	合計
鏃型	28	12	5	—	45
三角型	44	10	7	—	61
有柄	14	—	2	—	16
柳葉型	3	1	—	—	4
その他	6	1	2	—	9
不定型	13	—	3	—	16
破片	28	—	12	—	40
合計	136	24	31	—	191

上記の中で黒雲母安山岩を用いたものが約78%で最も多く知られる。これはこの石鏃の母岩となる原石が下呂町に産出するものを使用したのである。石核を見ると川原石として礫皮面が認められるものが見られる。また黒耀石の少ない点も注意すべきである。(大江 命)

插图10 第1地点打製石鏃実測図



2 打製石斧 (図版47)

第1地点1,064点, 第2地点29点, 第3地点212点, 今回の調査で総数1,305点出土している, その内完形品は92点である。短冊形と撓形の二種類に大別される。石質は絹雲母緑泥片岩, 緑泥片岩である。

以上のものを長さで分けると次の様である。1. 長さ10cm前後, 幅4~6cm, 厚さ1cm前後の短冊形のもので約半数である。2. 長さ11~17cm, 幅4~6cm, 厚さ1.5~2cm前後の短冊形のもの, 3. 刃部が広がっている撓形のもの。4. 挿図12の1のように大形で反りがあるものの四種に大別する事が出来る。

3 磨製石斧 (図版46)

第1地点106点, 第3地点1点が出土している。その内17点のみ完形を知る事が出来る。これを型的に分けると定角石斧と遠州形石斧と撓形石斧に分けられる。特に遠州形石斧の刃部を観察すると, 斜刃状になったものが7点認められる。石質は蛇紋岩と緑泥片岩, その他である。

4 石 錘 (図版45)

第1地点121点, 第3地点23点, 合計144点出土している。川原石の長軸の両端を打欠いたもの, 第1地点111点と第3地点23点出土した。また短軸両端を打欠いたものが1点見られる。長軸の両端や全長に磨込の溝を有するものが出土している。重さの平均は30.4gであって, 最大は251gであり最小は5gである。

5 石 錐 (図版44B)

第1地点から232点, 第3地点から6点出土している。石質は黒雲母安山岩及びチャートである。その比率は約 $\frac{1}{3}$ の71点がチャートである。頭部が三叉状のもの31点, 頭が大きく菱形のもの36点, 頭部が小さく二等辺三角形のもの27点, 挿図11の28~30のように頭部が大きく錐の部分が小さなもの7点, 頭部が挿図11の23のように凸形状のもの2点あり, 有頭のもの103点出土している。その他は破損品または頭部の顕著でないものもある。石質は黒雲母安山

岩，チャート，その他である。

6 石 匙（図版44A）

第1地点において横形つまみが作り出されているものが15点出土している。石質は安山岩4点，チャート11点である。

7 スクレイパー（図版50A）

剝片などに刃部に調整痕の認められるものなどが出土している。

8 石刀・石棒

第1地点より64点，第3地点より5点の69点が出土している。2点をのぞいては小破片ばかりであり分類し難いものが多い。断面を見ると，扁平な楕円状のもの，背の部分がやや幅広く作られているものがある。頭部に文様が彫刻されているものが3点，また斜めの刻み目を入れたもの2点，×印の沈刻をみるもの4点，波状の刻文のあるもの1点，沈線だけのものが2点あった。また背部に一条の溝がつけられているものが3点，挿図12の9のように一部分が欠けているが，長さ29.8cm，幅3.2cm，厚さ2cmのもので石質は粘板岩である。

9 石 冠（図版49A）

第1地点より6点の石冠が出土している。図版は8A，高さ14.8cm，幅17cm，厚さ14.1cmで，白い花崗岩の表面を下部より7cmほどから上を敲打して段をつけて石冠状を示している。出土状態も前述のように石組遺構の中より検出された。

挿図12の5は，高さ7.3cm，幅9.3cm，厚さ6.9cmのもので頭部はハマグリ刃状にしてあり，下面に径7.1cmの楕円の凹みがある。他にそれよりもやや小型のが1点と，高さ5.5cm，幅7.5cm，厚さ6.3cmで下面に径3.8cmの凹みを持ち，頭部は，稜に対して丸く仕上げられている。また図版49Aの右下は高さ7.7cm，幅6.4cm，厚さ4cmで，磨製石斧の破損品を再利用したと思われるが，下面に4.8～2.9cmの径の楕円の凹みを有している。その他一部欠けている石冠が出土している。

插图11 石器类实测图

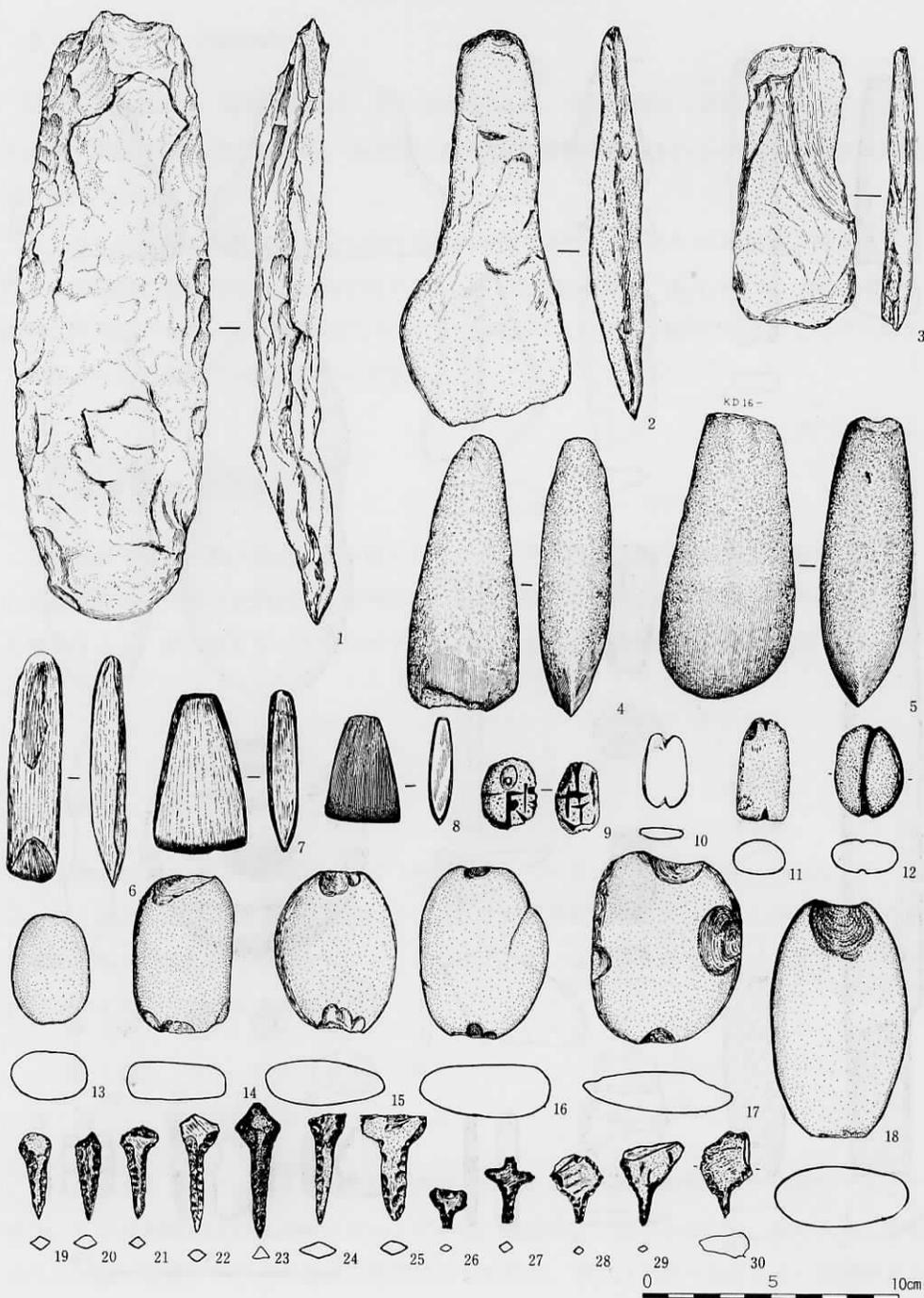
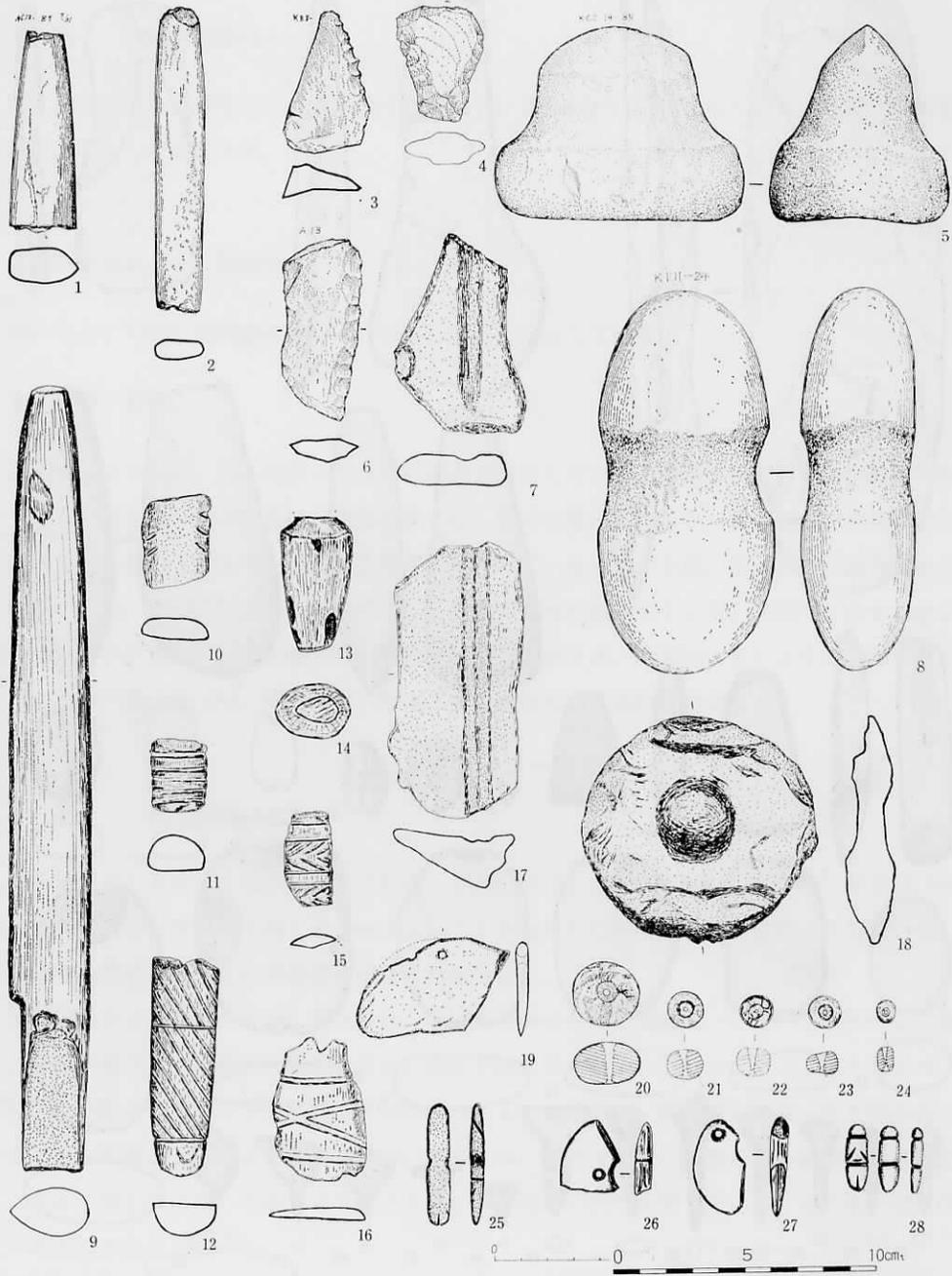
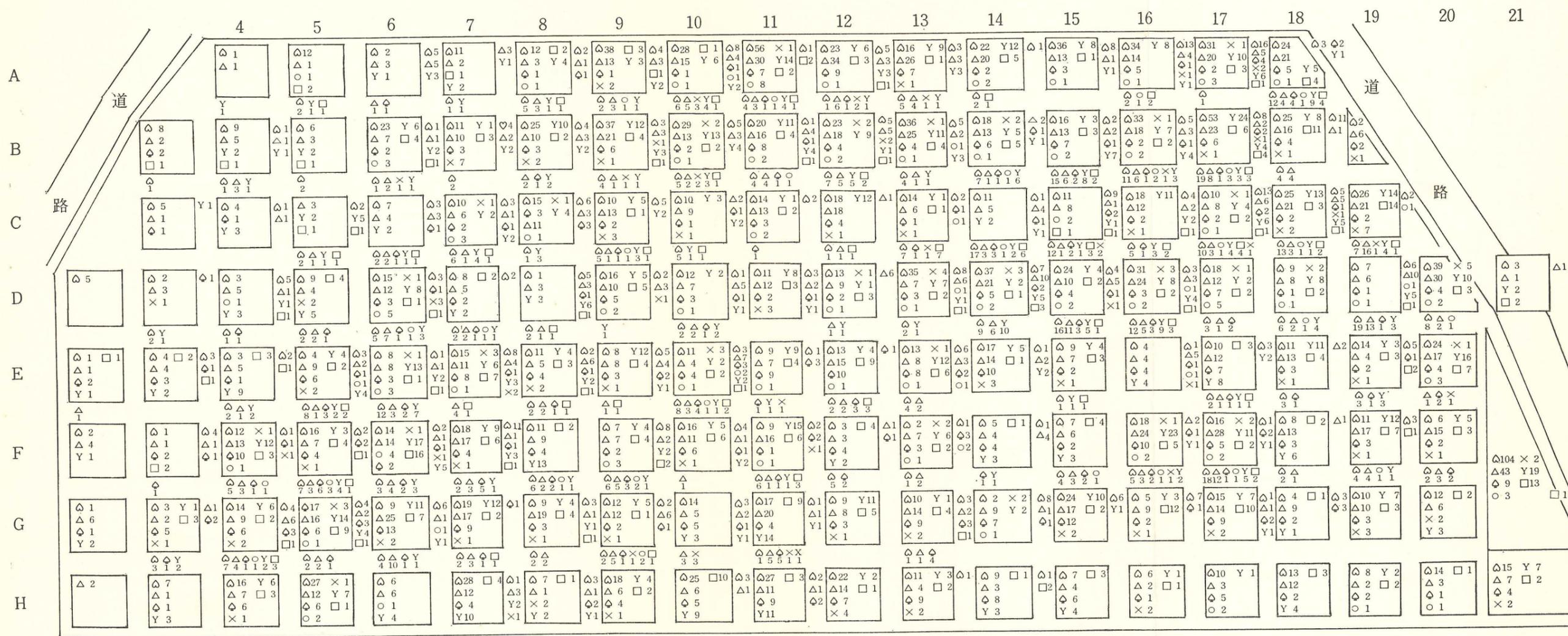


插图12 石器类实测图

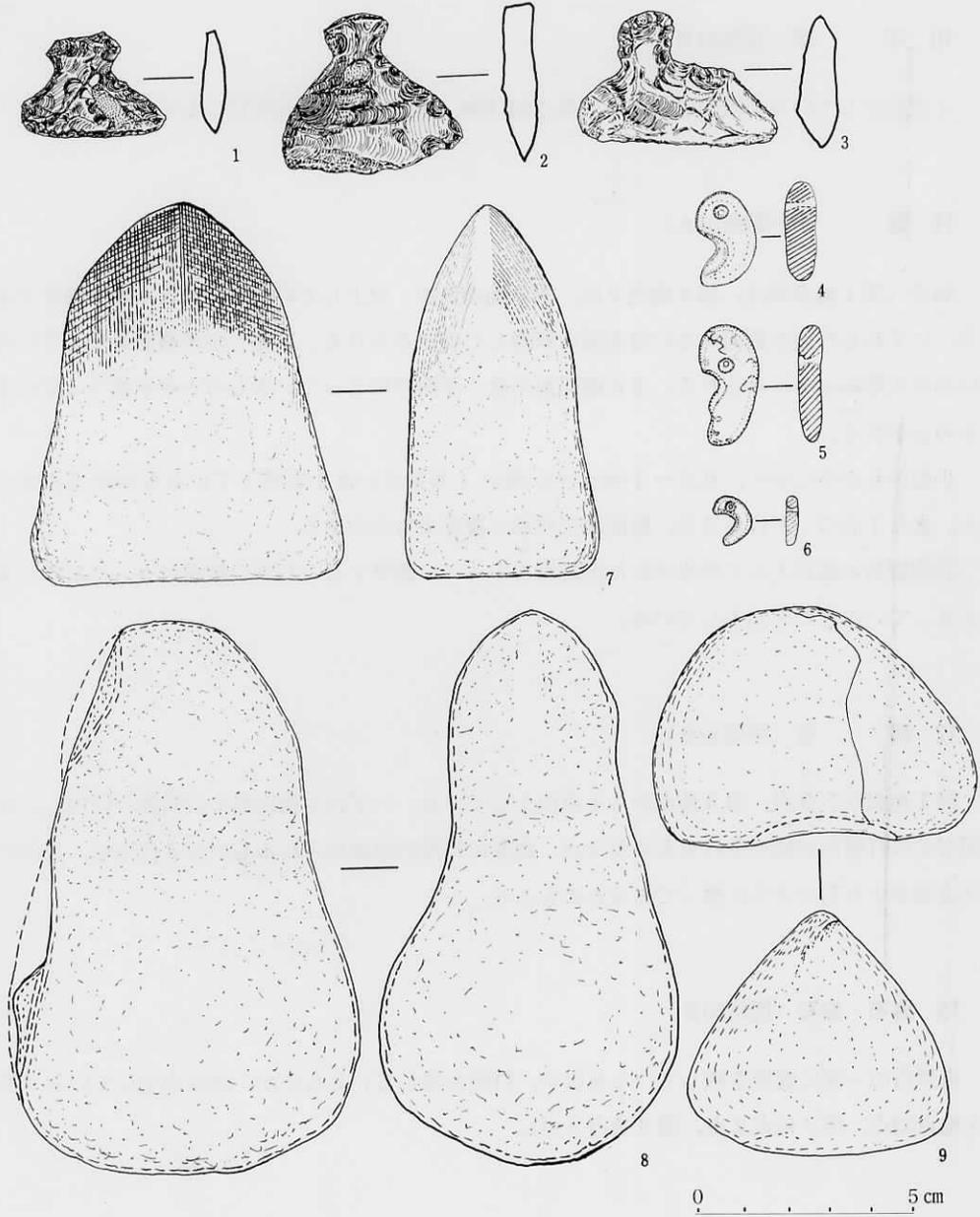


挿図13 第1地点 グリッド別、石鏃種別出土数表



鋳型...♡ 三角...△ 有柄...◇ 柳葉...○ その他...× 破片...Y 不定形...□

插图14 石器类实测图



10 石 皿 (図版51B)

1点出土しているが安山岩であり、長さ24.6cm、幅17.8cmの楕円形状のものである。

11 砥 石 (図版51A)

93点(第1地点83点、第2地点2点、第3地点8点)出土しているが、ほとんどが断片である。いずれも片面か両面あるいは全面に研磨した痕がみられる。片面しか研磨面を残していないのは大形のものにみられる。また磨耗面が全く平面状になっているものとやや波うっているものがある。

小型のものの中に、0.8~1cmほどの溝が1条あるいは2条残しているものが5点あった。また1点づつではあるが、断面が三角形と菱形のものがある。

石英斑岩の砥石として使用された磨耗面をルーペで観察すると石英の粒子がへったように丸くなっているものも出土している。

12 凹 石 (図版50B)

第1地点から9点、第3地点から1点出土している。いずれも楕円形の自然礫を使用し、片面だけに打痕凹が認められるものが2点、両面に打痕凹が認められるものが8点ある。なかには表面がすり石のように擦ってあるものもある。

13 磨石・敲石 (図版50B)

自然石の一部に磨痕を残しているものや、打痕を残しているものが、38点出土している(第1地点33点、第2地点2点、第3地点3点)。

14 独 鈷 石 (図版49B)

2点出土しているが、いずれも第1地点のものである。2点とも長い自然礫の長軸のほぼ真中に幅3cmほどを溝状に敲打して作ってある。両端は丸くなっている。挿図12の8は、長さ14.4cm、幅6.8cm、厚さ4.4cm、重さ670gで全面磨いて仕上げている。他のもの同形で長さ14.9

cm, 幅7.1cm, 厚さ5.8cmで重さ908gであるが, 中央の帯状の敲打溝より一方の頭部の方へ上下両面ともに幅2.5cm, 長さ5cmほどの敲打面が見られ, 独鈷石に類するものと考えてもよからう。

15 石包丁 (図版49C)

第1地点から破片が1点出土している。2孔を有するが, 厚みが0.5cmで刃部は両面より研磨されている。(挿図12の9)

16 軽石石器 (挿図11の9)

第1地点での表面採集品ではあるが軽石製で, 長さ2.7cm, 幅2.1cm, 厚さ1.7cm, 重さ2.8gで中央よりやや上部に0.3cmほどの穴が両面より穿孔してあり, また表面には沈線が見られる。

17 円盤状打製石器 (図版49D・挿図12の18)

第1地点のg-G15から緑泥片岩の径9cm, 厚さ1.9cmでほぼ真中に2.8cmほどの径で両面より深さ0.5cmの凹みが認められる打製のものである。

18 塊状耳飾 (挿図12の26.27)

第1地点より完形品ではないが3点出土している。いずれも硬玉製で光沢があり青味がかっている。挿図13の26は, g-E11から出土したもので, 長さ2.8cm, 幅2cm, 厚さ0.7cmである。挿図13の27は, D4.5セクションから出土し, 長さ3.7cm, 幅2.2cm, 厚さ0.7cmのものである。以上2点とも0.4cmの穴が両面より穿孔されている。他の1点は, GH6セクションから小破片が出土している。いずれも縄文式前期のものと思われる。

19 勾玉 (挿図13)

第1地点より3点出土している。一つは長さ2.8cm, 幅1.4cm, 厚さ0.5cmで末端部にきざみ目が入れてある。他の2点は, 長さ2.2cm, 幅1.3cm, 厚さ0.9cmのものと, 長さ1.3cm,

幅0.7cm, 厚さ0.8cmのものであす。3点とも勾玉としては小形のもので、孔のあけ方は、一方よりあけてあるので0.4cmの径の面と0.1cmほどの径の面とがある。

20 小 玉 (挿図12の20~24)

径1cm以下のものが14点、径2.4cmのもんと、破片で径1.7cmのものが第1地点から出土している。白っぽい滑石製のものが多い。g-D11からは5点固まって出土している。

21 磨製石製品 (挿図12の28.25)

第1地点のg-B17より、粘板岩で作った長さ2.5cm, 幅0.8cm, 厚さ0.3cmのもので一面にやや太い沈線が二本入っていて頭部と脚部との境を表現しているようであり、脚部と胴部との境界沈線より斜上部に向かって二本の細い沈線が入れてあり、脚部にあたる中央に端より0.6cmの沈線が入れてある。その裏面に、太い沈線以外には何も入れてない。

他の1点も第1地点のg-H9から出土したもので滑石製と思われる。長さ4.6cm, 幅0.8cm, 厚さ0.4cmの筥状のもので沈線が入れてあるが、風化がひどく鮮明でない。

上記以外に多数の石屑、石核が採集された。(申島勝国)

縄文式土器

第一群土器

縄文式早期末または前期初頭に属するものを本群としたのである。

1類(挿図15の1)に見られるように、口縁部の凸起した部分が一点のみ出土している。器内面に荒い条痕が施され、凸起の部分は楕円形をなし、その外縁に刻み目を施している。色調は黄褐色で、焼成は普通で胎土に繊維を含んでいる。この土器片は柏畑式に比定されるものである。

2類(挿図15の2.3)のように薄手で貝殻条痕が見られ、また器内に指痕の見られるものが出土している。同図2は器面に斜条痕が見られ、また内面には横に条痕が見られる。同図3は格子目状に条痕が引かれていて内面にかすかに指痕が見られる。色調は黄褐色で、器厚は0.4cm前後で、胎土は緻密で焼成は良好である。^{註1}

第二群土器

本群は縄文式前期前葉の土器で、アナガラ属貝殻の腹縁による突刺文を有する土器群を一括したのである。これら1類～6類の土器は石塚上層式に比定されるものである。^{註2}

1類(挿図15の4～10)に見られる貝殻の腹縁により、横に二列の帯状の突刺による文様を有している。口唇上に工具による刻み目が見られる。器面の内部にまで土器の表面からの突刺の痕が見られる。口唇がわずかに張り出しているのが特徴的である。色調は淡黄褐色であり、器厚は0.4cm前後である。胎土は緻密で焼成は良好である。

2類(挿図15の11～15)口縁部が外反する器形を示し、1類とは施文体が異なり、貝殻腹縁の凹凸の3～4cmの長めのものを縦位に使用している。内部に条痕文を有している。色調は黒褐色であり、器厚は0.4～0.5cmである。焼成は良好で、胎土に少量の砂を含んでいる。

3類（挿図15の16～19）貝殻腹縁の凹凸が5～6の見られるもので、その施文が斜めであり、2類に見られる内面の条痕は全く見られない点が相違する。同図16は押引の痕が見られる。内面はいずれも指圧痕が見られる。黄褐色と黒褐色である。器厚は0.4～0.5cmであり、焼成は良好で、胎土は緻密である。

4類（挿図15の20～24）貝殻の腹縁の凹凸凹、または凸凹凸の短いものを使用して施文したものであり、同図20、21は口唇部にかすかに刻み目がある。同図22は内面に条痕が認められる。色調は灰褐色と赤褐色で器厚は0.4cm以下である。

5類（挿図15の25～30）貝殻腹縁かへら状工具か不明であるが、突刺による羽状または連続文の施文が見られる。内面に指痕の見られるものもあり、色調は灰褐色と黒褐色である。器厚は0.4cm前後であり、焼成は良好である。

6類（挿図15の31、32）貝殻を整形した工具と思われるもので、横位に押引したものが2点出土している。同図32は口唇部に刻み目が見られる。色調は茶褐色であり器厚は0.4cm、焼成は良好である。胎土は緻密である。

7類（挿図15の33）に見られる様に、1点であるが貝殻工具によって施文が見られ、その下に斜めの縄文が見られる。色調は黄色で焼成は良好であり、器厚は0.5cmである。

第三群土器

縄文式前期の土器で半截竹管文土器を本群としたのである。施文用具の使用法・文様構成によって次のように分類出来る。

1類（挿図15の34～36）は突き刺し爪形文を有するものであり、色調は黒褐色と黄褐色で器厚は0.4～0.5cm前後である。焼成は良好であり三点出土している。同図34は口唇部に刻み目を入れている。

2類（挿図15の37～41）は平行沈線を伴う突き刺し爪形文を有するものであり、色調は茶褐色で器厚は0.5cm前後である。焼成は良好であり、5点出土している。同図37は地文に斜縄文を施している。同図39は平行沈線となっていないがこのタイプであると考えられ、内面に擦痕が見られる。

挿図15 縄文式早期・前期前葉～後葉土器拓影



挿図16 縄文式前期後葉～中期前葉土器拓影



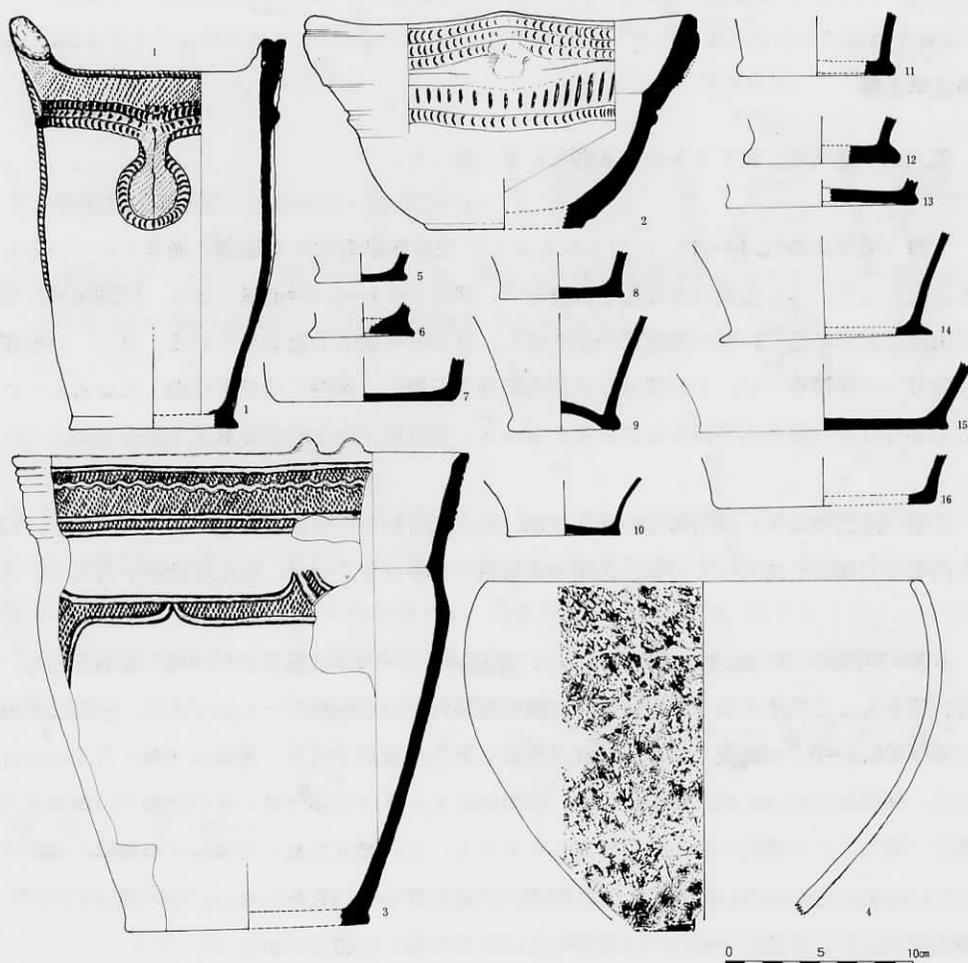
3類（挿図15の42～43）は平行沈線文を有し、色調は黄褐色と赤褐色で器厚は0.4 cm 前後で、二点出土し、共に内面に指痕が認められる。焼成は良好であり、胎土は緻密である。

第四群土器

縄文式前期後葉の土器で細い粘土紐を土器の表面に貼りつけたもので、施文・加飾方法で次のように分類した。

1類（挿図15の44～65）は細い粘土紐を貼りつけ、半截竹管の爪形によって粘土紐を固定さ

挿図17 縄文式中期土器及び前期中期底部実測図



せる方法を取っている。無文の地文の上に貼りつけたものと、縄文の地文の上に貼りつけたものに分けられる。色調は茶褐色と赤褐色で器厚は0.4 cm前後である。同図60は指痕が表裏に認められる。同図44. 45. 55. 57～60は口縁部を内部に折りまげ、口唇上に刻み目を施し、更にその一部に細紐を二列に貼りつけ爪形文を施しているものも見られる。

2類（挿図16の1～30. 35）は細い粘土紐を貼りつけ、縄文またはへら状工具で固定させる方法を取っている。細紐貼りつけ後器面に縄文を施文したもの、細紐の隆線部のみに縄文またはへら状工具で押しつけたもの、細紐を貼りつけたものなどがある。色調は黄褐色と茶褐色で器厚は0.4～0.6 cm前後である。同図10～13の口縁部は内反している同図18～21. 24～26. 28. 30. 35の口縁は1類に見られるよう内部に折りまげ、口唇上に刻み目を施しているものと、折りまげに当る部分を貼りつけたものもある。同図32～34の口縁は細紐の貼りつけが見られないが本類と考えられる。

第五群土器

縄文式中期初頭に属するものを本群として一括した。

1類（挿図16の31. 40～42）に見られるような三角形印刻文を口縁部に施文されているもの4点出土している。色調は茶褐色と黒褐色で、器厚は0.4～0.7 cm前後である。同図36は口唇部の山形の頂点に馬てい形の吸盤状凸起を有し、以下貼り紐の凸起が見られる。また、口縁部には貼りつけ隆帯をつけ、この部分に三角形印刻文を施し、両端には爪形を施している。これらの土器片は十三坊台式平行のものと考えられる。^{註3}長野県では下島式直後式土器とされている。

2類（挿図19の1）は斜縄文の地文で細い粘土紐を貼りつけた隆線部に爪形文を施し、口唇上内部まで縄文を施文している。色調は茶褐色で器厚は0.7 cmで、胎土に微砂を含んでいる。

3類（挿図16の37. 38. 43, 挿図17の1. 3, 挿図18の1～6）は無文または縄文を地文とし、半截竹管をもって爪形文及び平行沈線の文様を施したものを一括したものである。色調は茶褐色で器厚は0.6～0.7 cm前後である。焼成は良好で胎土は緻密である。本類は五領ヶ台式に比定される。挿図16の37. 38. 43, 挿図17の3, 挿図18の1～6は半截竹管の平行沈線で口縁部及び胴部を一周し、その帯状の間に縄文を施したものと、その縄文を施した部分に鋸歯状に刻印を施しているものがある。挿図17の1は数条の半截竹管の平行沈線を施し、その部分に爪形の文様を施文している部分と貼りつけ隆帯の上に爪形を施した部分がある。

插图18 繩文式中期前葉拓影

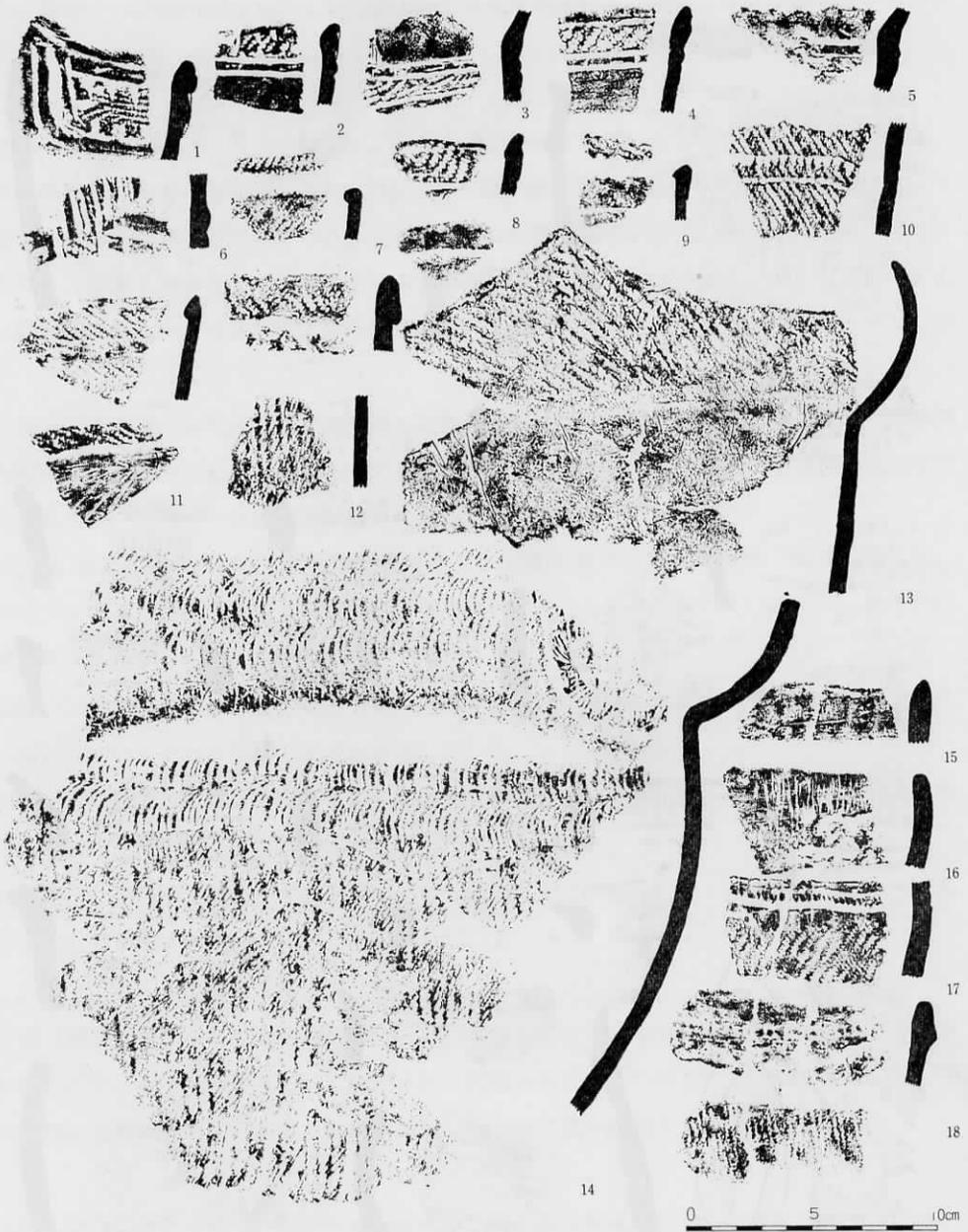
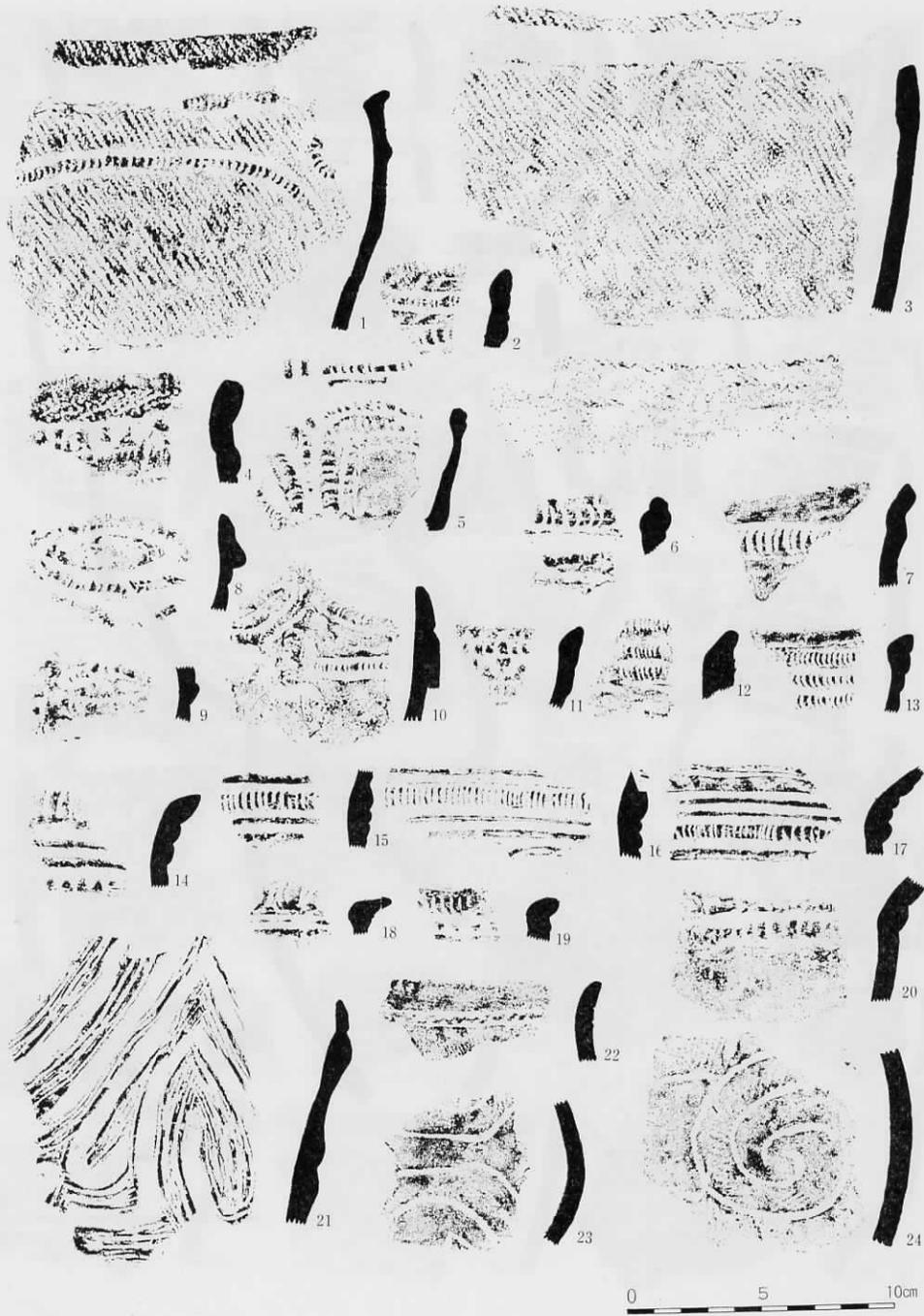


插图19 縄文式中期及び後期拓影



4類（挿図18の10.12～14）同図14はキャリパ状の波状口縁を示し、地文に斜縄文が施されている。色調は茶褐色で器厚は0.6cmで大形の爪形文が施され、鷹島式に比定される。^{註4}その他、同図10.12もこの鷹島式に比定されるものであろう。同図13はキャリパ状の皮状口縁部にみに縄文が施文されている。図版12Aも同図13と同じ施文方法である。

5類（挿図18の7～9.11，挿図19の3）は斜縄文の地文に、口縁部を土器表裏に折りまげ、その部分にも縄文で施文している。色調は茶褐色と黄褐色で器厚は0.5～0.6cm前後で胎土に少し砂を含むものもある。

6類（挿図17の4）は粗い斜縄文を施し、口唇上に刺突による刻み目を入れている。色調は茶褐色と黒褐色で、器厚は0.5cmで胎土に砂を含んでいる。

7類（挿図18の15.16）は口縁部に細い不規則なヘラがき沈線文を施しているもので、色調は茶褐色で器厚は0.7cm前後である。同図16は地文に斜縄文が施されていることが知られる。

8類（挿図18の17.18）は縄文と爪形による施文を施している。

第六群土器

縄文式中期初頭から中葉に属するものを本群として一括した。

1類（挿図17の2，挿図19の2.4～20）は爪形文と平行沈線文を施し、色調は茶褐色と赤褐色で、器厚は0.7～0.8cm前後で、胎土に少量の砂を含むものもある。

2類（挿図19の21）に見られる様に、口縁部が波状を示す部分であり、文様構成は半截竹管文が数条引かれ、またその部分に沿って凹線が引かれる事によって浮出させている。器厚は1cm内面はヘラにて磨かれている。^{註5}

第七群土器

縄文式後期に属するものを本群として一括した。

1類（挿図19の23.24）は磨消縄文の手法による渦巻文をもった土器で器厚は0.5～0.7cm前後であり色調は黒褐色である。その他に口縁部に小指大の凹文を有するものもある。

2類（挿図20の12～18）口縁部はなだらかに内反または外反し、半截竹管あるいはヘラ描きによる平行沈線文による波状文を有するものである。器厚は0.5～0.8cm前後で色調は黒褐色灰褐色で胎土に砂粒を含んでいる。

3類（挿図20の7～11）は口縁部に斜縄文を施し、器厚は0.5cm前後で口唇部に行くほど厚くなっているものもある。色調は黒褐色、茶褐色で胎土に砂粒を含んでる。

4類（挿図20の31～37）楕描の波文が見られるものである器形は口縁が波状を示すものやや外反するものなどがある。これらは伊川津貝塚などに定比される。また線と楕描文が見られるものもあり、本類は器厚0.4～0.6cm前後の比較的薄手の土器であり、ヘラによって器面を磨いた痕跡のあるものも見られる色調は褐色、黒褐色、黄褐色で少量の砂粒を含んでいる。また口縁部に小指大の凹文を有するものもある。

5類 その他口縁部に肥厚く貼りつけ隆帯を有しヘラ描き沈線の文様を施したもので、色調は茶褐色であり、胎土に砂粒を含んでいる器面はヘラでなめらかに磨きを施しているものなどあり。（大江 上）

第八群土器

縄文式晩期に属する土器は、亀ヶ岡式土器、あるいはその影響の中で発生した土着的文様を有するもの、また西日本的な無文粗製土器の影響の強い土器等によって構成されている。精製土器、半精製土器、粗製土器が知られる。文様・器形・土器の精粗、既に型式設定されている類似土器などに随って分類したのである。

1類（挿図21）三叉文・入組文が見られる精製・半精製土器を本類となしたのである。

A皿形の器形を示すもので磨研された精製土器で、三叉文と入組文が見られるもので挿図12の1～3は、同一個体の土器片であり、口縁部は突起をなし、入組文と彫刻的な三叉文が見られる。内面も彫刻的三叉文が突起のある内面に見られ、二条の沈線がめぐらされている。

插图20 繩文式後期晚期土器拓影



插圖21 繩文式晚期土器拓影



同図4の様に、沈線が完全に入組まないが、三叉文と沈線によって文様が構成されたものである。器形は口縁部が波状突起をなす皿形の土器と推定される。同図5.6も同類に近いものと考えられる。

2類(挿図21)は、三叉文と縄文によって文様が構成されているものを一括したのである。器形は鉢形のもので、挿図21の7は三叉文の一端が長く伸び沈線化している。それによって区割された部分にのみ縄文が見られる。同図9は口縁部の弧状沈線下の縄文帯の中に三叉文が見られる。器形は皿形をなすと推定される。同図13は双対する刳込三叉文が見られるものである。同図10は刳込の三叉文が縄文帯の中に見られ、内面に条痕が知られる。

3類 三叉文・沈線文による文様構成の見られるもので、挿図21の19は皿形の器形で口縁部が突起をなし、その突起の口唇が楕円形を示している。文様は三条の沈線が引かれ刳込んだ三叉文が見られ、内面に一条の沈線が認められる。

同図18.16は波状口縁をなす皿形の土器であり、文様は波状口縁部に連結三叉文が見られ、それに下からまた直交するように三叉文が見られるが、その部分で破れているので、かすかに痕跡が知られる。

同図17は小型の皿形の小破片であるが、内外面に研磨の痕がかすかに見られる。二つの三叉文が双対していてそれに沈線で文様を構成している。

同図18は口縁部が肥厚する縁帯をなす部分に文様を有し、その部分に縦に一線の沈線をはさんで双対した三叉文が見られる。

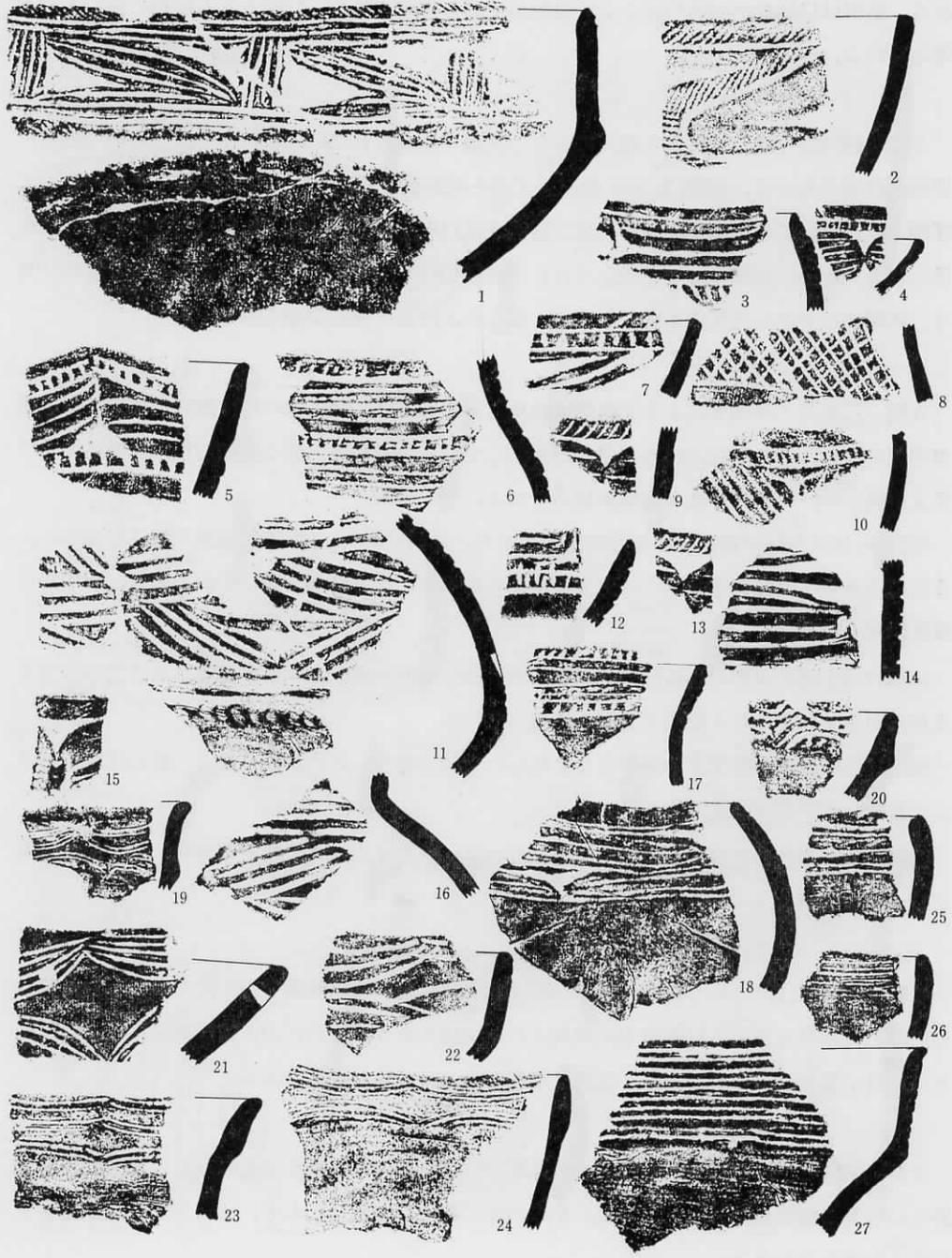
同図20は、黒色の光沢を示す魚眼状のはりつけ、三叉文の知られる土器片で、一片のみであるが出土している。

4類(挿図21.22)は、深鉢の器形を示し山形に突起する口縁部であり、その凸起した部分の口唇上に刻目が加えられその下に深刻された沈線があり、それによって浮線状に隆起した線の上に刻目が見られるものであり、色調は黒色でススの付着が顕著である。

5類 無文の皿形土器で、肥厚する口縁部で口唇上のみ文様を見るのみで、挿図21の24~29は口唇部に縦位に貼付した隆起線、その内部に縄文を施文したもので、また三叉状及び連結文のあるものなどがある。

6類(挿図22の1)に見られる様に器面の内外とも磨耗しているが器形は浅鉢で、口縁の文

插图22 繩文式晚期土器拓影



様帯の部分に三角形の彫去したものであり、同図2も同類と考えられる。これ等は八日市新保第7類A類に近似するものである。^{註6}

7類(挿図21の3~18)は、へら状の工具によって刻線による平行沈線が引かれ、三角形の刻込みがところどころに認められ、さらにその平行線間に小刻線が細かく加えられ、それが上下2帯~3帯が見られる。また挿図22の8のように格子状のものである。また同一個体の土器片に波状凸起をなすものが見られる。これは櫃原式に類似するものであろう。器形は皿形・壺形・鉢形で、器面は磨耗している。

8類(挿図22の19~27)へら状の工具による口縁部に細い沈線及び半截竹管等によって平行沈線文及び弧状の沈線文を有するものがある。滋賀里式に類似するものであろう。口縁部の文様帯はやや肥厚するも図20.23.24に見られる。

9類(挿図23の1.2.3.4.7.)は、口縁部に二対の小凸起があり、それを主体に口縁部に刻彫の文様を有し、口縁にそって平行沈線が引かれ、その間を刻している。

同図4は深鉢形の土器で、器面は精製されている。口縁部は、やや外反をして頸部に縄文が施されている。

同図1は皿形の器形を示し、口縁に二対の小突起が連的に見られ、表面は磨耗しているが精製されていた事が知られる。

10類(挿図23の5.6.8.9.)は、羊歯状文を有する土器が四個体分出土している。同図6は鉢形の黒色の鉢形土器である。

図8は口唇部に刻目を有し、口縁にそって二条の沈線があり、その下に縄文が施され、更にその下の二条の沈線の間羊歯状文が見られる。

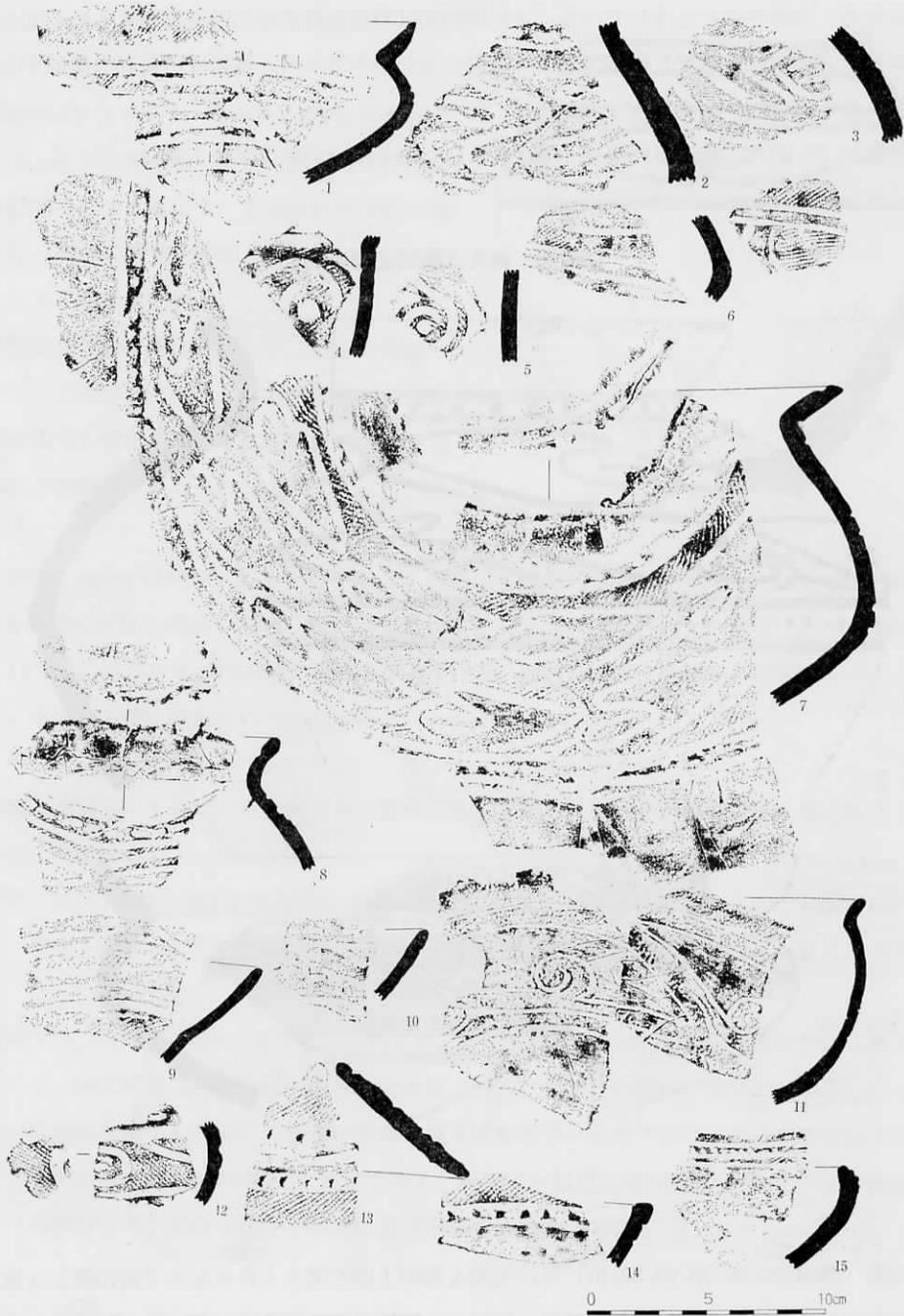
同図5は、く字状に外反する浅鉢の口縁部と推定されるものであり。口縁部に縄文が施され、また口縁内面のく曲した部分に羊歯状文が見られる。同図6.9も本類に属するものである。

11類(挿図23の10~19, 21~23)は、沈線と点列文と縄文が見られるものを一括して本類となしたのである。同図10.11.12は同一個体の土器であり、壺形の器形をなしている。同図12の口唇上に刻目を有しており、同図10の様に列点文が見られその下に沈線文が引かれ入組文状の文様帯が見られるのである。また同図17は皿形の器形をなすものであり、口縁部に縄文帯が見

插图23 繩文式晚期土器拓影



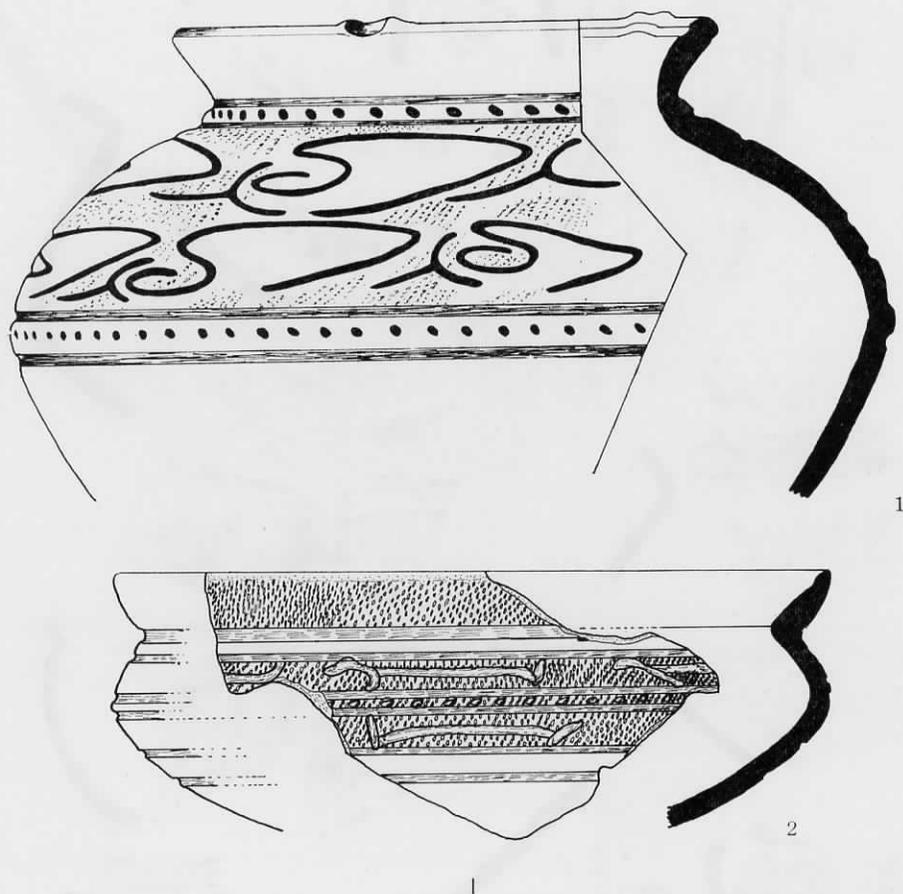
挿図24 縄文式晩期土器拓影



られ、三角断面の凸帯を有し、その上に縄文が見られその下に沈線間に点列を有する文様帯が見られる。朱彩がほどこされている。また同図20は刻目を有する凸帯を有するもの、また同図24に列点文のみのものまた同図25の様に凸帯の上のみ見らる。本類は中屋式に類似するものが見られる。

同図26. 28. 29. 30. 32は点列が長く引かれているのと、その胎土がやや異なっている。

挿図25 縄文式晩期土器実測図



12類（挿図23の26. 28. 29. 30. 31）は、大洞A系の土器と考えられるもので前10類とは異なっている。点列の突刺方法が前類と異なっている。深作川向上段遺跡などに見られる。^{註7}

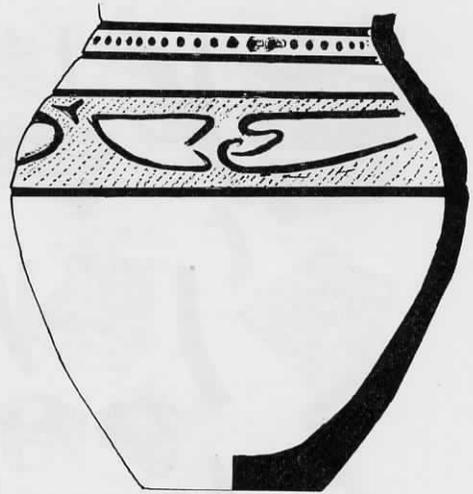
13類は、沈線または、沈線間に点列文を有するものが頸部から胴部の文様帯の区画をなして

いて口縁部に小凸起の見える磨消縄文の土器
またはこれらに類似するものを本類となしたの
である。

挿図23の2. 3. 6. 7. 8, 挿図25. 26などは壺形の
器形をなすのである。また, 同図11は口縁部
に小凸起を有するもので, 文様は三叉文の一端
がのび, 次の三叉文と連結している。鉢形の器
形を示す小形土器である。

挿図23の1を本類に入れる事は多少の問題が
あるが, 文様帯が沈線によって区別されている
点と挿図でも知られる様に沈線間に点列を有し
ている点を同類に入れたのである。

挿図26 縄文式晩期土器実測図



14類は, 沈線内押引によることによって盛上がった部分が出来事によって, 挿図24の
13. 14の様な文様を構成して縄文が地文帯をなしている赤褐色のよく磨研された土器であ
り, 13は蓋の様である。14浅鉢の器形を示している。同図15は胎土焼成共に同図13~14とよく
似ているが, 工状に刻されたものである。

15類(挿図20の1~11)は, 縄文を口縁部に有するかまたは縄文が胴部以下に見られるもの
を一括したのである。

挿図1. 3は口縁部に縄文の文様帯が見られるものであり, よく磨研したもので同図3は口唇
部がエラ状工具によって刻目が付けられている。赤色塗彩が縄文帯の所に見られるものであ
る。

同図2. 5. 6は同一個体の破片と思われるが, 同図6は深鉢の破片縄の結節文が見られるも
のである。無文帯で口唇部に山形の小凸起が見られる。図7は口縁部が波状凸起を示し, その
先端が吸盤状を示すもので, 口縁部に斜めの縄文帯を有するものであり, その文様帯以下は段
をなす様であり, 茶褐色の焼成は良好である。挿図8~11は口縁部がやや内反する器形を示
し, その部分がやや肥厚するその部分に縄文が斜めに施されている。

16類(挿図20の19~29)は, 口縁部に肥厚する部分に半截竹管による押引による点列状の文
様を有する深鉢の器形を示すもの, または口縁部が肥厚しないもので同様な半截竹管文による
押引による文様をなすものを一括した。

插图27 繩文式晚期土器拓影



同図19. 27 などが見られるこれ等は前者がヘラによって磨かれているのに対して、27は条痕が見られる。

17類（挿図27の1～7）沈線によって鍵手文の知られるもの、それに近いものを一括したものである。1. 2. 3. 4. 6. 7. は鍵手及び入組文の系統のものである。同図5は浅鉢の器形をなすものであり、これは沈線間に刻目のあるものが組合せられ口唇上に三叉文が見られる。

18類（挿図27の27～29）は、口縁部にアナダラ貝の腹縁によって刺突された文様帯が見られ、地文は貝殻による条痕が、見られるものを一括したのである。色調は茶褐色であり、胎土に雲母を含み焼成は良好である。この例はあまり見られないものであるが三个体分出土している。

19類（挿図28）は、肩の部分で段を有する口縁外側にアナダナ属の貝殻腹縁による条痕および押引刻文を有する凸帯をめぐらしている鉢形の土器が主体となるものを本類としたのであり、五貫ヶ森式とされているもので、^{註8,9}本遺跡の主体となるものである。

深鉢形土器（挿図28）は、口縁部に凸帯がめぐらされ、その上に貝殻による刻文があり肩部に段を有し、その部分によく磨かれている胴部は素文で擦痕が見られる。同図1. 2は口唇に刻目と口縁部の凸帯に刻目をめぐらし肩部に段を有し、腹部以下に条痕が見られるもので研磨されている。

同図4は、口唇部に刻目を有し肩部の段を有している部分は磨かれている。また胴部以下は擦痕が見られる。また口唇部に刻目がありその下の肩部の有段部に条痕が見られる。これ等に属する小形の鉢形のものなどが知られる。

浅鉢形土器 肩部に段を有する器形の深鉢の土器が見られる。様な浅鉢のものが見られる。器面はよく研磨されている。また口縁部に三角形の凸起が見られるものがある。

20類（挿図30. 31）は、前類土器に伴なう粗整土器を一括したのである。器形は深鉢で無文土器と条痕を全面に有するもの、また浅鉢形の土器および、口縁部がくぼんだ器形の土器が見られる。これ等の土器の中には新しいものも考えられるが五貫ヶ森が主体で出土しているので、ここではそれを細分する事はさけたのである。その他挿図31の15などの小形の壺形のものも見られる。

21類 その他挿図27の32～34に見られる様な竹管による刺突による点列文を有するものが見

られる。

22類（挿図31～33）は、晩期の土器底部であり、挿図34に知られる様に深鉢形土器の底部が破片も含めて1317個出土している。その大部分は粗製土器の底部である挿図32の2.4は壺形の底部と考えられる。（大江 命）

- 註
1. 木島式に類似するものである。
 2. 紅村 弘「東海の先史遺跡」綜括編 210頁。昭 38. 5.
 3. 大江 命「飛驒の考古学Ⅰ」41頁の下島式直後式土器に分類している中に類似品が見られる。昭 40. 7.
 4. 巽 三郎，中村貞史「鷹島」南紀考古同好会。1969. 3.
 5. 下呂町峯一合遺跡にも類似土器が見られる。
 6. 高堀勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」石川県押野村史。昭 39. 4.
 7. 大江 命「飛驒の考古学Ⅰ」65頁。
 8. 杉原荘介「三河五貫森貝塚」考古学年報三，四。
 9. 澄田正一外 新編「一宮市史」資料編一。昭 45. 3.

插图28 繩文式晚期土器実測図(1/4)

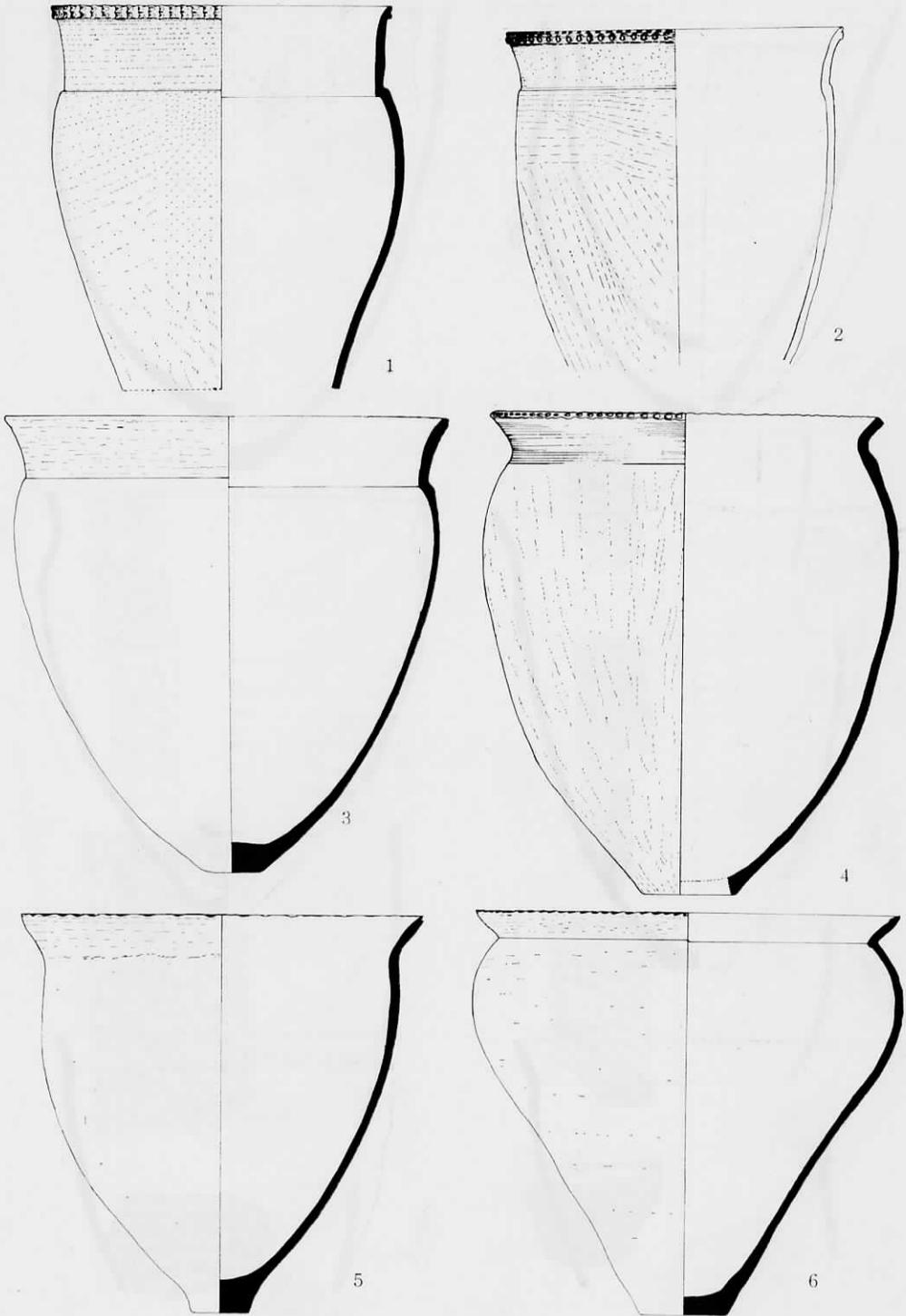


插图29 繩文式晚期土器実測図(1/8)

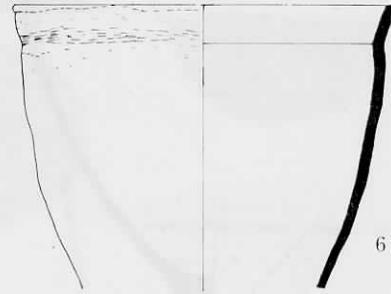
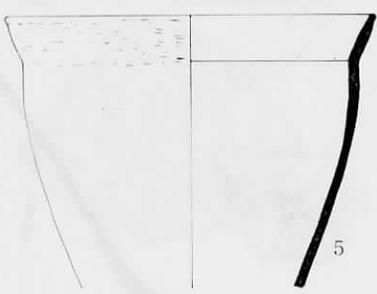
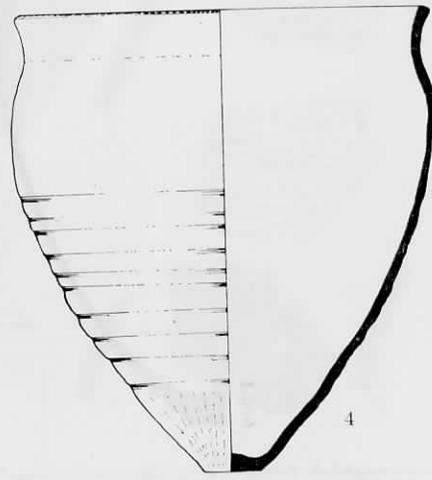
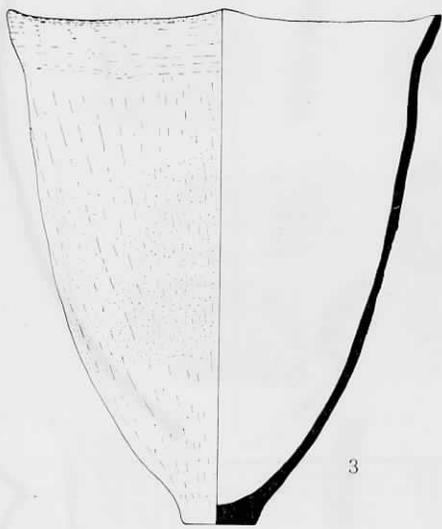
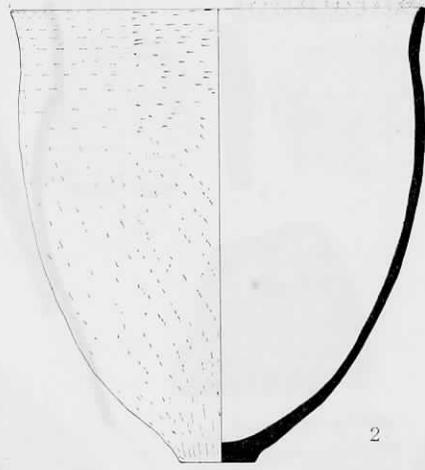
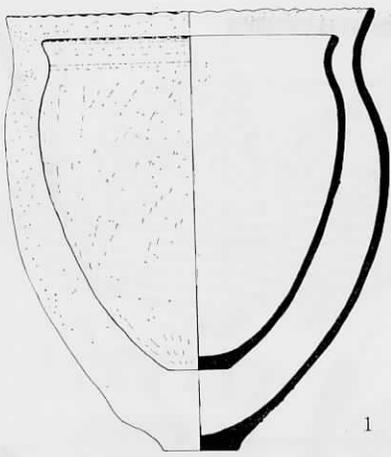
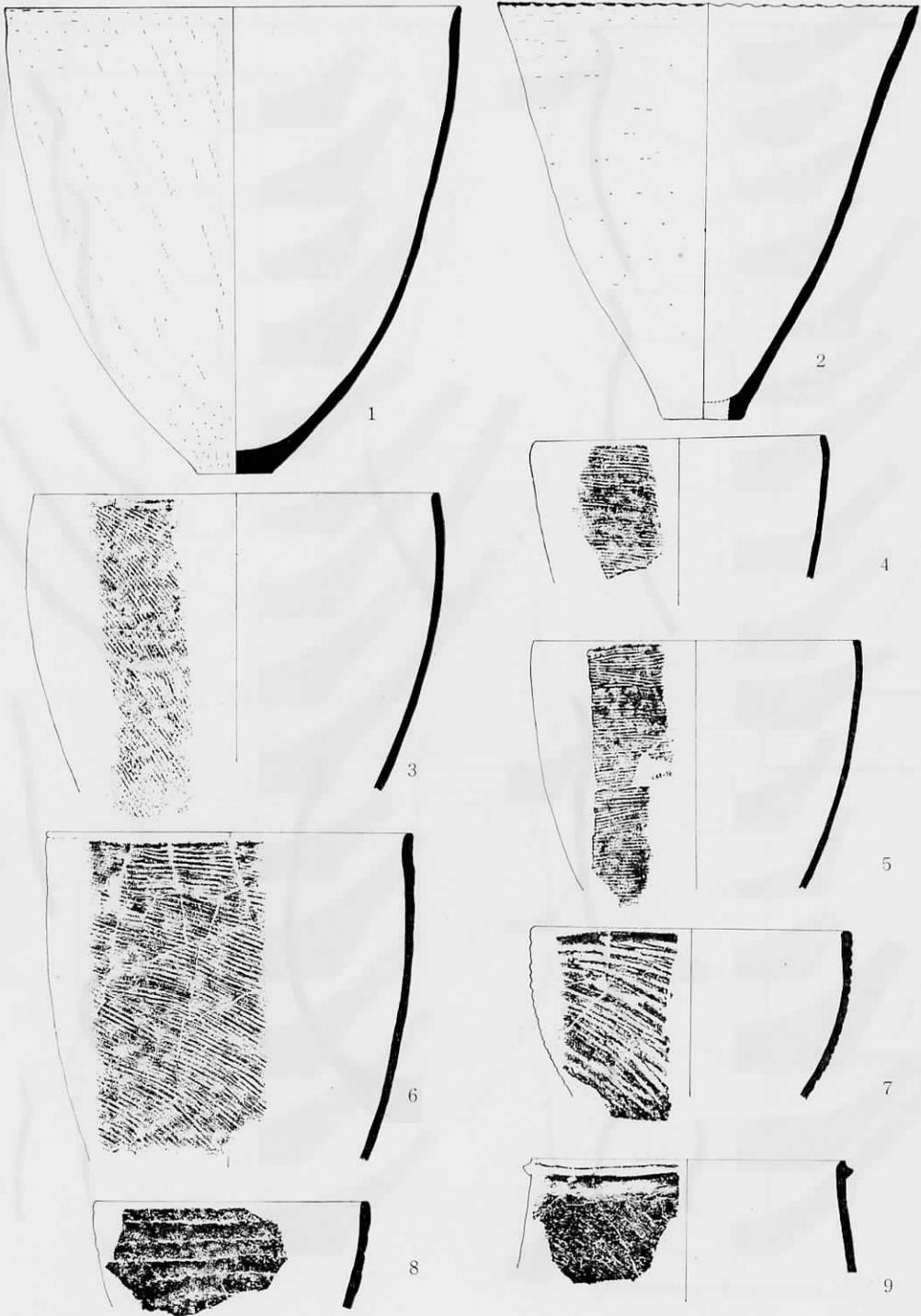
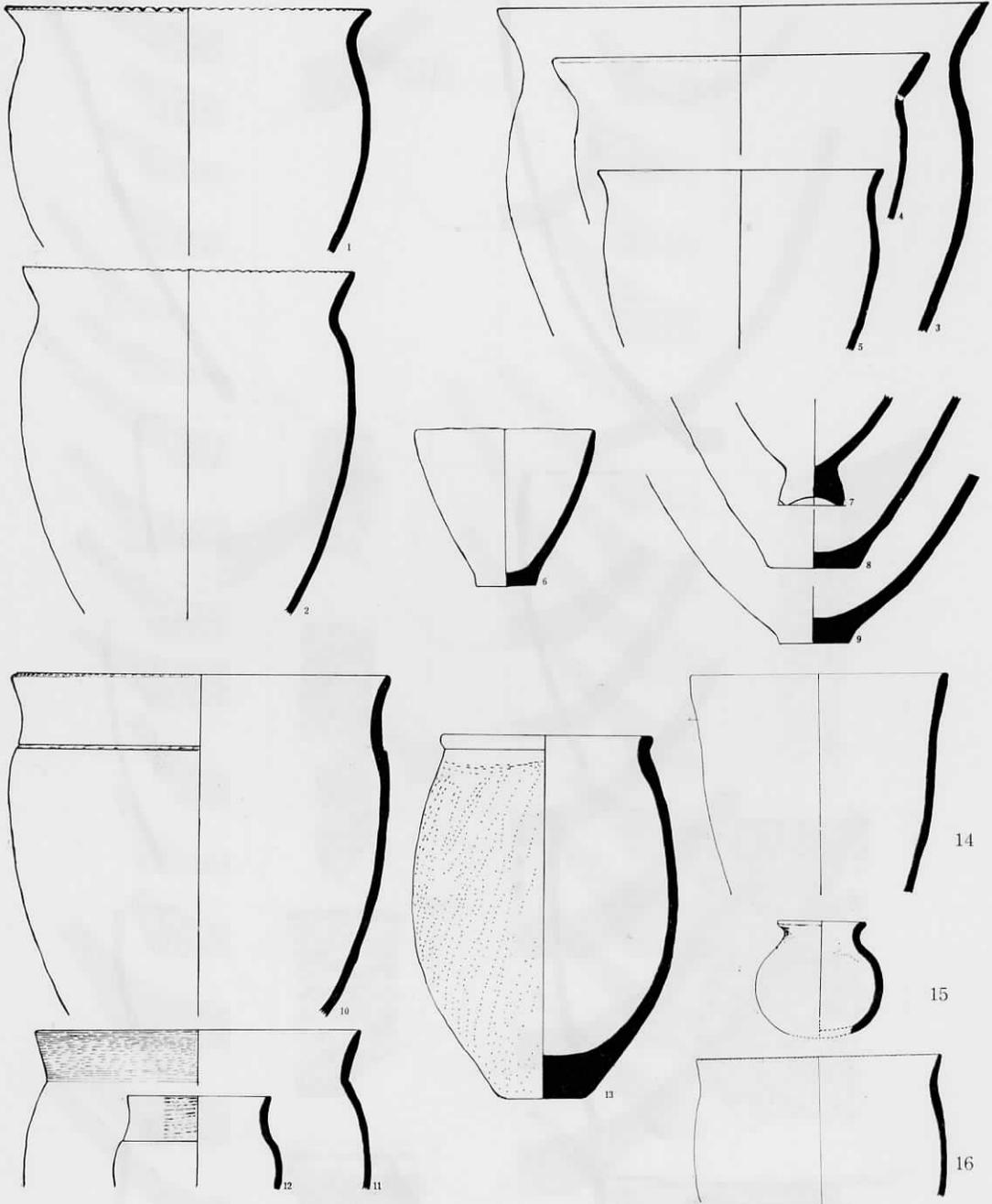


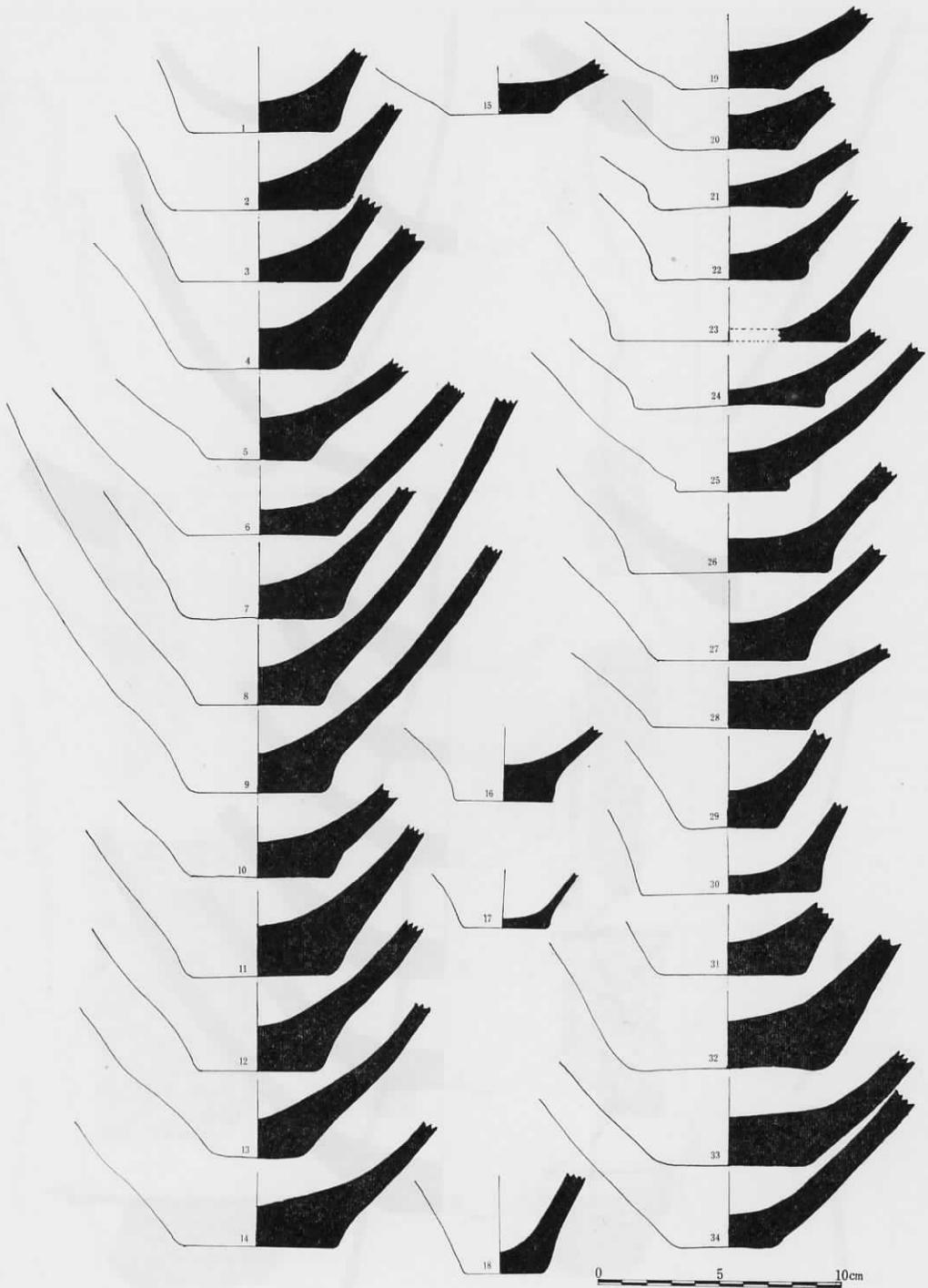
插图30 繩文式晚期土器実測図(1/8)



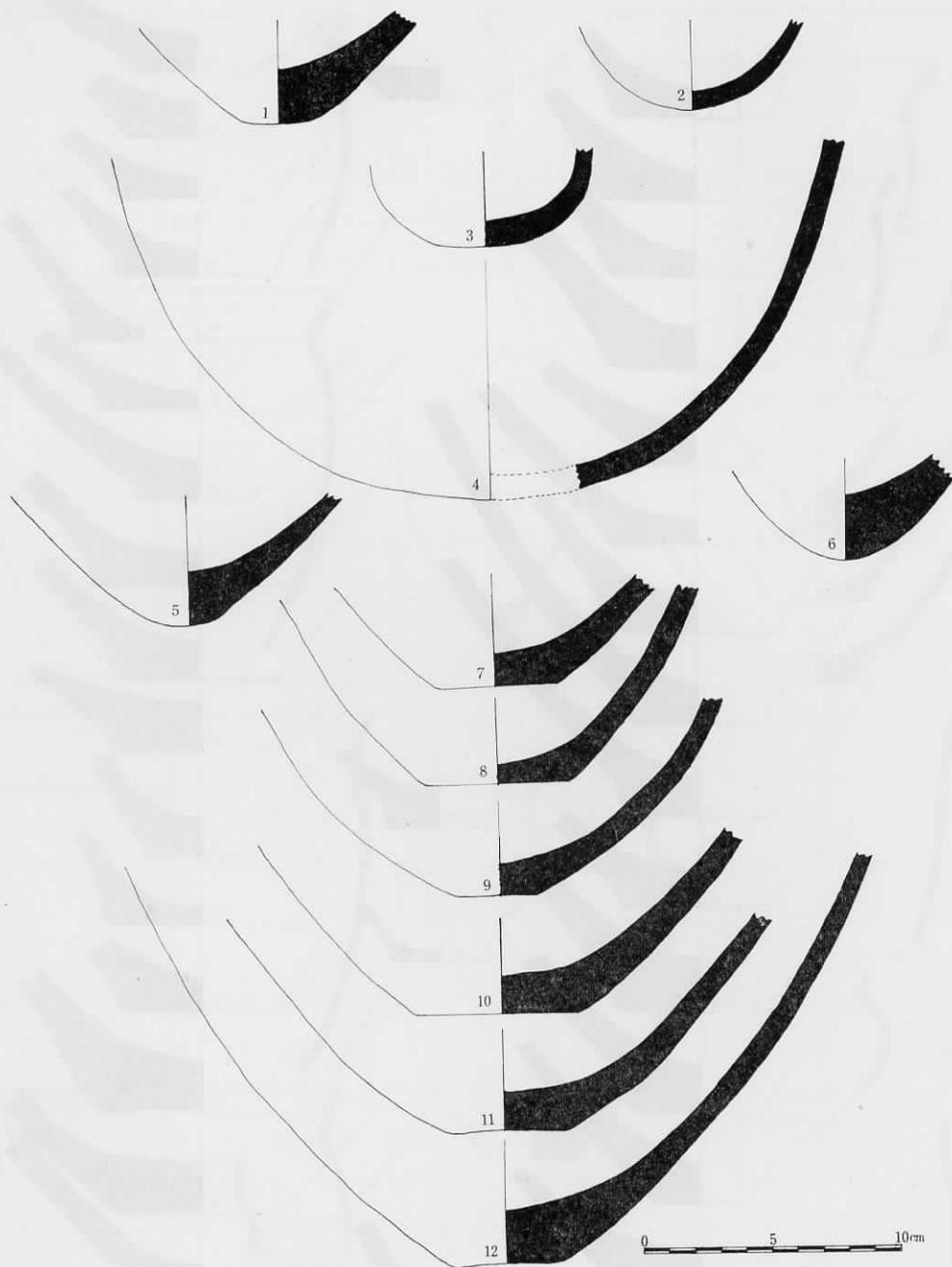
挿図31 縄文式晩期土器実測図(1/6)



挿図32 縄文式晩期土器底部実測図



挿図33 縄文式晩期土器底部実測図



弥 生 式 土 器

本遺跡より、今回の調査によって出土した弥生式土器は約300片をかぞえ、器形は壺・深鉢・甕などが認められる。これらの資料を当地方（濃尾平野およびその周辺地域）における型式学的研究に照応して検討した結果、いわゆる水神平式土器に照合されるものが最も古い部分にあり、次に弥生式中期に含められる特徴あるタイプの一群がある。また弥生式後期初頭に位置する壺形土器がすくなくとも8個体以上は見出されており、これと中期タイプの型式との関係について興味深い問題が提出されるのであるが、それについては後記する。

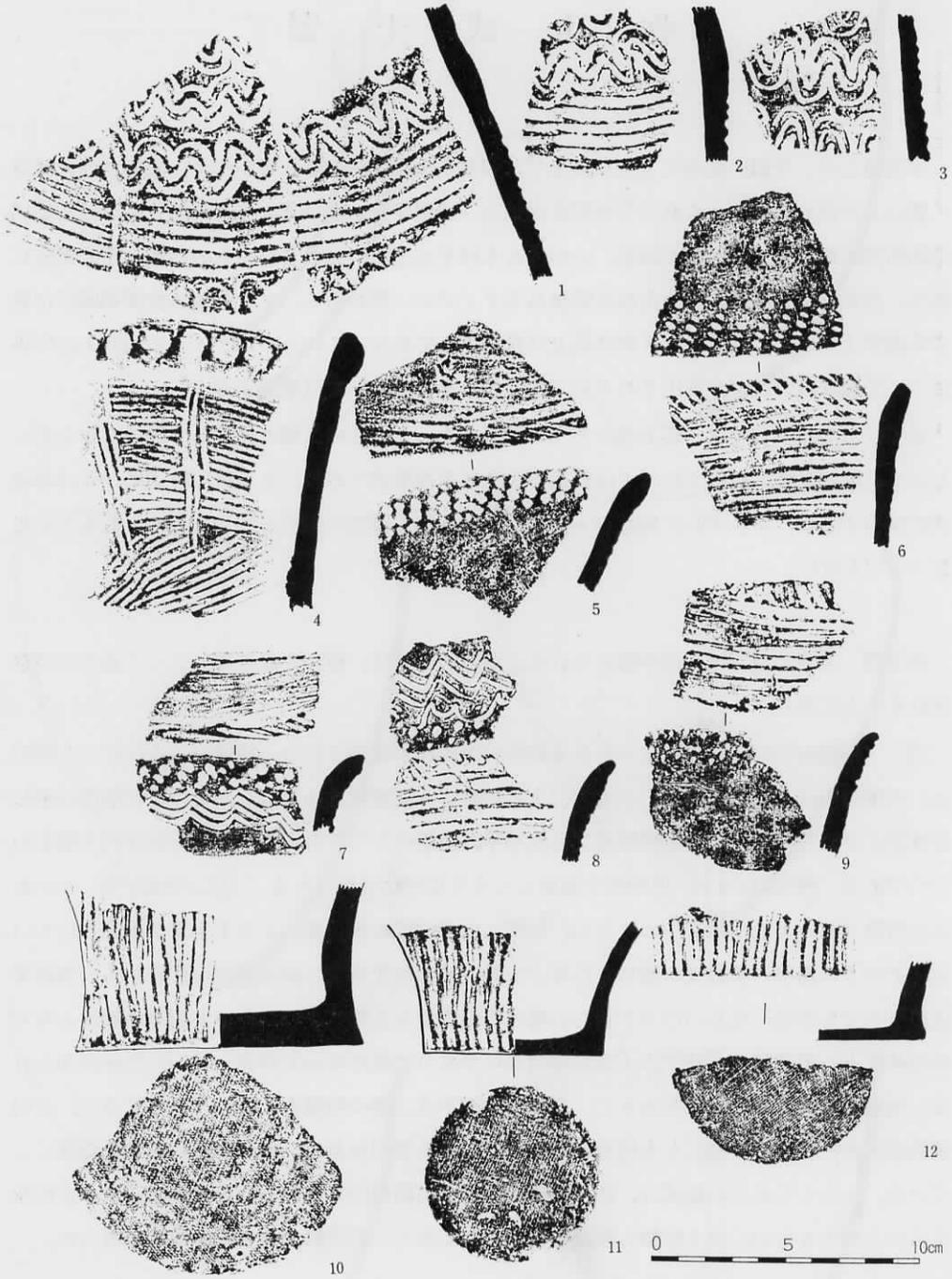
さて、ここに本項では一応上述の三つの段階を1, 2, 3の3類に分別して論述することとしよう。型式名称に対応すれば1は既述のように水神平式であり、2は貝田町式に、3は高蔵式に該当するが、それぞれに地域的・型式的・組成的な特色が認められることは、あらためて言うまでもない。

第1類 本類の土器は、壺が認められる。器形の特徴は、粗い条痕調整によって器面が調整されることにある。

壺（挿図34の1~3）すくなくとも4個体分の存在が確認された。挿図34の1に示した破片は、大型の壺の上胴部であり、3本線による重複する波線文をめぐらし、その下に横位の条痕がほどこされている。この重複波線文是水神平式土器のうちでも古い分部に比定される要素の一つである。挿図34の4は、口頸部を復原なしうる良好な資料である。口縁の外縁には、この型式の特徴である太圧凸帯文をめぐらし、頸部には条痕状の楕目文によるT字文が施文されている、その下に斜位の条痕文が認められる。このタイプはT字文と斜位条痕の存在から、水神平式のうちでも中頃、あるいはやや新しい部分に位置すると推定され、先の上胴部の破片と考えあわせると、本遺跡の水神平式土器が時間的にかなりの幅をもって存在していたことが知られる。上述の2資料は、破片も大きく、文様も水神平式土器の特徴をよくあらわしており、資料価値は大きい。しかし他にも水神平式と推定なしうる資料があり、型式内容の認識を豊富にしている。しかしこれらの組成は、個々の資料のうちに時間的な相異があるためはっきりと把握することができない。出土状態も散漫に見出されており、型式構成の確認は困難であった。

第2類 本類の土器は、深鉢が大部分をなし、タイプとしては尾張における貝田町式第3類

插图34 弥生式土器拓影



に比較なしうるものである。

深鉢（挿図34の5～12）破片数は多量であり、約300片をかぞえる。器形上からみると、口縁の大きく開く深鉢であり、底辺は垂直に近い角度をなし、直角に折れて平底となる。器形を復原できるものはないが、西志賀貝塚の資料等と比較してみると、口径25cm前後をなし、高さは30cm程度と推される。深鉢としてはやや小型をなすものと思われる。文様ならびに器面調整の方法は極めて特徴的である。まず口縁は大部分が内面に並列する楕円文を施している。これに楕目文による波線を組合わせた例もみられる。器外面は粗い条痕文が、上位口縁の外側は横位に、胴部は横軸の羽状、底辺附近では縦位において施されている。まれに縦軸の羽状条痕も認められるらしいが、破片が小型のため確認できない。底面にはほとんど例外なく布の圧痕が残されている。焼成は、大部分が赤褐色または黒褐色をなしており、尾張の諸遺跡におけるように黒色をなす例はまれである。この型の土器は、すでに述べたように、尾張地方における貝田町式の第3類に比定される。しかし本遺跡の場合、この深鉢と組成するはずの各種の壺型土器が見出されていない。後記するように第2類の深鉢は第3類の壺に組成する可能性も考えられる。

第3類 本類には、弥生文化後期初頭または中頃に至るものを一括して含めた。名古屋における高蔵式または瑞穂式に比較できる壺をもち、甕もまた認められる。

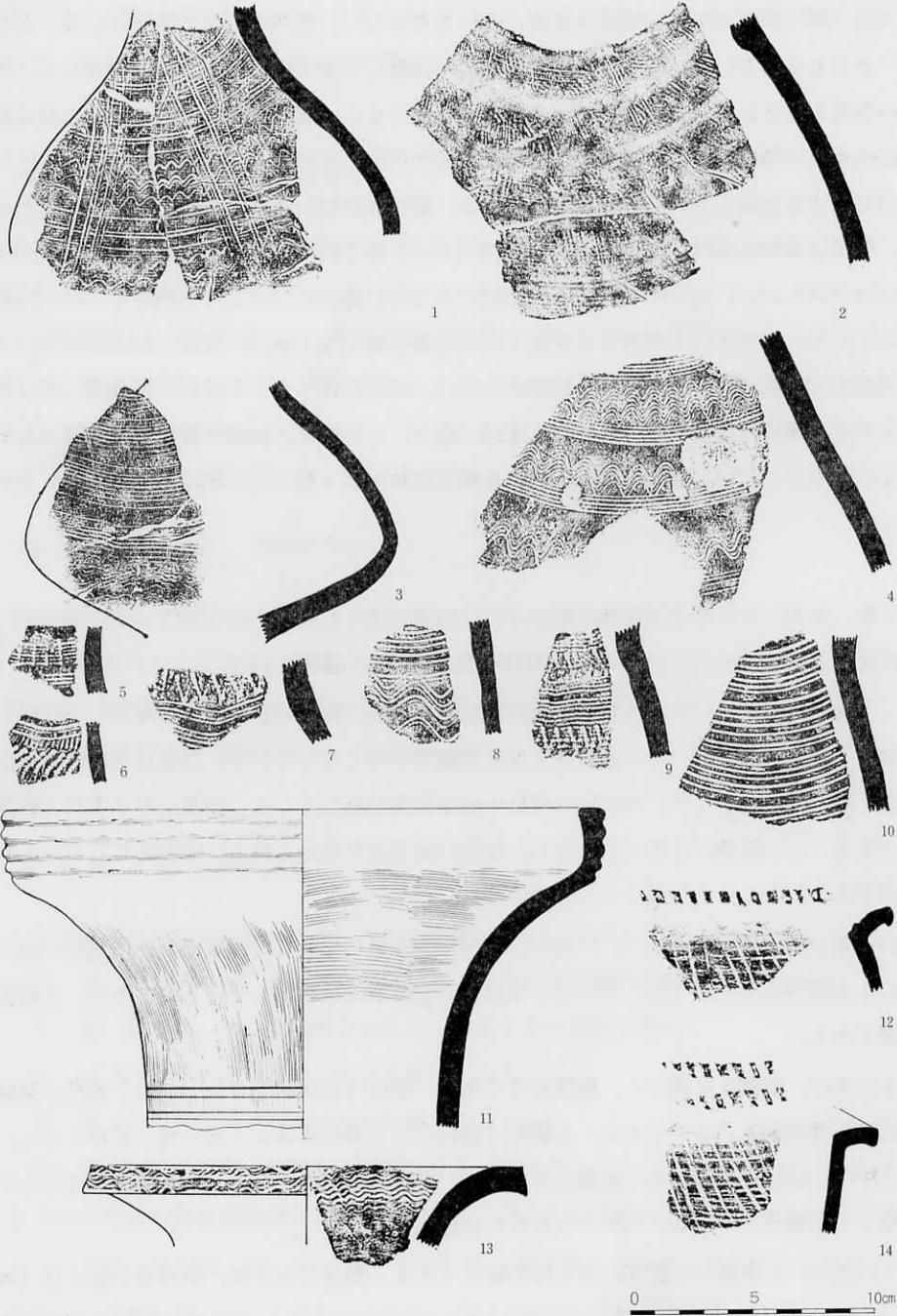
壺（挿図35の1～11）壺には数種の器形が認められる。No.11の資料は、口縁がく字状に上方に屈折し、径26cmをなす。この部分の外側に凹線文をめぐらしている。口端は上辺に平坦面があるが、施文はなされない。内面には横位の刷毛目文を施している。頸部はやや太目で頸径は13cmで2本づつの組線が2条めぐられ、縦位の刷毛目が認められる。尾張地方における高蔵式の壺であり、よくその特徴をそなえている。

No.13の壺は、口径18cmをなし、口端に1.2cmの面をとっている。口縁内面と口端面に同一施文具による楕目波文をめぐらしている。No.11と同様高蔵式に比定なしうる壺であり、比較的小型の例である。

No.3の壺は、前例とは異なり、胴部破片であり、腹径は15cm弱をなしている。器形は算盤玉形に近い下部の張るタイプである。上胴には楕目による並行直線を三段に亘ってめぐらし、腹部最大幅部には同じく楕による波線文を施している。この型は、No.1、No.2等よりはややおくれ、恐らくは瑞穂式の段階に比定されるものと思われる。

No.1の壺は、上胴部から腹部に至る間の破片である。頸径は5.2cm、腹部最大幅は15.8cmをなす。上胴には、2本組線を6段と3段の2組に亘ってめぐらし、その間と下段に同様の施文具による波線文を3段組でめぐらし、更に同施文具で縦に直線をいれて一種のT字文帯を形成

插图35 弥生式土器拓影及び実測図



している。

No.2の壺上胴部破片は、横位の磨消帯がめぐらされており、いわゆる磨消刷毛目文の一種であろう。

No.5～9等の破片もこの類に属するものである。

甕 No.12, No.14は、甕形土器であり、やはり本類の壺に組成する。外折する口縁と上胴部の格子目状の刷毛目線がよく、その特徴をあらわしている。

ま と め

さて、上述のように本遺跡の弥生式土器を、3つの類に分けて整理したわけであるが、次にこの三者を総合的に視察してまとめとしたい。第1類である水神式土器は、個体数も少なく、壺のみでその他の器形を知り得ないので、型式構成等を明らかにすることができない。No.1の例はNo.4よりも古い要素をもち、水神平式のうちでも時間的に幅のあることが知られる。しかし深鉢等の存在がないため、この時期に聚落が営まれたか、或は壺のみの特殊遺跡であったのか、これのみの資料では判然としない。

次に、第2類をみよう。この場合は第1類とは対照的に深鉢のみであり、壺が認められない。しかも個体数が多いので特殊遺構とする見解は成立しにくく、やはり一種の生活址と考えられる。したがって、このタイプに組成する壺が問題となる。第1類と第3類が壺を主とするので、このいずれかと組成する可能性があるが、第1類の場合は、この第2類の深鉢が後期段階まで遡る可能性は少ない。むしろ第3類すなわち後期まで第2類の深鉢が降る可能性が大きい。この場合第2類、すなわち尾張における貝田町式の第3類、深鉢型土器と同一タイプの土器が弥生文化後期まで降って使用されたことを物語っていることになる。この様な型式関係については今後なお住居址や単純包含層について検討を進めて行かねばならないのである。

(紅村 弘)

土 師 式 土 器

第3地点をのぞいては、各地点とも小数の小破片がみられるが、その器形を知ることはできず、磨耗もはげしいので文様も知ることはできない。

第3地点の器種は、甕形、高杯、器台、把手等の破片が出土している。

1 甕 (挿図36の10)

同図8にみられる完形の甕がある。

口径26cm、器高約25.1cm、底径10.2cmを計る。口縁部は肩のところにくびれ、「く」の字状に外反するが、外反角が口縁部分で異なるため、計測位置によって器高が違う。口縁端部の面とり面に沈線一本がある。胴部径は、口径より大きく27.1cmを計る。腰部からほとんど直線的に内傾しながら底部へ向かい、底部は平底であるが端の部分は丸味をおびている。器面腰部は楡目の横描きで、胴部から口縁部へかけて楡目のタテ描きで整形している。口縁部内側はやはり楡目の横描きで整形している。(他にも小破片の口縁部がみられるが、いずれも内側は横描きの楡目文で整形されており、断面は「く」の字状であり、端面に沈線一本のものが多し。)胎土は若干の珪石粒を含む砂質粘土を用いており暗褐色であるが、外面のところどころに炭素の吸着がみられる。挿図36の9に見られるような甕の台部がある。また把手の部分が三個出土している。

2 高杯 (挿図36)

五個体分の脚部が見られる。

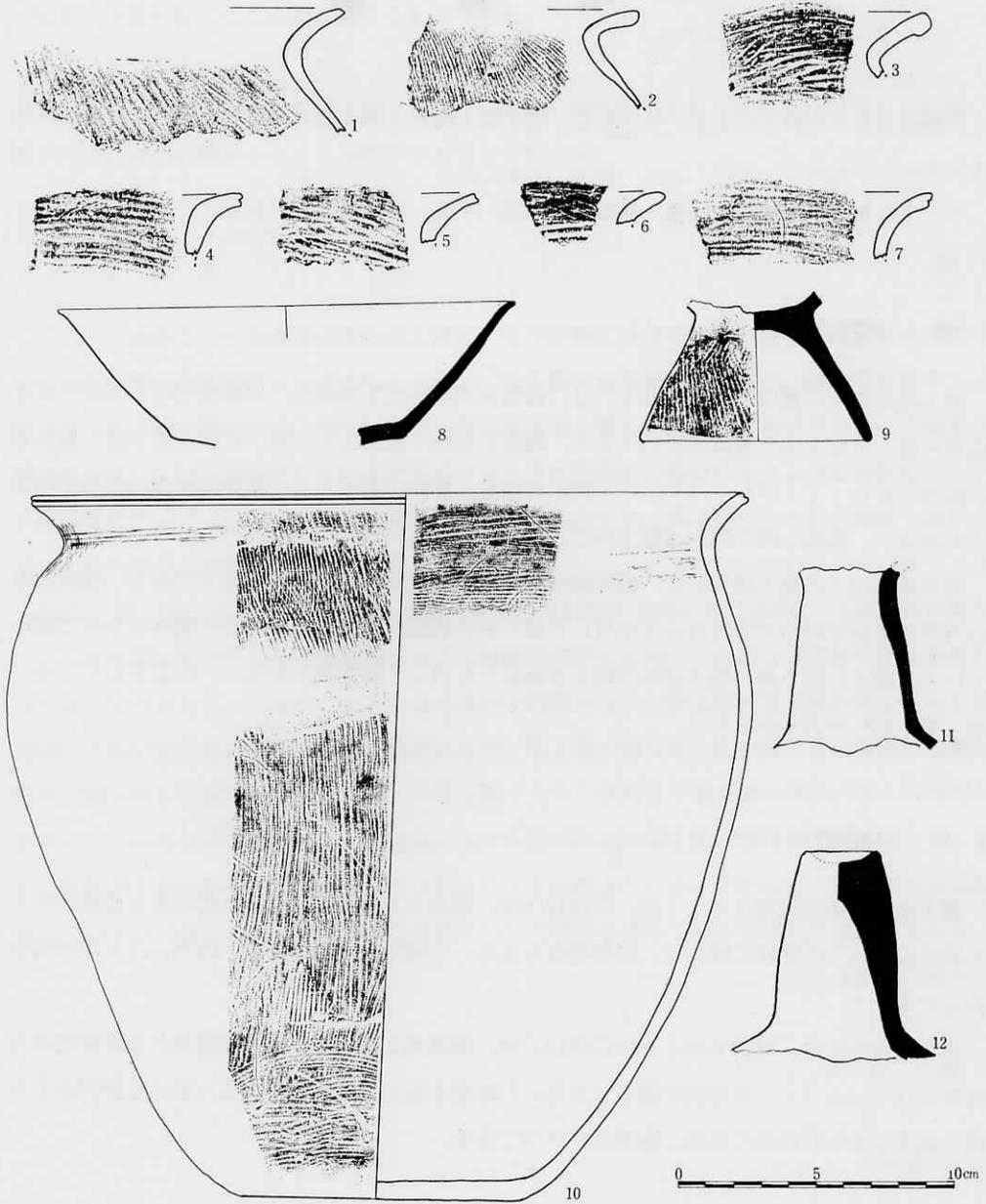
3 器台 (挿図36の11)

器台の脚部が一片出土している。

4 そ の 他

甕の底部と思われる丸底の破片が若干ある。(田口昭二)

挿図36 第3地点出土土師式土器拓影及び実測図



1~7口縁部拓影 8高杯 9甕台部 10甕 11器台の脚部 12高杯の脚部

須 恵 器

各地点ともに小破片の出土がみられる。特に第1地点と第3地点は器形の知られるものが出土した。

その主なものをあげると、甕、横瓶、短頸壺、坏蓋、坏、甗などがある。

1 甕 (挿図37の1.2)

第1地点出土の甕は(挿図37の1)は口縁部が垂直に立ちあがり、口縁端部近くでほとんど直角に近く外反し再び垂直に折れて立ち、端面を部厚く成形している。また同図2は、肩から口縁部にむかってくびれ、「く」の字状に外反し、端面を面とりし、器面調整は、外面を叩きの条痕文で、裏面を同心円の当板で行なっている。

第3地点出土の甕の破片から、胴径60cm前後と推定される大型なものまでがある。器面調整は外側を条痕の叩目文で行なっており、光沢のある暗緑色の自然釉が肩から胴部にかけて流れている。^(註1)厚さは約5mm、胎土は珪石粒1.5mm以下を含んだ砂質粘土を用い、灰色をしている。他に甕の破片が若干みられる。

2 坏 (挿図37)

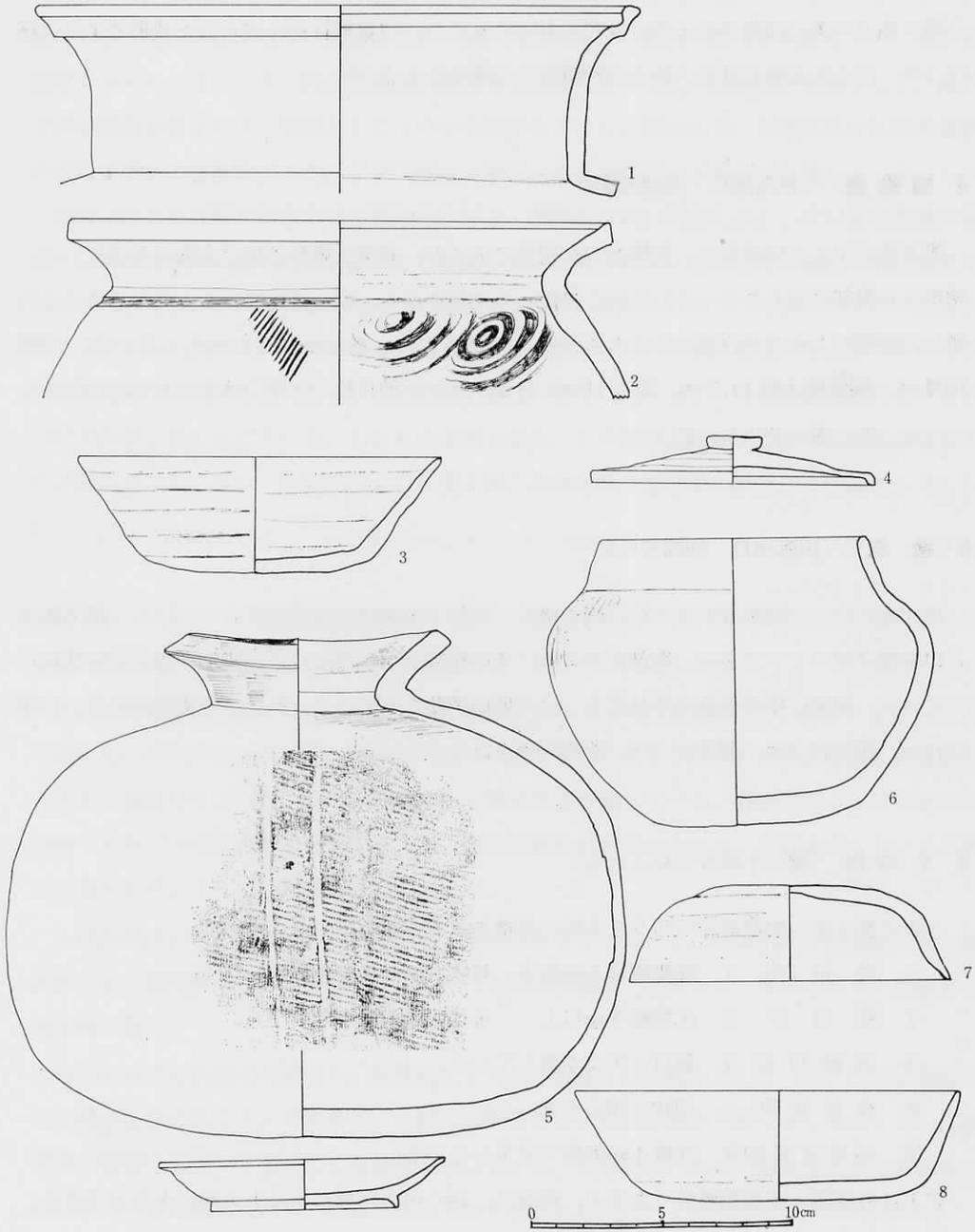
第1地点の坏は同図3のように、口径13.6cm、器高4.5cmあり、やや丸味のある底部から上へ斜めに「八」の字状に開いて、口縁端面を尖らした成形のものである。底部には×印が刻まれている。

第3地点の坏は、同図8のように口径19.7cm、器高4.2cmあり、扁平な底部から底部端は丸味をおびている「八」の字状に開きながら、口縁端を尖らした成形である。胎土は砂質粘土で硬く焼きしまり灰白色である。器形はいびつである。

3 坏 蓋 (挿図37の4)

坏蓋の器形を知ることのできるものは、第1、第2地点とも各一点あり、第1地点のもの

挿図37 須恵器・灰釉陶器実測図及び拓影



1~4 第1地点出土遺物 1.2 甕口縁部 3. 杯 4. 蓋 5~8 第3地点出土遺物
5. 横瓶 6. 短頸壺 7. 杯蓋 8. 杯 9. 灰釉陶器丸皿

は、同図4のように径10.8cmのボタン状把手をつけた蓋で垂直に折れた縁辺をもったものである。胎土は砂質粘土で青灰色である。

第3地点の蓋は同図7のように丸味をもったもので、口縁部縁辺を尖らした成形である。径12.1cm、高さ3.6cmを計る。胎土は砂質粘土の灰色である。

4 短頸壺 (図版36C 挿図37の6)

第3地点出土の同図6は、底部がやや扁平であるが、底部と腰部の境は丸味をおびている。腰部から胴部は気もちカーブしながら外傾して立ちあがり、肩に達している。肩からまるく内傾し口縁部で上にやや内傾して立ちあがり、端部を尖らして短い頸部をつくっている。口径10.1cm、胴部最大径14.7cm、器高11cmを計る。胎土は砂質粘土で硬く焼きしまり灰白色をしている。他に壺の破片がある。

5 横瓶 (図版36D 挿図37の5)

第3地点出土。同図5のように、俵を横にした形で中央に口縁部を接合している。即ち胴部と口縁部は別づくりである。胴部にタテに二条の沈線が引かれている。両端に蓋をして俵状にしている。胴部は横目条痕の叩目文をつけて器面調整をしている。胎土は茶褐色である。口径は11cm、胴径16.4cm、胴長23.3cm、器高19cmを計る。

6 その他 (壺の小破片が見られる)

つぎに甕や壺の胴部破片の叩文と当板の特徴あるものをあげてみよう。

- ① 細目叩文 沈線幅2.5mm以下 長さ5cm前後の条痕
- ② 荒目叩文 沈線幅3mm以上 長さ5cm前後の条痕
- ③ 斜線目叩文 斜目に叩文を施している。
- ④ 綾杉状叩文 羽状に叩文を施している。
- ⑤ 斜目文又叩文 沈線4mm前後で交叉している。

以上は外壁面の器面調整痕であるが、内面は、同心円の当板によるものがほとんどである。しかし、木製の半円状(幅0.4cm、長さ2cm)の当板が使上されたと思われるものが一点みられたのと、当板のないものもある。これは、丸い石か手の平を当板がわりに用いたのではなからうか、しかしその痕跡は認められない。

灰 釉 陶 器

各地点とも出土点数が少なく、小破片のためほとんどは器形を知ることはできない。しかし若干は、器形の推定と復原によってその器形を知るものもあった。主な器種はつぎのようである。

碗・皿類（段皿・丸皿・耳皿）・壺・瓶類がある。しかし破片や復原によって器形が知られるものは、つぎに示した丸皿，耳皿，耳つき広口瓶がある。他に施釉陶器として縁釉皿の小破片がある。

丸皿（挿図37の9）

第1地点出土。口径10.8cm，器高1.9cm，高台径7.2cmを計る。口縁部は外反し，端面は面取り整形され高台の外側は，まる味をもって低い。釉調は白色透明であるが，一部分還元焰のため銀色をしている。

耳皿（挿図39の11）

第3地点から出土。耳部は欠損してなく，糸切底のまま施釉がない。皿部の長さ9.2cm，底径4.2cmを計る。

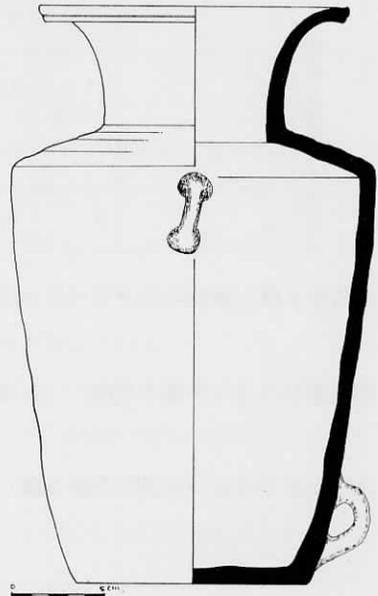
耳つき広口瓶（挿図38）

（無釉のため須恵器に分類すべきであろうが，ここに位置づけた。）

第3地点出土。口径16.2cm，頸部径10.4cm，肩部径19.9cm，底部径13.2cm，器高30.8cmを計る。

広口をもつ瓶としては異形で，肩部に稜をもち，胴部はまる味なく垂直に底部に至っている。底部は扁

挿図38 耳付き広口瓶実測図



平な平底である。肩部から、垂直に立ちあがり頸部をつくりながら外反し、つばの広い口縁部をつくり、口縁端面は凹形に面とりしている。

耳は肩部よりやや下ったところに、より土をアーチ状に曲げ、左右へ各一個対象的に貼付しさらに、底部ぎわ（二個の耳を結ぶ線を底辺にした二等辺三角形の頂点にあたる位置）に、やはりより土をアーチ状に曲げて貼付している。この種の瓶はこの付近では類例をみない。

(田口 昭二)



山 茶 碗 系 陶 器

山茶碗系陶器とは、主として瓷器系中世陶器^{註2}をいうのであるが、ここでは施釉された古瀬戸系と常滑系甕をのぞいた、無釉の山茶碗、小皿、大平鉢をいう。

山茶碗と小皿

出土した山茶碗の型式は、美濃古窯^{註3}の編年にあてはめると、第1型式をのぞいた第2型式から第5型式までみることができ、第2型式と第3型式^{註4}のなかには、美濃以外の猿投窯・常滑窯^{註5}・今井窯^{註6}の製品が若干みられる。

第4表 山茶碗産地別対比表 (口径、器高、高台径の三点測定可能34点について)

時代	美濃古窯山茶碗編年		美濃系	猿投系	常滑系	計
	型式	窯期				
鎌倉	第1型式	西坂1号窯期				
	第2型式	丸石3号窯期	5	6	1	12
	第3型式	窯洞1号窯期	8			8
室町	第4型式	白土原1号窯期	11			11
	第5型式	大洞東1号窯期	3			3
計			27	6	1	34

(数字は個数をあらわす)

これらの山茶碗を地点別にみると、第1地点は、第2型式にはいるものが53%、第3型式にはいるものが41%、第4型式と第5型式がそれぞれ3%ずつとなっている。

第3地点は、ほとんどが第4型式(82%)に入るものである。(他は小破片のため分類困難である)

従って、第1地点は、山茶碗の前半にはいるものであり、第3地点は後半にはいるものであることがわかる。

つぎに各地点別に型式毎にその特徴をあげてみよう。

第1地点

第1地点出土の山茶碗は、およそ4窯期に分けられ、出土遺物は碗、皿、鉢に限られる。美濃の山茶碗編年にあてはめると、前述したように第2型式から第5型式までがみられる。なかには、一部美濃窯以外のものである猿投窯や常滑窯系の山茶碗も若干みられる。

1 第2型式

碗・小皿・鉢に大別される。

碗は一般に高台径が大きく、灰釉陶器のように腰部に張りがあり、口縁部はやや外反するものが多く、ミコミは扁平である。なかにはミコミ中央にひきしめの指圧痕のあるものもある。口縁端部は面とりしたものと、丸くしたものと、尖らしたものがある。高台は付高台でその断面は三角形であり、尖端にもみから圧痕がある。高台内にはシッピキ痕がある。胎土は①珪石粒を含む砂質粘土 ②珪石粒を含む砂目粘土 ③長石粒を含む砂目粘土にわけられ、②の胎土のものは腰がまるく張った浅めの碗であり、③は「八」の字状に開いた器形の碗である。従って第2型式のなかには①は美濃系(挿図40の2~6.8)・②は猿投系(挿図40の1)・③は常滑系(挿図40の7.9)に分けられる。そして、美濃系が一番多く、ついで猿投系、少ないのは常滑系で碗2点を数え、若干の小破片がみられた。またいずれの碗も使用したのであろう。ミコミから口縁部までの内側に磨耗痕がみられる。また、器面に炭素の吸着がみられる。なかにはミコミにきれがあり磨耗痕のないものが2点ある。(猿投系)それぞれのスケールは第5表に示したとおりである。

小皿は一般に厚手で、腰部に張りのあるものと、「八」の字状に開いているものがある。内側はミコミ部が丸く凹んでいるものが多い。底部は糸切底である。口径7.5~9cm、器高1.8~2.6cm、糸切径4~4.8cmを計る。(挿図39の1.3.4)

常滑系の小皿は、長石粒を含む砂目の胎土で、「八」の字状に開き、ミコミは扁平で腰部に稜がみられ、口径7.1cm、器高2.2cm、高台径3cmを計る。(挿図39の2)

鉢は、底部片であるので、全体の形状を知ることはできない。高台は付高台で断面は三角形である。内側には磨耗痕がある。

2 第3型式

碗・小皿が出土している。

碗は「八」の字状に開き、口縁端面が面とりされており、ミコミは丸く凹んでいる。高台は付高台で断面三角形。尖端部には「もみから」圧痕がある。高台内にはシッピキ痕が残る。胎土は砂質粘土である。内側は使用したための磨耗痕が認められる。

口径—平均15.6cm，器高—平均5.4cm，高台径—平均6.3cmである。（挿図40の10.11）

小皿は，厚手で外側は丸味をおびながら口縁部にいたっている。ミコミは丸く凹んでいる。胎土は碗と同じである口径—平均7.5cm，器高—平均2.3cm，糸切径6.3cm（挿図39の5～7）を計る。

3 第4型式

碗，小皿が出土している。

碗は，大型と中型に分けられる。器形は「八」の字状に開いたもので，口縁部がやや外反する。第3型式より薄手となり，ミコミは扁平であるが，中央にひきしめのための指圧痕がある。またミコミ周辺には重ね焼きのときいれたと思われる「もみがら」圧痕が残る。高台は付高台で，0.6cm以上のより土を指圧により貼付し，尖端部には「もみがら」圧痕が残っている。

スケールは大型が口径15cm内外，器高6cm，高台径6cmで，中型が口径13cm内外，器高5cm内外，高台径4cm内外を計る。（挿図40の12）

小皿は，第3型式より薄手で器高が低く，ミコミは扁平となり，中央に指圧痕がある。口径8.5cm前後，器高1.5cm前後を計る。（挿図39の8.9）

4 第5型式

碗・小皿の出土

碗は第4型式より器高が低く，4cm以下となる。また高台径も4cm以下となる。なかには口径と高台径の比は4：1となる小型のものもあり，全体に薄づくりで器壁の厚さが3mm前後となる。器形は，高台部から丸くカーブをえがき口縁に達し端部は外反せず端面は面とりされている。高台は0.4cm程度のより土を貼付し「もみがら」圧痕が残る。ミコミは指圧痕がなく整形されている。（挿図40の13）

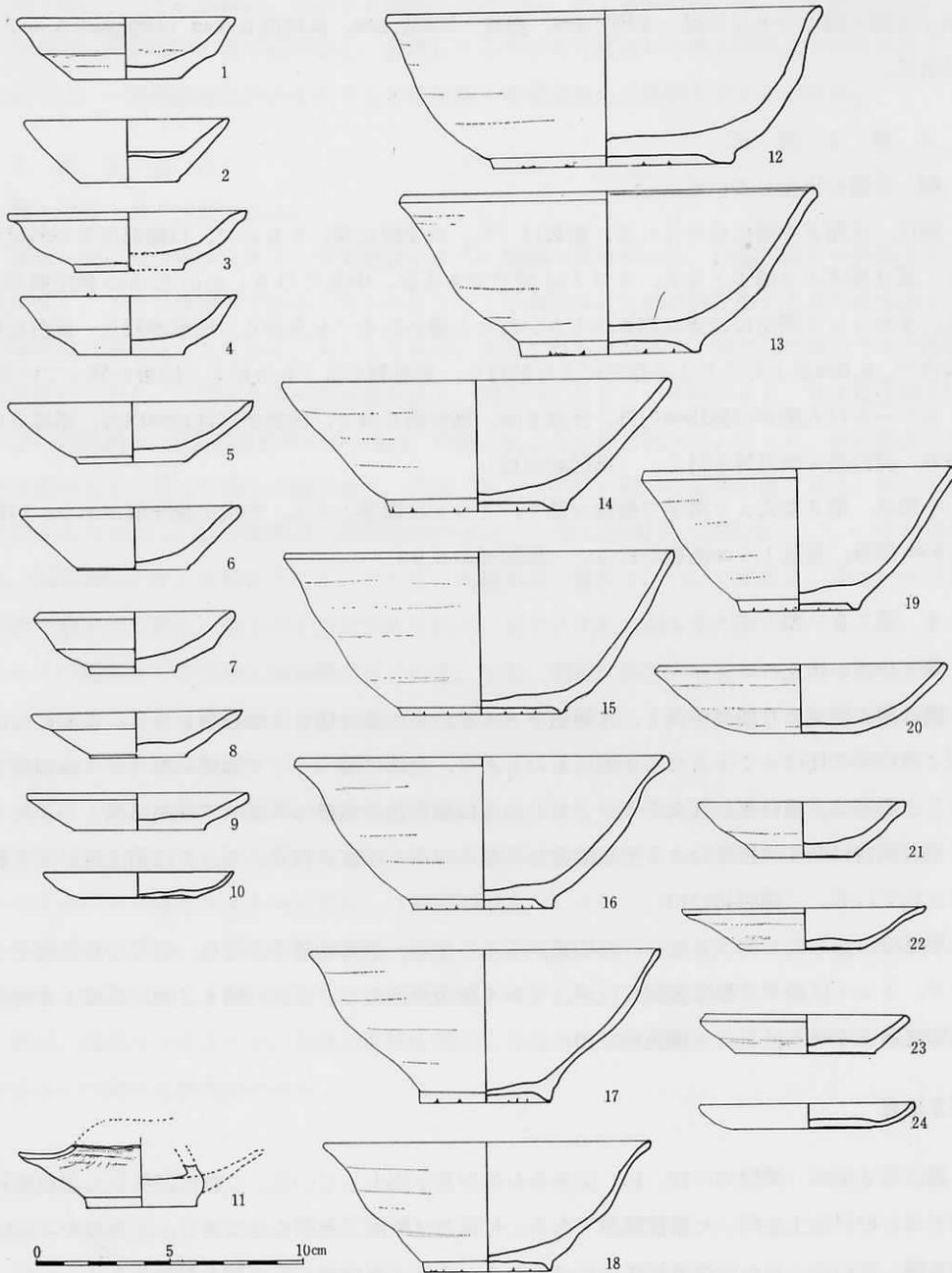
小皿は，まったく薄手となり，糸切底が大きくなる。全体に薄手となり，特に口縁は薄づくりで，ミコミは扁平で指圧痕がないが，ミコミ周辺が凹んでいる。口径8.2cm，器高1.0cm，糸切底径4.4cmを計る。（挿図39の10）

第3地点

碗は第2型式（挿図39の12.13）にあるものが若干出土している。これは，ほとんどが珪石粒を含む砂目粘土を用いた猿投窯系である。付高台は断面三角形をしており，「もみがら」圧痕を残している。なかには糸切底のものもある。また「ひつき」痕のあるものもある。

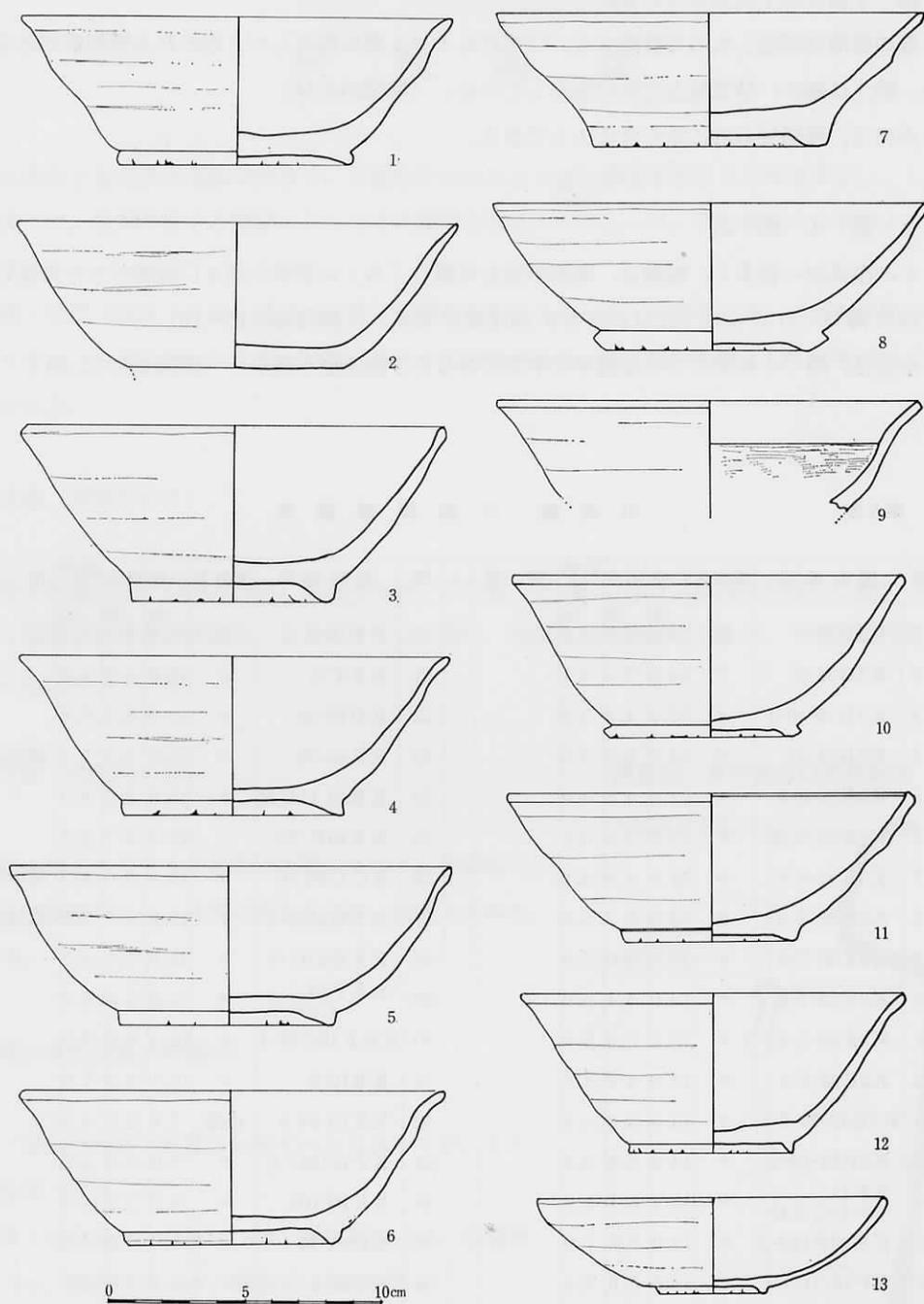
その他は，第3型式，第4型式，第5型式がみられるが，この第3地点では前述したように第4型式が圧倒的に多い。

插图39 灰釉陶器·山茶碗系陶器实测图



1~10 第1地点出土小皿(山茶碗系陶器) 1~6 第2型式(1.2常滑系) 7.8 第3型式 9 第4型式
 10 第5型式 11 灰釉陶器耳皿 12.13 第2型式(常滑系) 12~20 山茶碗 21~24 小皿
 14 第3型式(美濃系) 21 15~19第4型式(美濃系) 22.23 20第5型式(美濃系) 24

插图40 第1地点出土山茶碗实测图



1~9 第2型式 10.11第3型式 13第5型式 (1.5猿投系7.9常滑系)

1 第 3 型 式

碗・小皿が若干出土している。

碗の特徴は前述したので省略する。いずれもミコミ部に使用したと思われる磨耗痕がみられる。胎土は細かい砂質粘土で灰白色をしている。(挿図39の14)

小皿は、挿図39の21にみられるようである。

2 第 4 型 式

この型式が一番多く、特徴は、腰部が気もち張り「八」の字状に開き口縁部がやや外反し、全体に薄づくりでミコミにはかならず指圧痕が残る。(挿図39の15~19)

小皿は、薄づくりでミコミは扁平で中央にかならず指圧痕が残る。(挿図 39の22.23)

第5表 山茶碗・小皿実測値表

順	遺物番号	遺物名	口径	器高	高台 径	備 考	順	遺物番号	遺物名	口径	器高	高台 径	備 考
			cm	cm	cm					cm	cm	cm	
1	K3B34-5	碗	14.0	4.7	4.7		20	K F 16-9	碗	13.9	5.7	5.2	
2	K3B34-3	〃	14.0	5.3	5.1		21	K E F G	〃	15.0	5.9	6.8	
3	K3B34-10-1	〃	13.0	4.8	3.8		22	K D 10-42	〃	15.0	5.3	6.8	
4	K3B34-11	〃	14.0	5.9	5.0		23	K E 10-76	〃	15.0	5.2	7.4	猿投系
5	K3E32-8-1	〃	11.0	4.8	4.4		24	K B 10.11 C H	〃	15.0	5.5	8.3	〃
6	K3E32-8-26	〃	11.0	5.5	5.1		25	K E 10 P -93	〃	15.0	5.7	8.1	
7	K3E32-8-3	〃	11.0	4.8	4.1		26	K C D 8 C -6	〃	15.0	5.0	8.7	常滑系
8	K3E32-7-5	〃	14.0	6.3	5.0		27	K E G 15 C -1	〃	15.6	5.8	7.7	猿投系
9	K3E32-7-6	〃	15.0	5.0	5.0		28	K F G 15 C -2	〃	15.8	5.1	8.7	〃
10	K3E32-7-2	〃	13.0	5.4	5.0		29	K E F 10 C-31-5	〃	15.0	5.8	6.7	
11	K3E32-7-3	〃	15.0	6.0	5.3		30	K E F 10 C 31-1	〃	16.4	6.6	7.8	
12	K3E32-7-4	〃	12.0	4.7	4.3		31	K B 12-2	〃	16.1	5.3	7.9	
13	K3E52-53-9-1	〃	12.0	5.2	4.6		32	K E 10-94.6	小皿	7.6	2.1	4.2	
14	K3B34-13-1	〃	14.0	5.6	5.3		33	K F G 15 C -9	〃	8.0	2.0	4.5	
15	K F G 17-1-C T 48	〃	12.7	3.7	3.9		34	K E 10-102	〃	8.2	2.2	4.3	
16	K E 10 P 110-2	〃	14.0	5.5	7.0		35	K D 10-44-1	〃	8.0	2.0	4.0	
17	K F 10.11-15	〃	14.0	5.6	6.4		36	K E 10-1	〃	8.1	1.9	4.7	
18	K F 16.17 C-10-2	〃	14.0	6.0	4.5		37	K B 10-51	〃	8.2	2.4	6.6	
19	K F 16.17.10-1	〃	14.0	5.4	4.3		38	K B 8-18	〃	8.2	3.8	4.1	

胎土は、碗皿とも細かい良質の砂質粘土が用いられ、色調は黄灰色と灰色である。

また、碗のなかには放射状交叉刻線をつけたオロシ碗片がみられる。

3 第 5 型 式

第5型式は碗皿ともに小破片であるが若干出土している。(碗は挿図39の20, 皿は同図22)

(田口昭二)

- 註 1. 各務原市出土の広口壺と類似するものである。
2. 檜崎彰一 「中世陶器」 昭47. 11. 神奈川県立博物館
3. 美濃古窯山茶碗の編年は5窯期に区分されている。
田口昭二 「美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗の編年」 昭和 48. 2. 精華小
4. 猿投窯の碗は珪石粒を含む砂目粘土を用い、腰部の張った浅碗である。
(檜崎彰一先生ご教示)
5. 常滑窯の碗は長石粒を含む砂目粘土を用い、「八」の字状に開いている。
(檜崎彰一先生ご教示)
6. 今井窯とは尾北の犬山市今井古窯址群をいい、器形及び胎土は美濃のもと類似しているので同一圏内とみてよいだろう。

中 世 陶 器

中世陶器以降の陶器中、山茶碗を除いた。すりばち・常滑系甕、古瀬戸釉・桃山陶釉など陶器を一括してここに考察する。

総数 200 余点、甕は第 3 地点からの出土となっている。

1 すりばち (挿図41)

すりばちは口縁部12点、胴部18点の計30点が出土している。

いずれも美濃窯系の陶質のもので、鉄サビが施こされている。挿図41の10参照。

口縁部先端の厚さは約10mm前後のもので、比較的薄手である。

櫛目条痕については、図版41A及び挿図41の10に見られるような細線で、2cm中10本が認められる。

その他、おろし皿底部一片が出土している。図版41及び挿図41の1参照。

2 甕 (挿図41)

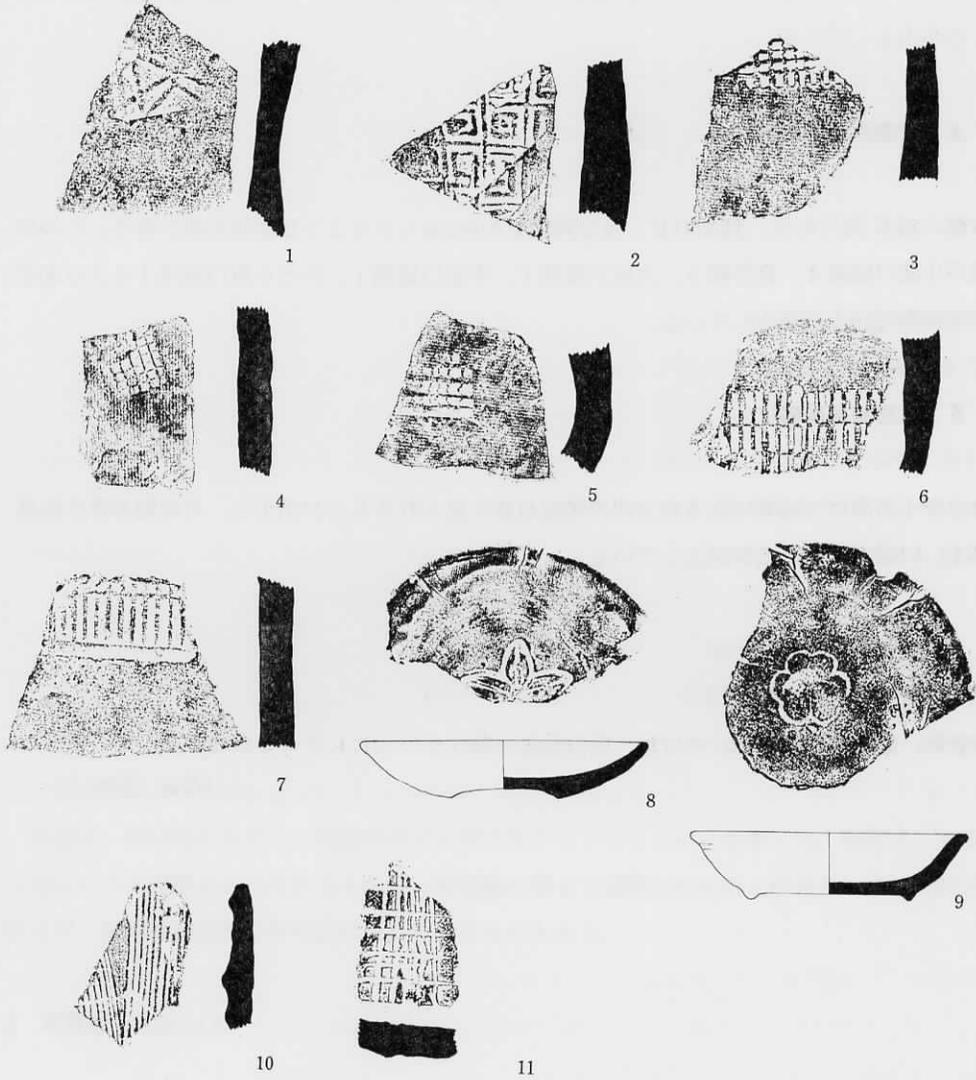
甕は総てが常滑系のものと見られ、肩部・胴部・底部合わせて29点。押印文様のある、肩部10点が出土している。

厚さは1.2cm前後のものである。胎土は、珪石粒と長石粒を多く含んだ砂目粘土で、赤褐色に焼けている。

図版41A及び挿図41に見られるような7形式の押型文がある。

- (1) 三角形区画の中に、斜線によって構成されている。挿図41の1
- (2) 方形区画の中に、1点文と四角が組合せとなっている。挿図46の2
- (3) 格子文で縦横とも太目の線で構成されている。挿図41の3
- (4) (3)とほぼ同様の構成であるが細目の線となっている。挿図41の4
- (5) (3)にみられるような格子形の中の縦線がやや波目文となっている。挿図41の5
- (6) 挿図41の3から7までは、何れも垣根様式の押型文となっているが、その縦線の長さに変化のあるもので、挿図41の6は上下端に沈線のないものである。
- (7) (6)に比べて上下端に沈線のあるもの。挿図41の7

挿図41 中世陶器拓影



3 古瀬戸釉系陶器

古瀬戸釉の施こされた天目茶碗陶片，口縁部10，高台部5，胴部19点が出土し，ほかに黒鉛釉陶片20点，黄鉛釉陶片8点が出土している。

このほか、やや不溶の鉄釉印花皿、挿図41の8及び図版41Aに見られるように、口縁部二重釉掛けとなって、印花の施こされた皿がある。

又、古瀬戸瓶子陶片でひも作り内面無釉、外面80%釉剥落のものと内外面共同釉が施こされたものが出土している。

4 黄瀬戸釉系陶器

黄瀬戸釉系陶片には、図版41B、及び挿図41の9に見られるような印花小皿がある。この他黄瀬戸小皿口縁部4、高台部5、大皿口縁部1、中皿口縁部1、ひだ小皿口縁部1を含む20点及び灰釉陶片10点が出土している。

5 志野釉系陶器

絵志野小皿陶片で毛筆による花文様の図版41Bに見られるものが出土し、その他志野小皿高台部1、口縁部2の3点が出土している。

6 その他の陶器

青磁釉、銅縁釉、鉄砂釉、そば釉、灰白釉等の陶片がいずれも2～3点宛出土している。

(古川 庄作)

土 製 品

土器以外の土製品には、土偶・滑車形耳飾・土錘・紡錘車・模造鏡などが出土している。

1 土偶（図版40、挿図42）

土偶は、別表の様に第1地点のG—G 7から北のG—F 19にかけての地域から点々と29点出土したが、いずれも破損して完形品は出土していない。それらは、面部7点・胴部5点・手部4点・脚部13点である。

顔面部は、眉や鼻が粘土紐をT字形に貼りつけて作られ目は線画きしてあるものや、ややくぼめてあるもの、孔が貫通しているものや、粘土ではりつけてあるものもある。

挿図42の3のように頭頂部に幅0.5cm、高さ0.4cmほどの突起があってこれがあたかも髻のようにみえる。

胴部の破片で、挿図42の1のように、前面に乳房が作り出され、肩部から胸部にかけて、また背面の上部に一列のへら状の突刺文が見られ、また胸部から腹部と両脇に3列のへら状の突刺文が施されている。尚下部から胴体の中へ直径0.6cmの孔がかなり深く縦にあげられていて、何か棒状のものによって成形したものと考えられる。

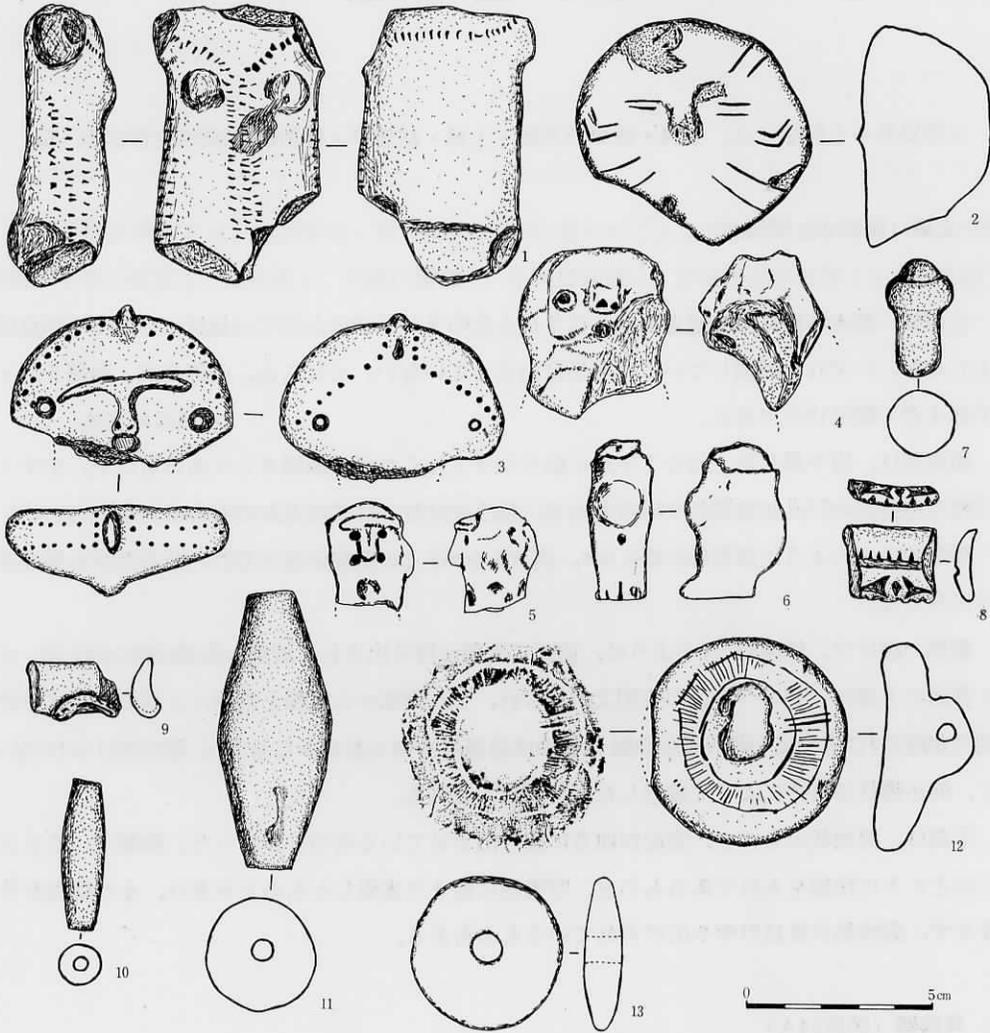
手部は、筒袖状のものと、突起が四方に張り出させているものがあった。脚部は、くるぶしのところに沈線を入れてあるものと、写實的に指まで表現したものがあり、また両脚が分岐せず、胴体部が延長しやや広げられているものもある。

2 耳飾類（図版34A）

10点出土しているが完形品は3点で、他は破損品である。

3点の完形品のうち1点は、長さ3.1cm、最大径1.8cmの耳栓形のものである。（挿図42の7 図版34A）他の2点は、いわゆる白形のものであって、径が4.3cm、厚み1.5cmのものと、径が3.2cm、厚み1.9cmのものである。他の7点は、滑車形で文様を施したものもある。（挿図42の8）のように三叉状文様がみられ縄文晩期のものである。図版34Aの上段右のように粘土紐を貼付しそれに沈線文が施してあるものもある。

挿図42 土製品実測図



3 土錘 (図版35)

第1地点から137点, 第3地点から10点, 計147点出土している。ほとんどが破損品であって完形品は, 21点である。第3地点のH44グリットから出土している2点は大型で, 長さ7.5 cm, 径3 cmほどで重さは52 gであった。他は15点が長さ4~5 cm, 径1~1.5 cmで重さが5~8 gほどの細長い型のもので, ずん胴型で長さ3.7 cm, 径2.7 cm, 重さ25 gのもので, 球型で長さ3 cm, 径2.2 cm, 重さ19 gのものがあった。

あとの2点は、以上のものよりも小型で、長さ1.4cm、径1.3cm、重さ2.5gのものと、長さ1.7cm、径1.6cm、重さ4.5gのものであるが、この2点のほかは紐通し穴が0.3~0.5cmあるが、この2点は細く0.2cm弱である。

4 紡錘車（図版34B挿図42）

第1地点から2点出土している。挿図42の13の1点は、径4.1cm、厚さ1.1cm、孔の径0.8cm、重さ19gの円盤形である。他の1点は焼成が悪く、形が大部くずれているが、径2.9cm、厚さ0.8cm、孔の径0.4cm、重さ10gである。土器の破片を利用した直径4~5cmのものが見られる。随ってこれらは二次的に穿孔されたものである。

5 土製模造鏡（挿図42の1）

第3地点のH44グリットから出土している。径5.8cm、厚み1.3cmで、ほぼ中央に幅1.1cm、長さ2.3cm、高さ1.2cmの鈕が作られて、紐通しの穴がつくられている。鏡面は凹状になっている。鈕を中心とした粗雑な2本の同心円の線刻の中に細い線刻が放射状に入れられていた。

土師器を伴った堅穴住居址と思われる地点から検出されている。

6 小棒状土製品

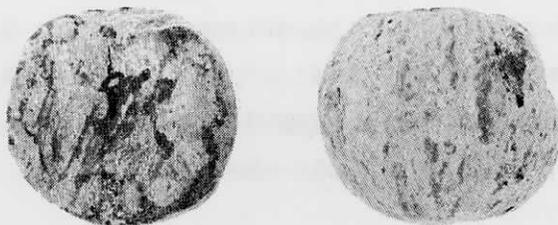
第1地点から2点出土しているが、1点は径0.6cm、長さ2.1cmのもので他の1点は、径0.6cm、長さ2.5cmであるが折れたようにも思われる。もう少し長かったかも知れない。前の1点は完形品と思われるが用途は不明である。（中島勝国）

自 然 遺 物

自然遺物としては、小骨片と炭化物が出土したのである。この遺跡の立地する地点は酸性土壌で、骨の保存が困難であったため細片化され、長さ 3.5 cm・巾 2 cm程のものが大きい方である。中には鹿の角と思われるものが見られる。また、第1地点で G A 11の合口甕棺中より小骨片が出土している。その他、G-B 13・14・G-E 13附近が多く出土した地点である。

炭化物はドングリの実の外、不明なものなど合計12点出土している。木炭片が 1 G B 8に多く知られた。いずれも小破片であり、黒色土層及び攪乱層より出土したものである。(可児)

挿図43 ドングリの実 (拡大2倍)



結 語

北裏遺跡は、調査の結果第1地点と第3地点の上に立地していたことが知られたのである。

今回の調査では道路建設敷地内のみであったが、この地点の東西の隣接地域にも遺跡が延びている事が当然考えられる。

第3地点においても東西の隣接地はすでに宅地その他の事情によって煙滅している部分が大半であるが、しかし今後第1地点第3地点の隣接地域の土地利用について遺跡保護の立場より埋蔵文化財への対策に充分なる配慮が要求されることが結論づけられる。

遺構については、住居址、炉址が検出されたのである。第3地点の方形住居址は、土師式土器を伴出するものである。伴出土器は古式土師器に分類される時期のものである。第1地点の炉址を伴う住居址のプランは不明であったが、柱穴と推定されるピットより住居址内の炉址である。この時期に付いては、炉址の附近に検出された五貫森式に比定される合口甕棺が住居址より後に埋められている事が発掘時の所見によって知られるが、炉址内の石剣の破片の出土している点等より、縄文式晩期の時期のものと推察される。第1地点における方形の土壇は既述の様に芋貯蔵用のピットと考えるべきである。溝状遺構であるが縄文式時代のものか、弥生式時代に属するか、それ以降のものかを決定する積極的な資料は見られなかった。しかし、須恵器、山茶碗等の比較的新しい時期のものが出土しなかった点よりして、その下限を弥生式時代に置いてよいのではなかろうか。石組遺構中（9B9, C9）小形の石囲の上に蓋石の置かれた遺構は山梨県坂井遺跡などで報告例が知られる点より同類のものと考えられる^{註1}、また石冠状の石を中心とした石組遺構、これ等は縄文式晩期の遺構と考えるべきである。その他古墳の基底部分の一部と考えられるものが知られている。次に出土遺物中土製品を見ると、縄文時代早期より晩期に互る土器、弥生式土器、土師式土器、須恵器、山茶碗、中世以降の陶器類などが出土している。これ等の特記すべきものを考察すると、縄文前期前葉の石塚上層式に比定されるものがかなり見られ、その施文の方法も数種類が数えられる。中期初頭の下島直後式土器に比定されるものが存在することは、次の発展段階との関係の中で注意すべきである。

縄文式中期の鷹島式と五領ヶ台式に比定される一群の土器が同一ピット内より出土していることは、五領ヶ台式との関連の上で注意すべきである。九合洞窟遺跡において五領ヶ台式の伴出が見られる^{註2}。また上灘下野切遺跡、深作裏垣内遺跡などにおいても五領ヶ台式土器と伴出している^{註3,4}。この鷹島式に比定、あるいは類似する土器に付いては特に最近注目される存在である。

後期の土器は少量であるが、尾張、三河地方に見られる後期後葉のものが知られる。

晩期の土器、亀ヶ岡系の精製土器とその影響の中に発生したローカルのものと西日本的なものが知られる。北裏遺跡の主体となるものは美濃、尾張、三河に普遍的に見られる。^{註5}三河五貫森貝塚で出土した土器を標式とした、いわゆる五貫森式土器に比定されるもの、これに伴出する粗製土器が多く出土している。これ等の五貫ヶ森式土器の精製、粗製の使用によってススの付着した甕を再使用して合口甕棺が埋められている。また土製品中晩期の三叉文様の見られる耳飾などが出土して晩期の特色を示している。しかし、白状のものに付いて縄文式後期時期頃のものと同推察される。

弥生式文化に付いて、前期より後期前葉に至る遺物が出土している。紅村も指摘している様に、尾張における貝田町式の第3類深鉢型土器と同一タイプの土器が弥生式後期まで降っているか、いなやの問題が今後の課題として提起されよう。その他紡錘車など土製品が出土している点などより、北裏遺跡を中心とした周辺の地域に稲作農業を主体とする弥生式文化が展開された事が知られる。

土師式土器であるが、第3地点の方形住居址内より出土したが、底面より10～15cm程の上位より出土したが、住居址内より他の遺物の出土が見られない点より、流込みとしても同時期のものであると考えられる。土製模造鏡の出土は注意すべきである。これ等の資料は今後この地方の土師式土器の研究に好資料となろう。

須恵器及び灰釉陶器は、その主なるもの出土地点が第3地点で攪乱地点より出土している。この地域はかつて白山神社がありその所が円墳で石室が存在していた点より、^{註6}古墳に関する遺物、及び白山神社に関連した資料でないかと推察される。中でも三耳壺は注目すべき資料である。

山茶碗系陶器は多量に出土しているが、地点別に見ると第1地点に鎌倉期のものが多く、第3地点は室町期のものが主体であるというこれが測定可能資料によって結果が出たのである。従って時期的に地点に差がある事が知られる。

これ等山茶碗の産地について見ると、美濃系のものを主とし、猿投系、常滑系のものが出土している。今後各地に於けるこの種の遺跡が調査され、分類が進む事によって、これ等の製品の流通、その遺跡に於ける性格が解明されるであろう。

この外に常滑系の甕の破片が少量と、それ以降の陶片が少量出土している。

石製品としては、打製石鏃、打製石斧、磨製石斧、石錘、石錐、石匙、スクレイパー、石刀、石棒、石冠、石皿、砥石、凹石、磨石、敲石、独鈷石、石包丁、軽石製石器、円盤状打製石器、球状耳飾、小玉、勾玉、磨製石製器などが出土したのである。

特に石製品の中で、縄文式時代の時期に属する打製石鏃の出土が非常に多量に出土している

ことは本遺跡の特徴の一つと言えよう。これ等の石鏃の原石は木曾川の上流、益田川の峰一合遺跡周辺に礫として産出する黒雲母安山岩が主体となっていることは当然である。有柄鏃が全体の一割近く見られる。また型態による時期変遷を考察するには単純遺跡による分類が更に進められ、その上で資料の取扱に十分な検討がなされなければ不可能と言えよう。しかし既述の有柄鏃中、肩を有するもの、また、その他に分類した中の五角形状のものは晩期の単純遺跡の^{註7}出土例よりしてその時期のものであろう。第1地点に7,883点という大量の出土が見られた事は他の多くの遺跡との関連の上で今後の課題とすべきである。唯一点であるが、石包丁が出土した点、弥生式時代の生産用具の存在が知られた。その他石製遺物中に特殊なものが二、三点出土している。

石冠の出土例が多く見られる点と、石劔、石刀片の見られる点は晩期の遺跡としての性格を示すものであろう。

この他打製石斧は多量に出土している。その大部分は欠損しているもの、また磨製石斧の片べりなど、その使用に対する色種な見解を俊示する資料がある。この外に、自然遺物として木実、骨片が出土している。

上記の様に多種多量の出土品と遺構を検出したのであり、北裏遺跡の今回発掘地点を含むこの附近一帯の地域は、縄文時代より今日に至るまでの永い人間の生活の場として使用されていたのであると共に、多くの歴史的遺産を包含した地域であった。今後更に出土遺物及び遺構に付いての関連性を追求して行かねばならぬ多くの課題を提起している。(大江 命)

- 註 1. 小出義治「新版考古学講座8 特論上」16頁 1969年
2. 澄田正一、大参義一「九合洞窟遺跡」1956年
3. 大江 命「上宅村の先史時代」1958年
4. 大江 命「飛驒の古考古学」I 1965年
5. 紅村 弘「東海の先史遺跡」綜括編 1963年
6. 北裏遺跡調査による地元の人々の話による。
7. 大江 命「飛驒の考古学」I 1965年(阿弥陀堂遺跡及び深作川向上段遺跡に見られる)

北 裏 遺 跡

昭和48年 3月28日 印 刷

昭和48年 3月31日 発 行

発 行 所 可 児 町 北 裏 遺 跡 調 査 団

岐 阜 県 可 児 郡 可 児 町
教 育 委 員 会 事 務 局 内
電 話 (05746) 2-1118

印 刷 所 燈 影 舎

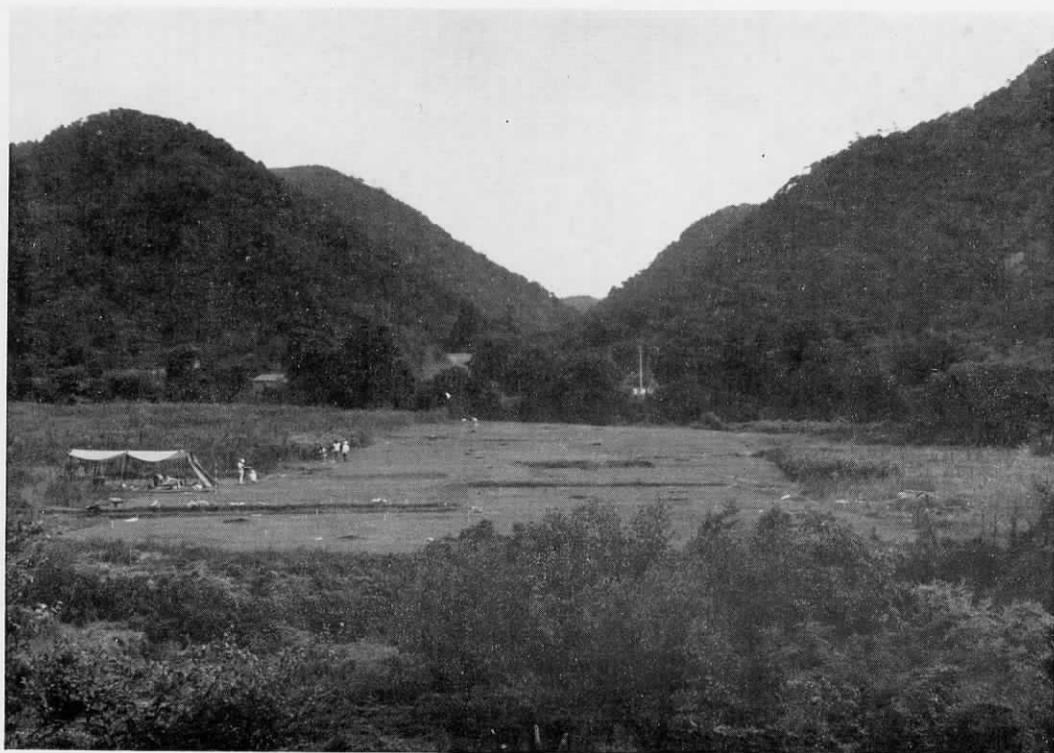
京 都 市 東 山 区 山 科 四 宮 一 燈 園 内
電 話 (075) 581-2901 ☎

版 圖



A

発掘地点全景



B

北方より第2地点を望む



A

北方より第1地点を望む（杭打ち）



B

第1地点グリット内における埋壘出土状態



A

南方より発掘中の第1地点



B

西方より第1地点南部の層序

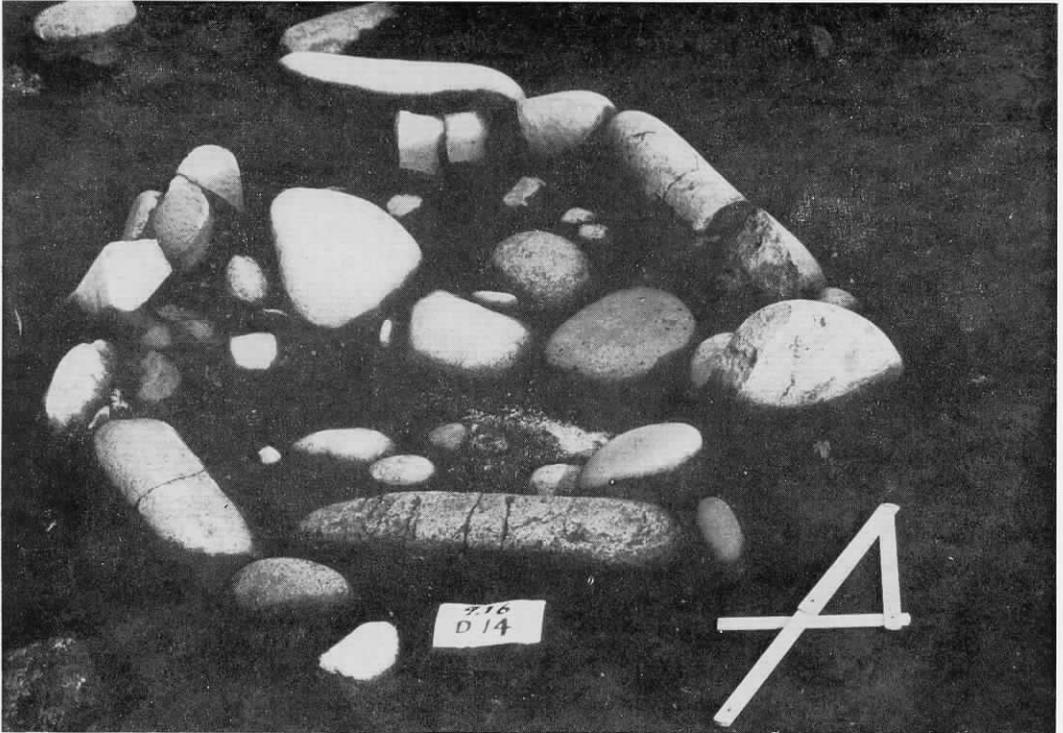


C

第1地点北部の層序 前方に見えるのは発掘中の第3地点



第1地点溝状遺構



A

第1地点 炉址



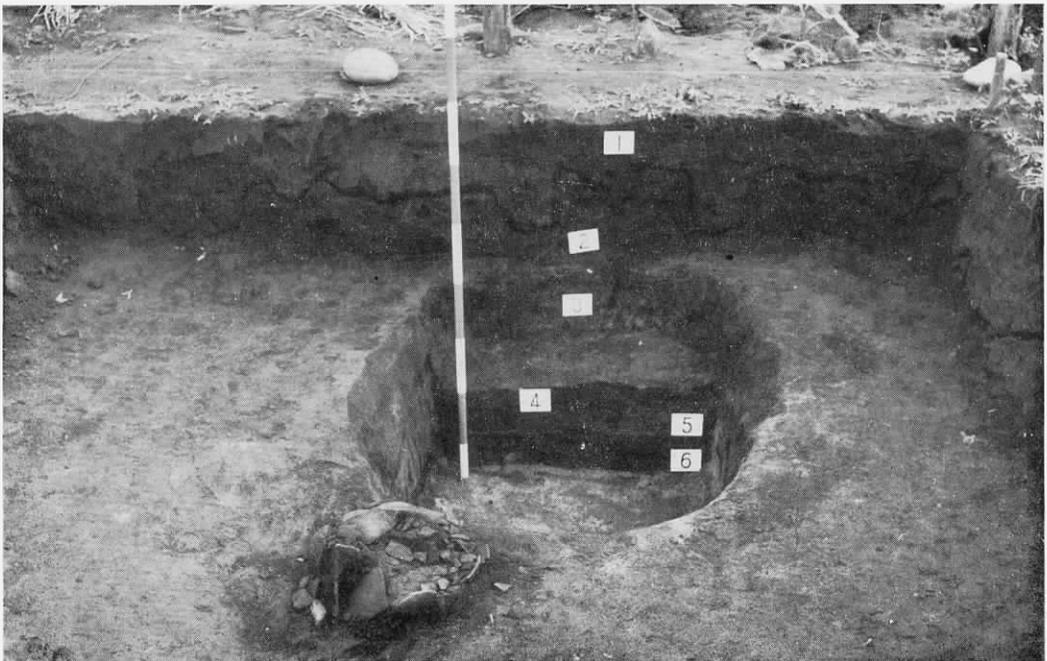
B

第1地点石組遺構



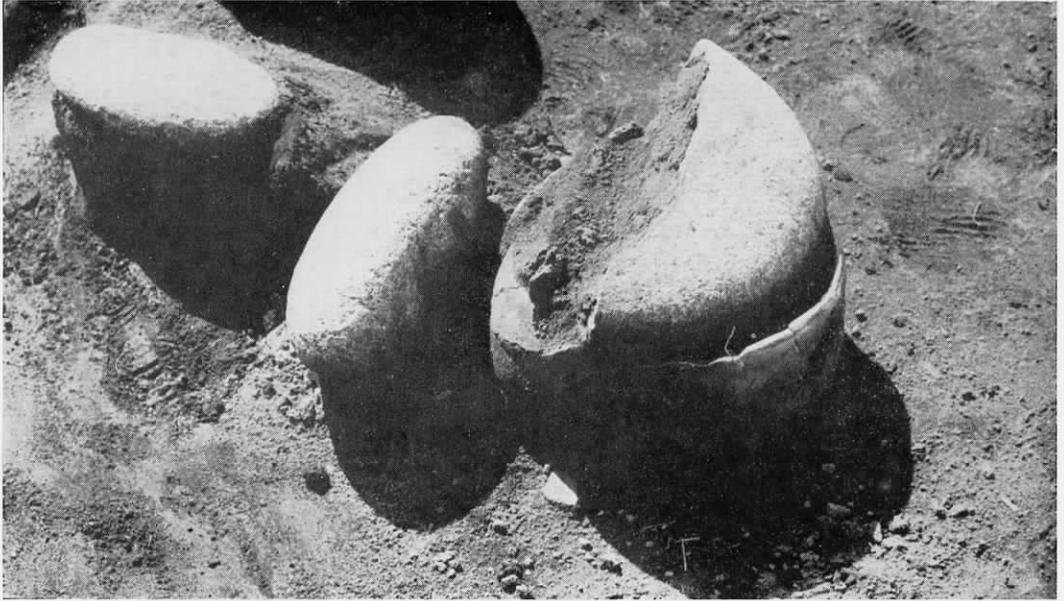
A

第1地点発掘状態



B

第1地点ピットと合口甕棺



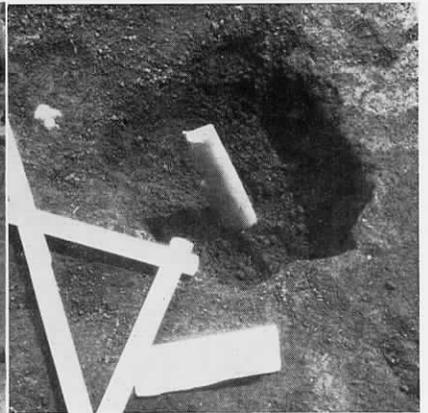
A

縄文式晩期土器出土状態



B

第1地点ピットの状態



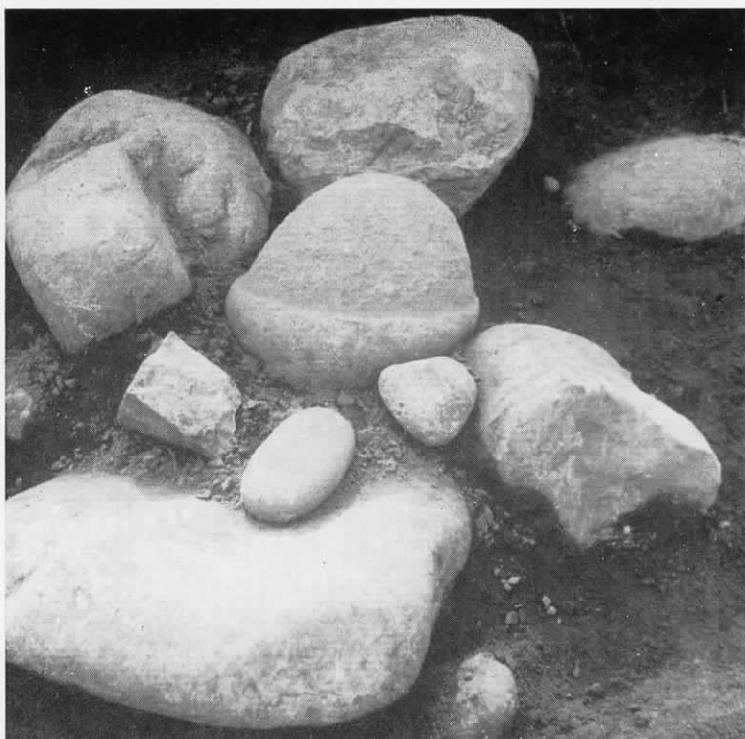
C

石刀出土状態



D

山茶碗出土状態



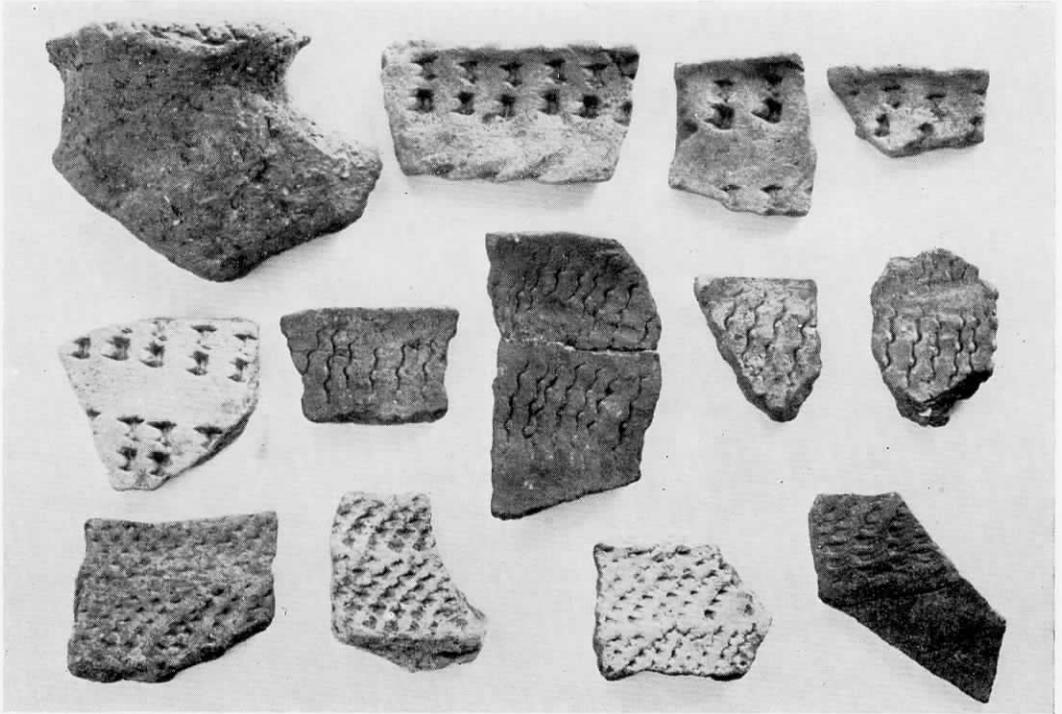
A

石組遺構



B

第3地点出土住居址



A

縄文式早期～前期土器



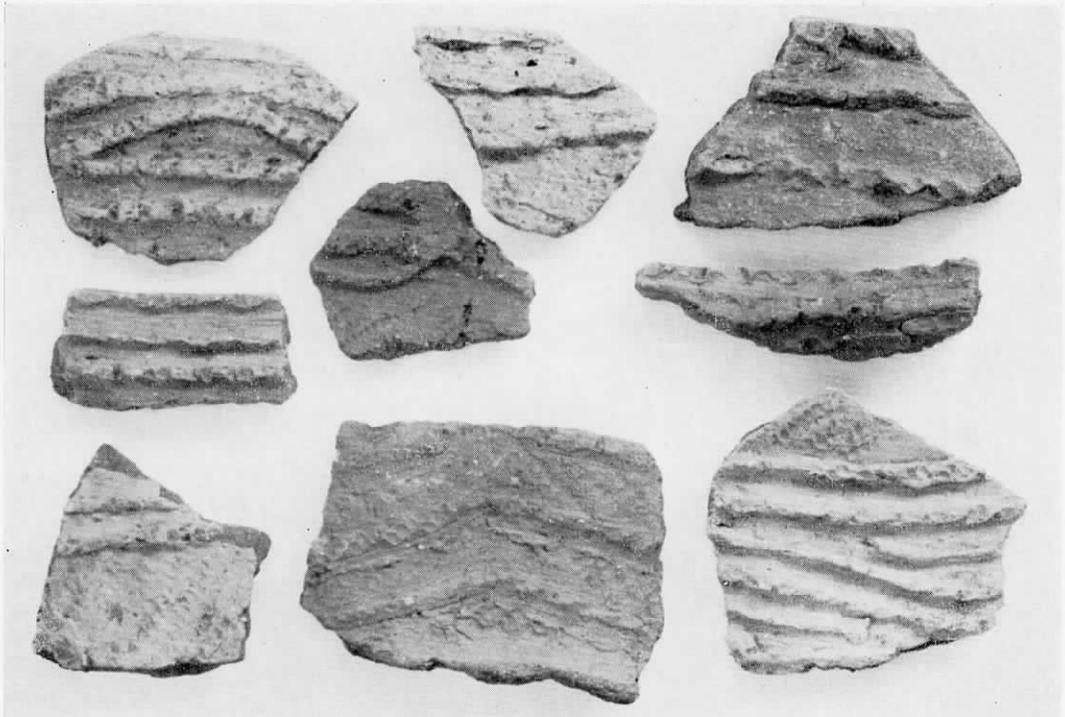
B

縄文式前期土器



A

縄文式前期土器



B

縄文式前期土器



A

繩文式中期土器



B

繩文式中期土器 h 18.5cm



C

繩文式中期土器



A 縄文式中期土器 残存部 h 14cm



B 縄文式中期壺形土器 h 27cm



C 縄文式中期壺形土器 h 22cm

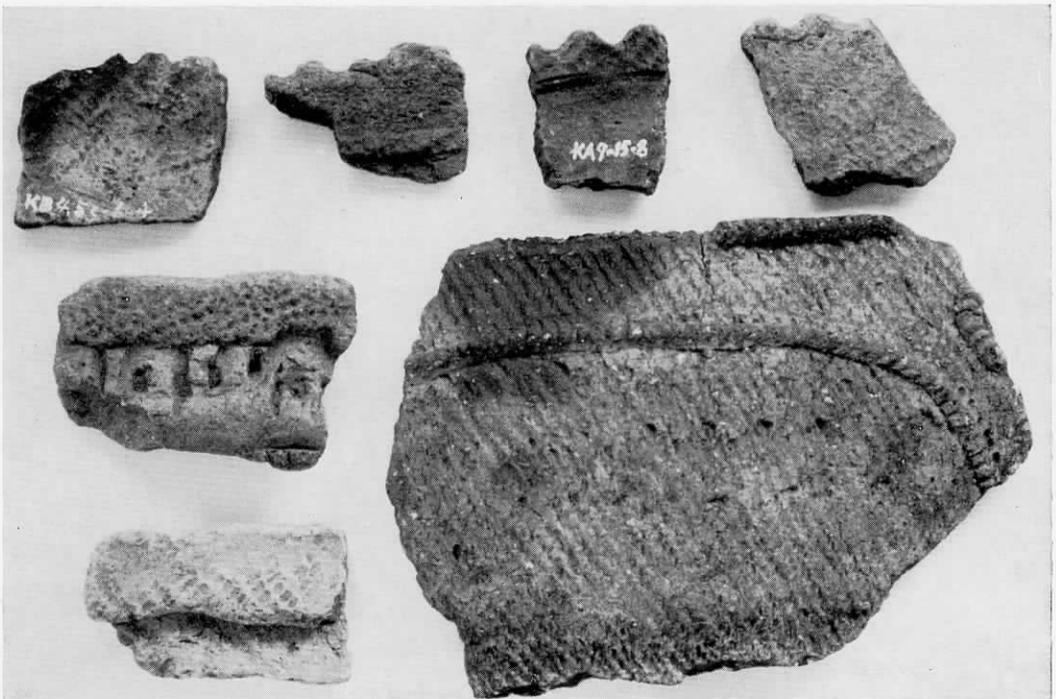


D 縄文式中期浅鉢形土器 h 11.5cm



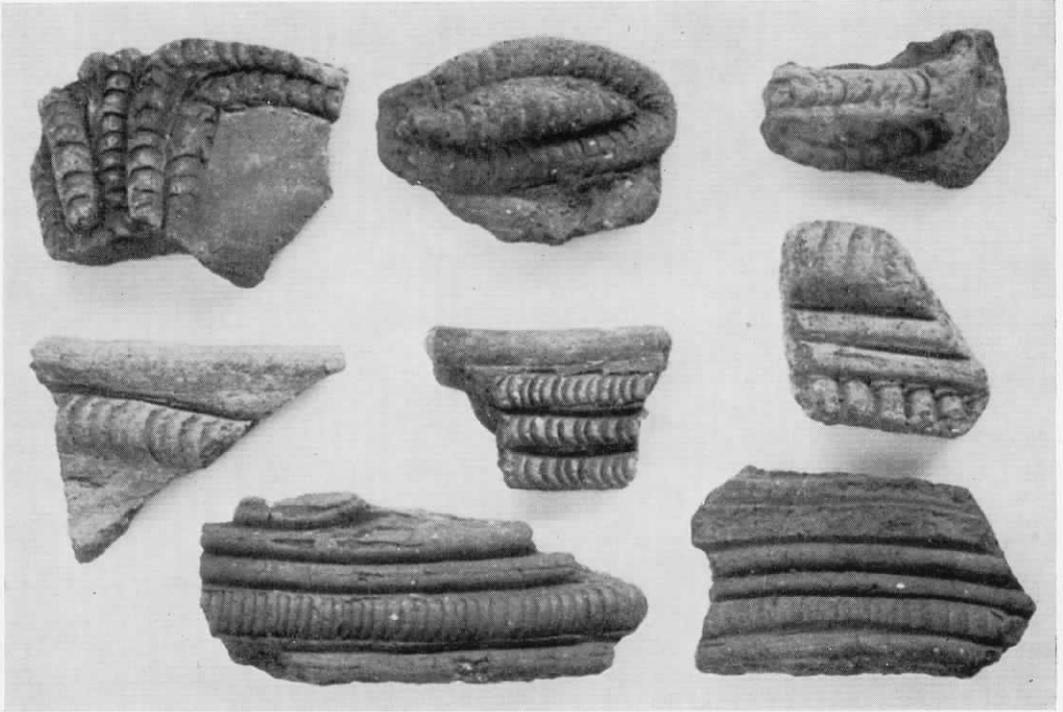
A

縄文式中期土器



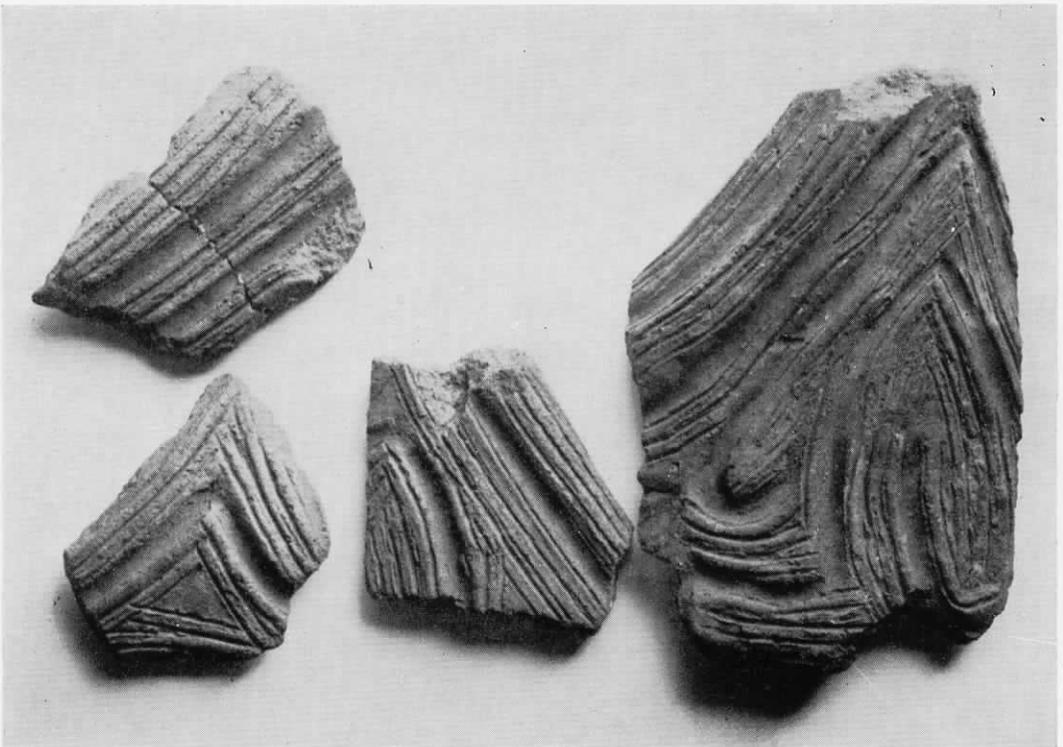
B

縄文式中期土器



A

縄文式中期土器



B

縄文式中期土器



A

縄文式晩期土器 残存部 h 13cm



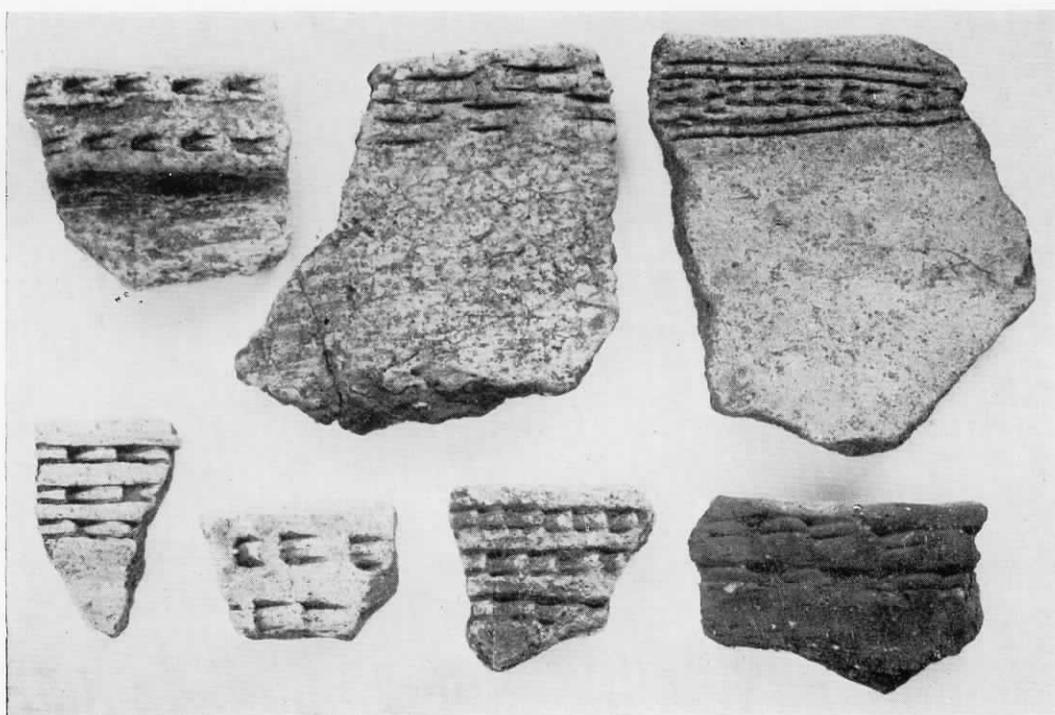
B

縄文式晩期土器 h 13cm



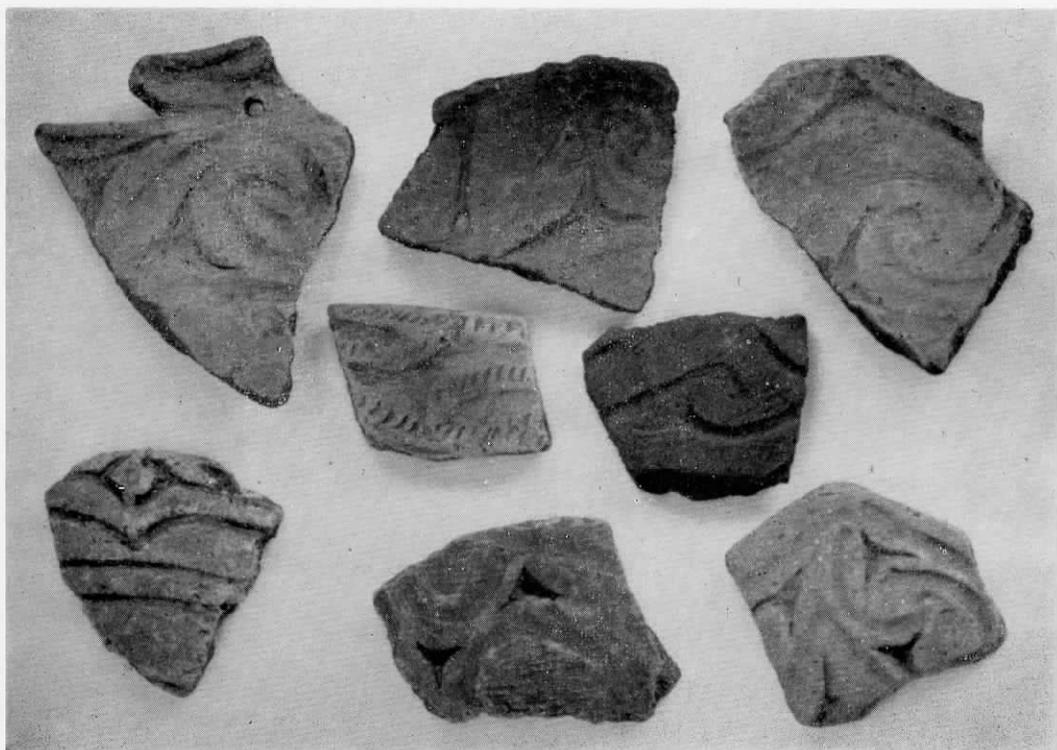
A

縄文式後期土器



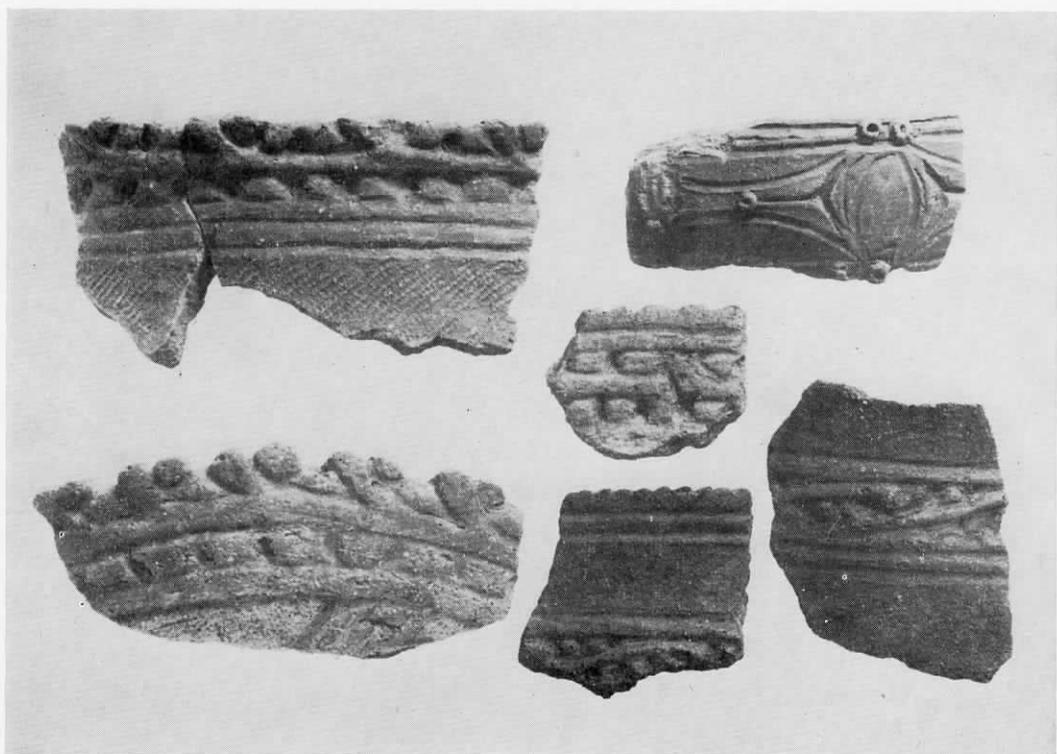
B

縄文式後期土器



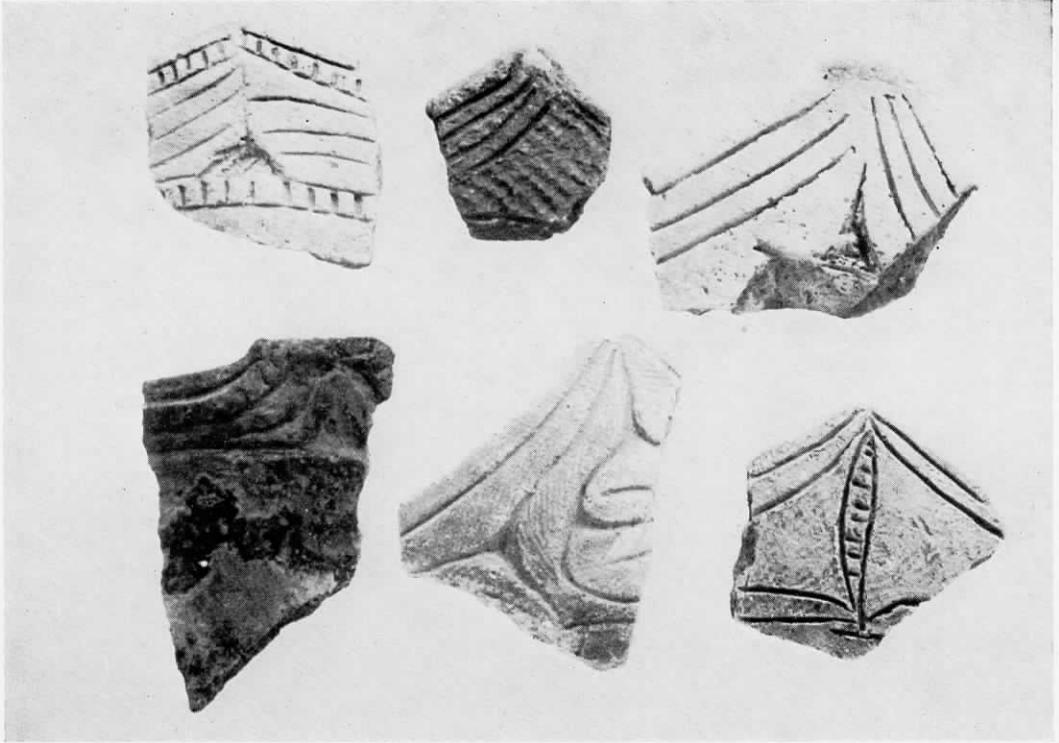
A

繩文式晚期土器



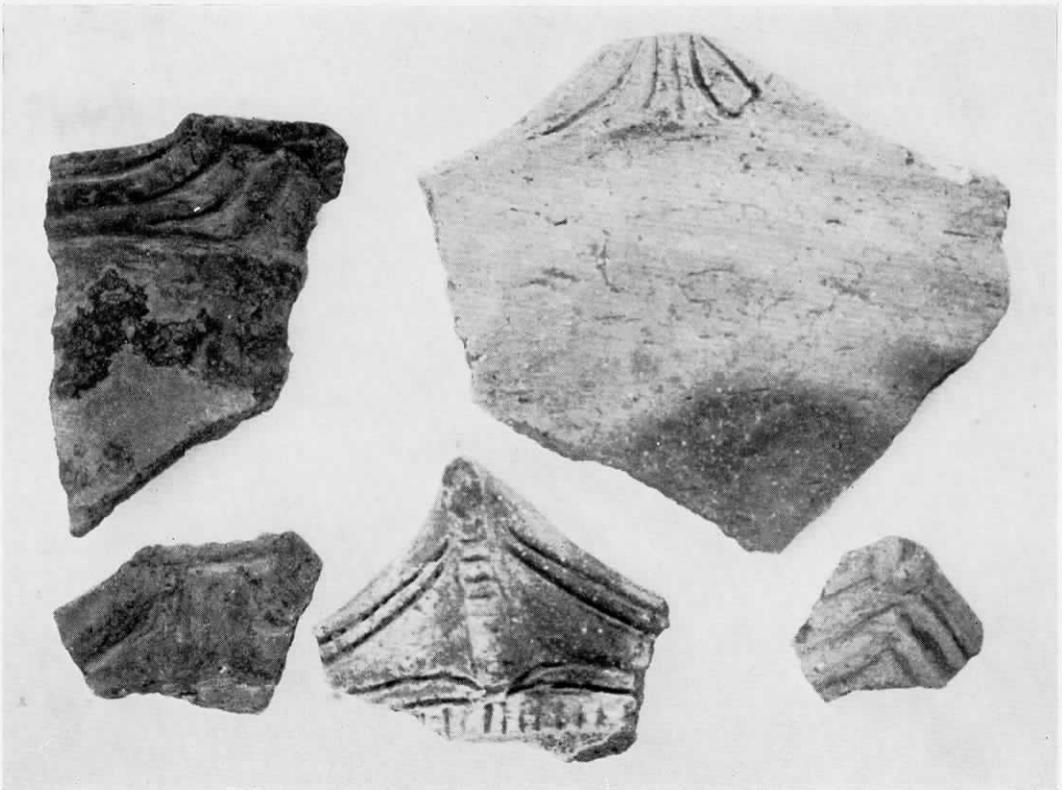
B

繩文式晚期土器



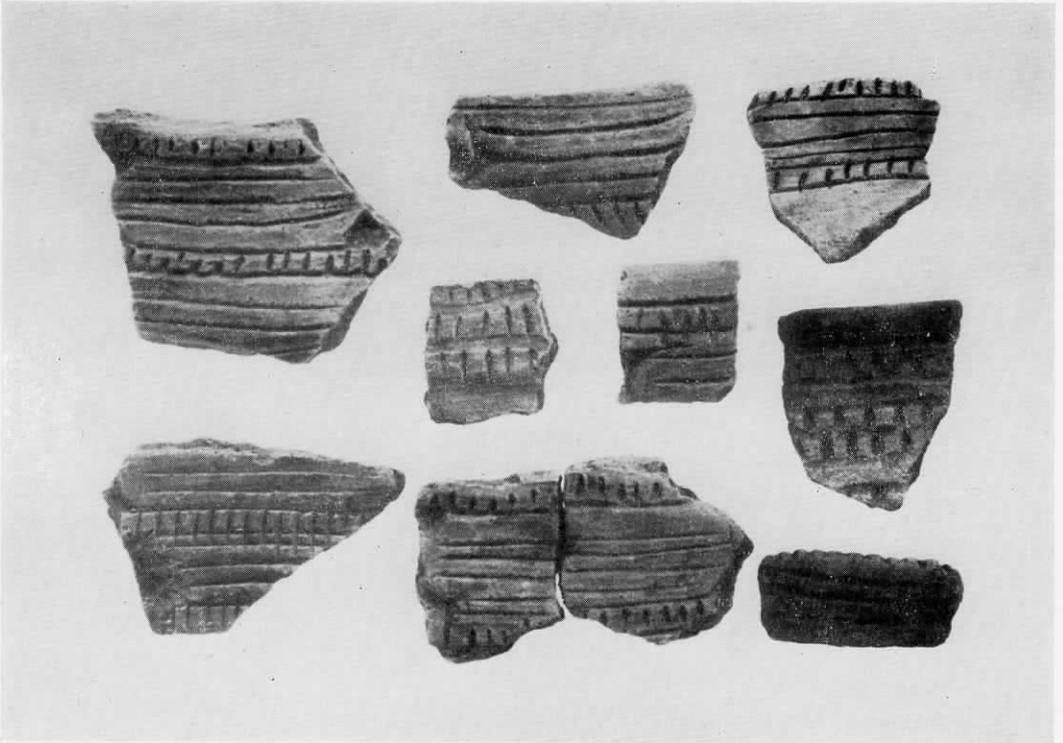
A

繩文式晚期土器



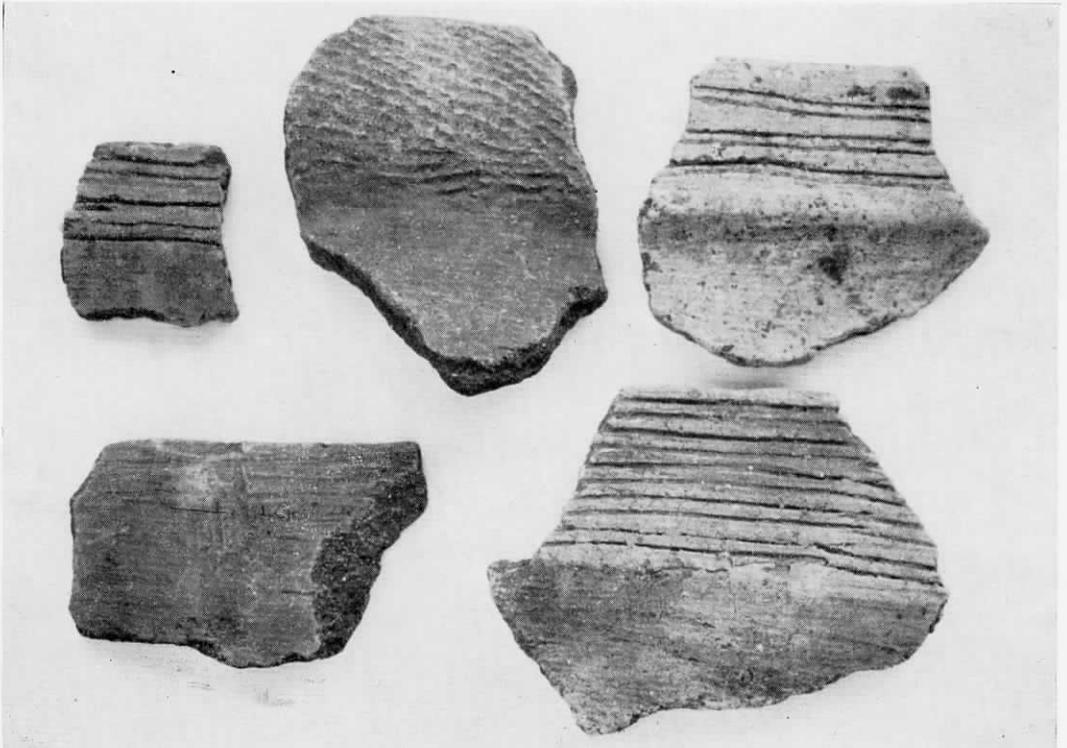
B

繩文式晚期土器



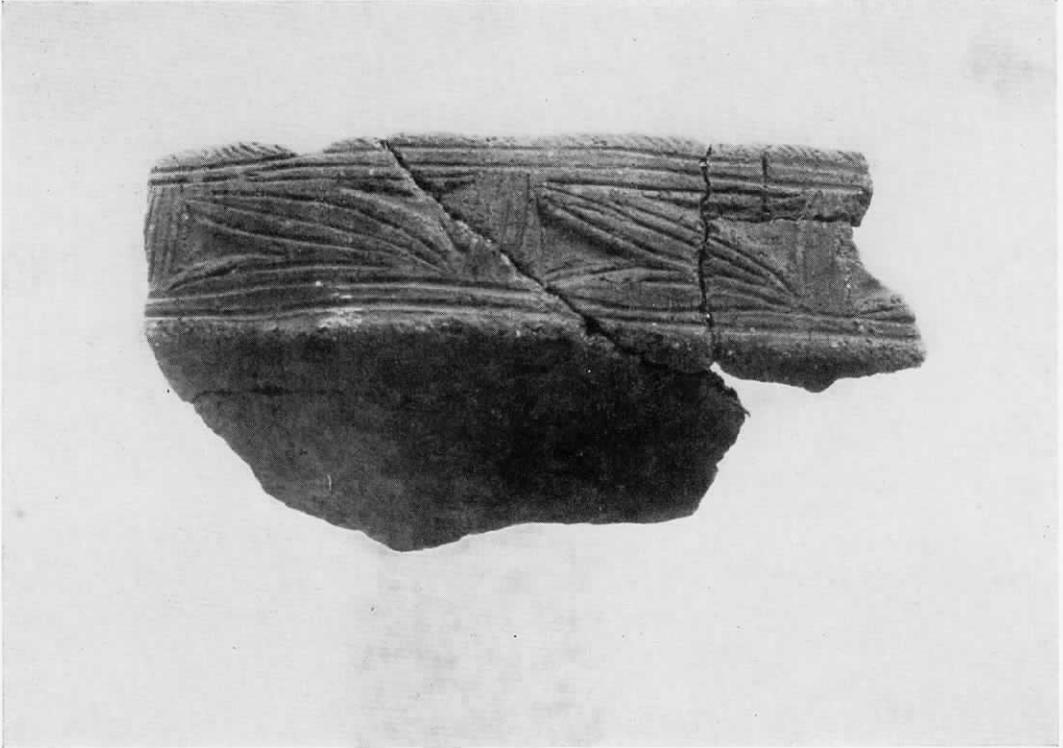
A

繩文式晚期土器



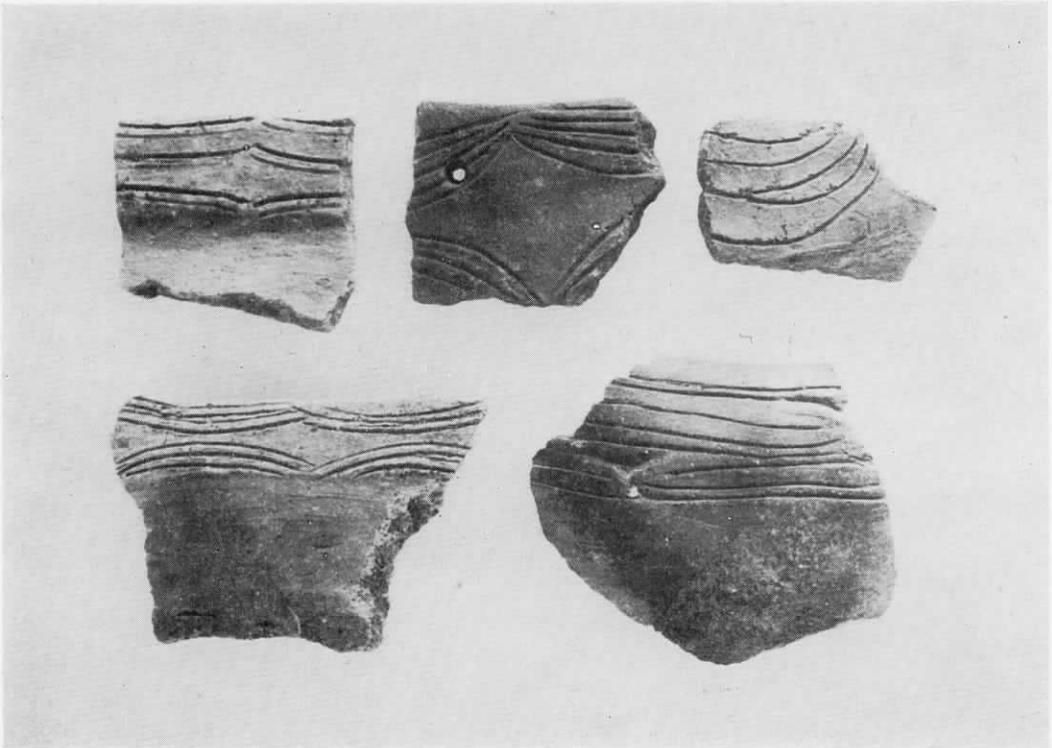
B

繩文式晚期土器



A

繩文式晚期土器



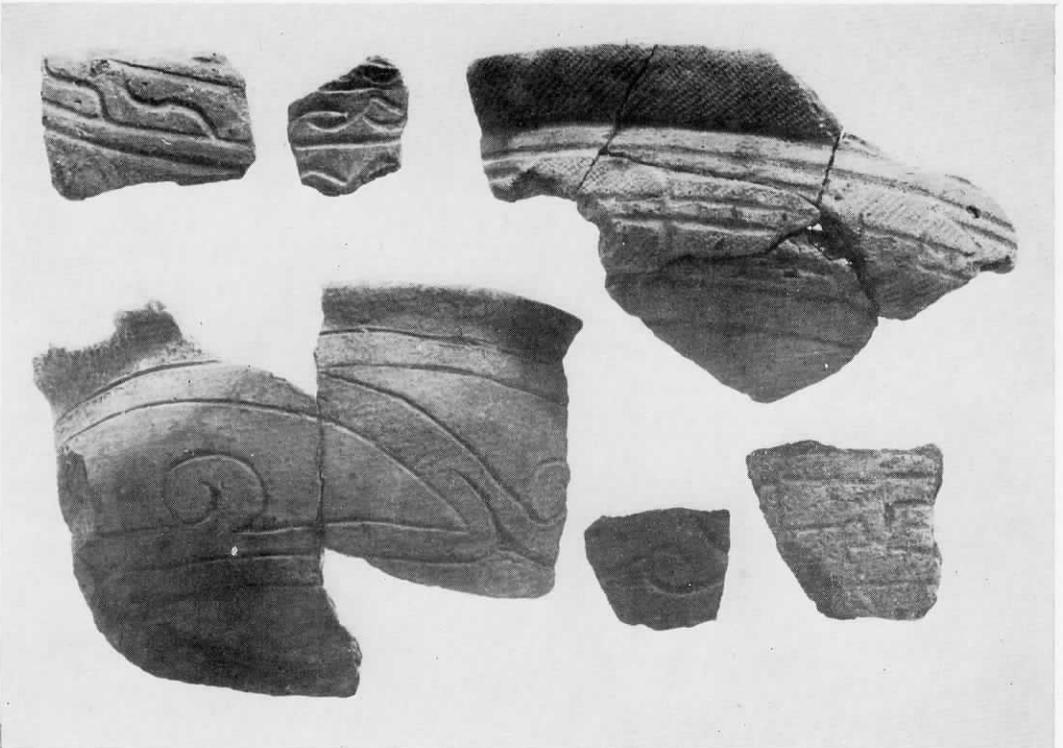
B

繩文式晚期土器



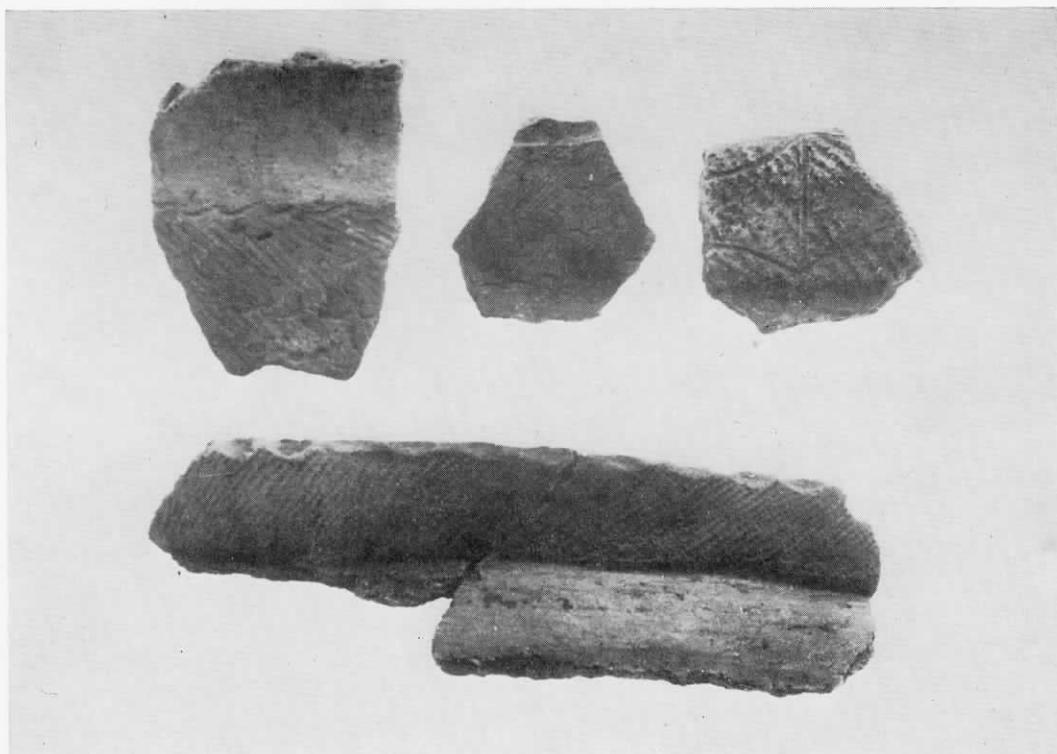
A

縄文式晩期土器



B

縄文式晩期土器



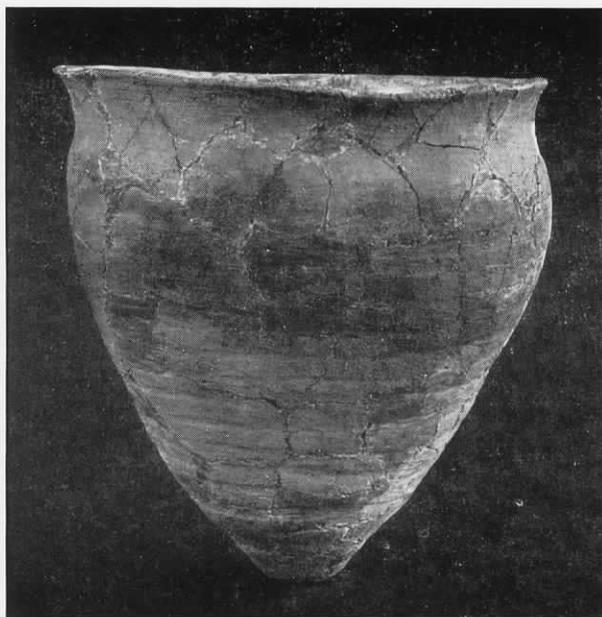
A

繩文式晚期土器



B

繩文式晚期土器



A

繩文式晚期土器 h 38.5cm



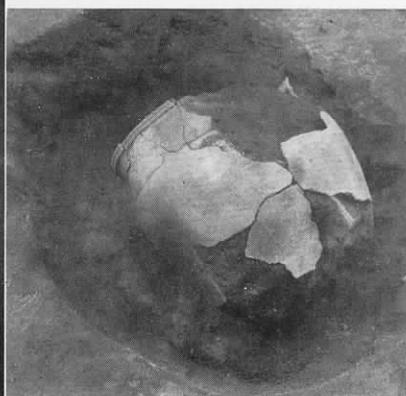
B

左同出土狀態



C

繩文式晚期土器 h 34.5cm



D

左同出土狀態



A

縄文式晩期甕形土器 残存部 h 29.5cm



B

縄文式晩期甕形土器 残存部 h 25cm



C

縄文式晩期甕形土器 h 27cm

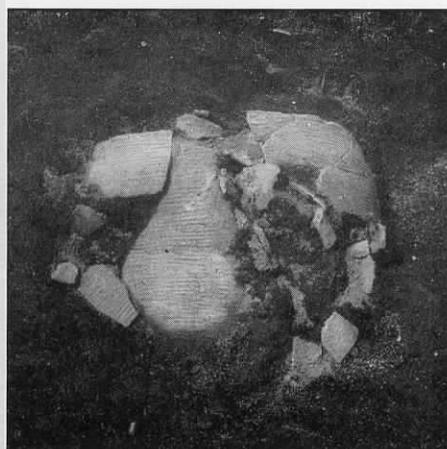


縄文式晩期甕形土器 h 28.5cm



A

繩文式晚期甕形土器 h 29cm



B

左同出土狀態



C

繩文式晚期甕形土器 h 39.5cm



D

左同出土狀態



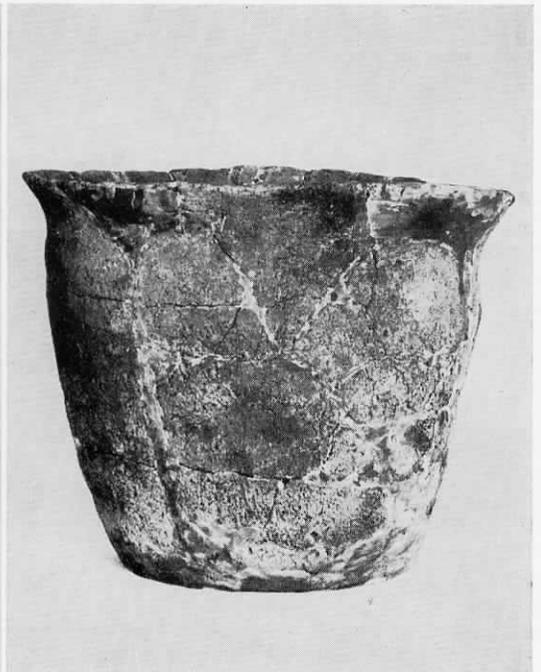
A

縄文式晚期浅鉢形土器 h 10.5cm



B

縄文式晚期甕形土器 残存部 h 29cm

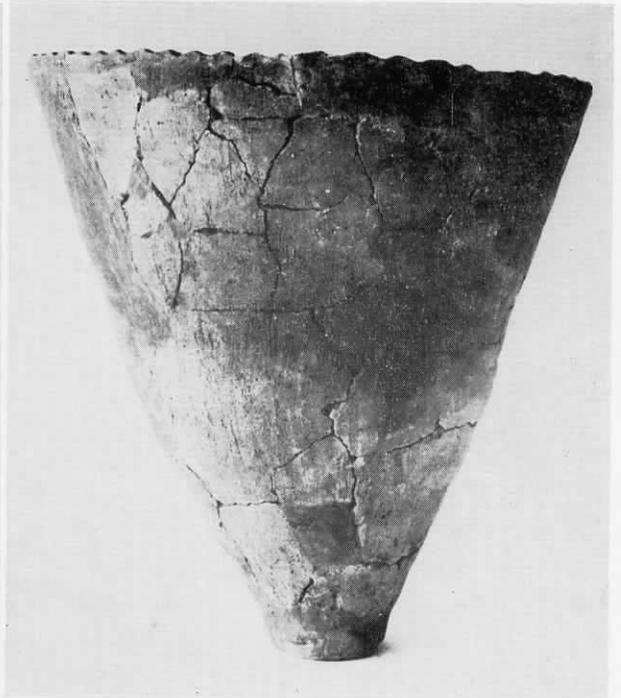


C

縄文式晚期甕形土器 残存部 h 28cm



A 縄文式晩期壺形土器 h 30cm



B 縄文式晩期壺形土器 h 37.5cm



C 縄文式晩期壺形土器 残存部 h 24cm

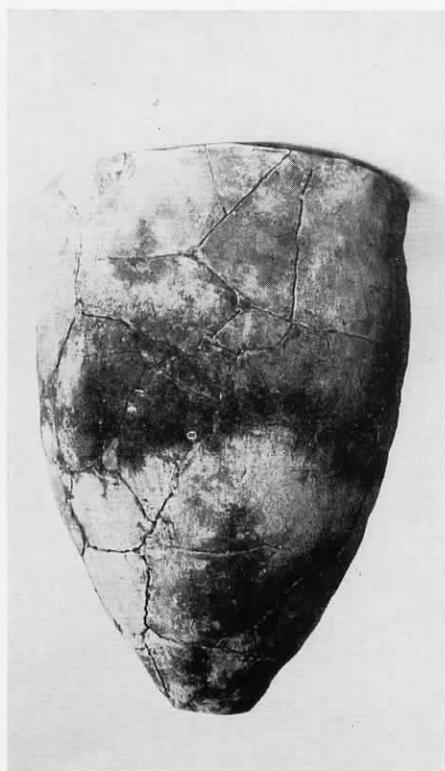


D 縄文式晩期小形壺形土器 h 13cm



A

縄文式晩期壺形土器 h 44cm



B

縄文式晩期壺形土器 h 38cm



C

縄文式晩期壺形土器 h 35.5cm



D

縄文式晩期壺形土器 h 37cm



A

繩文式晚期甕形土器 h 44.5cm



B

繩文式晚期甕形土器 h 40cm



C

繩文式晚期甕形土器 h 42cm



D

繩文式晚期甕形土器 h 35cm



A 繩文式晚期甕形土器 h 37.5cm



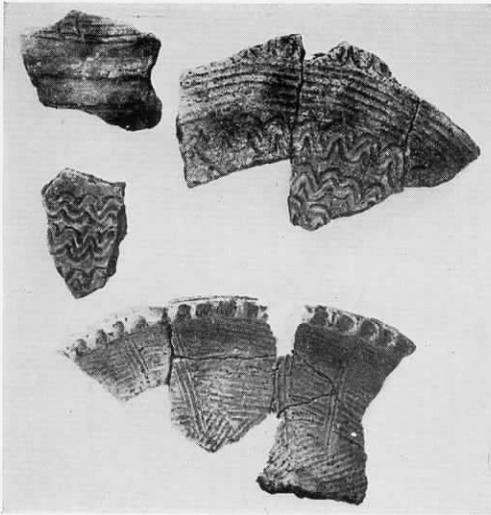
B 繩文式晚期甕形土器 h 44cm



C 繩文式晚期甕形土器 h 37cm

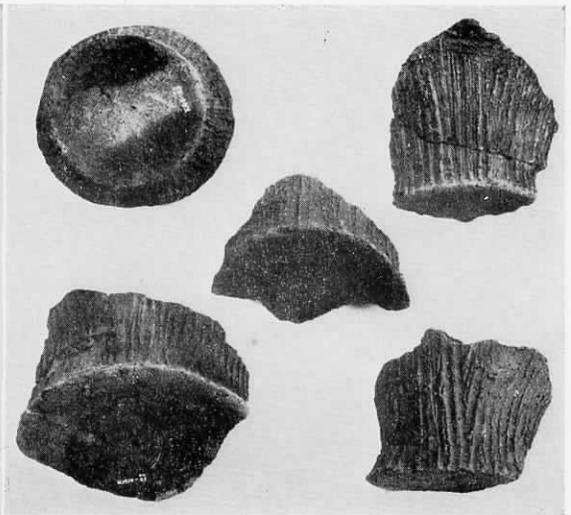


D 繩文式晚期甕形土器 h 33cm



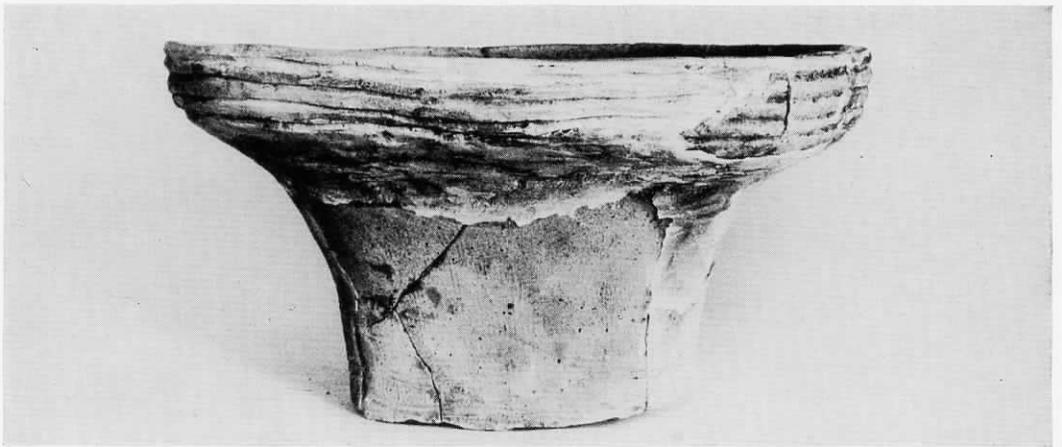
A

弥生式土器



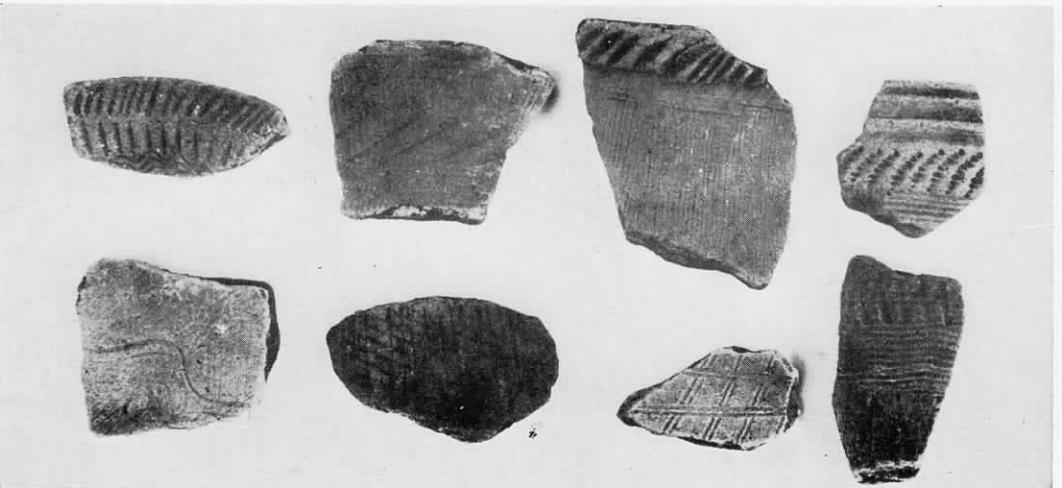
B

弥生式土器 底部



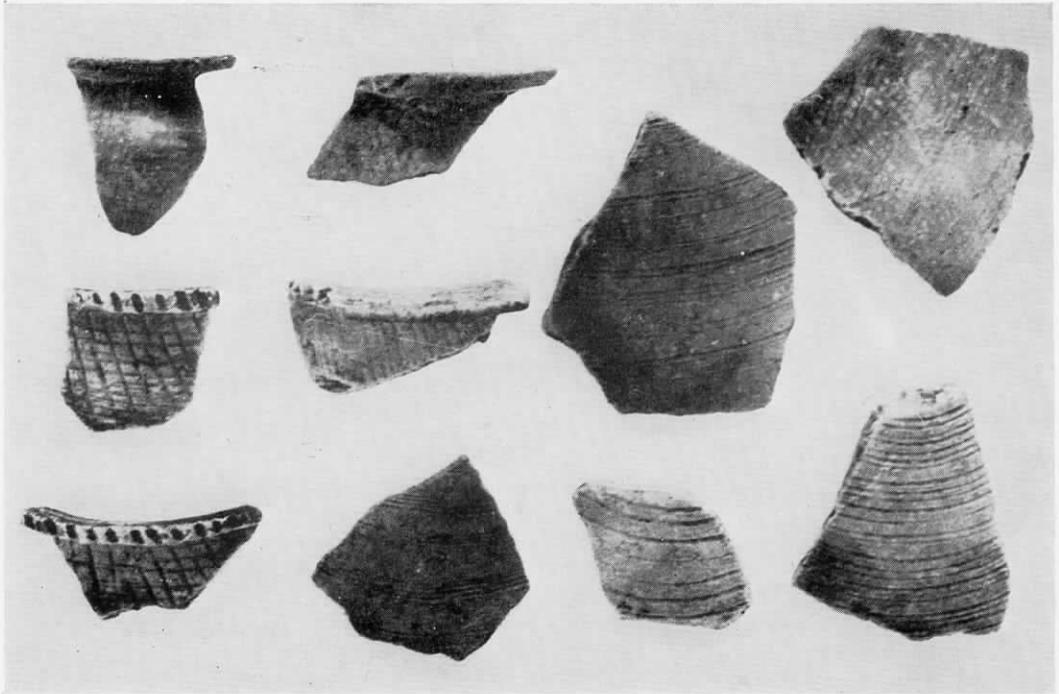
C

弥生式土器口縁部 残存部 h 13cm



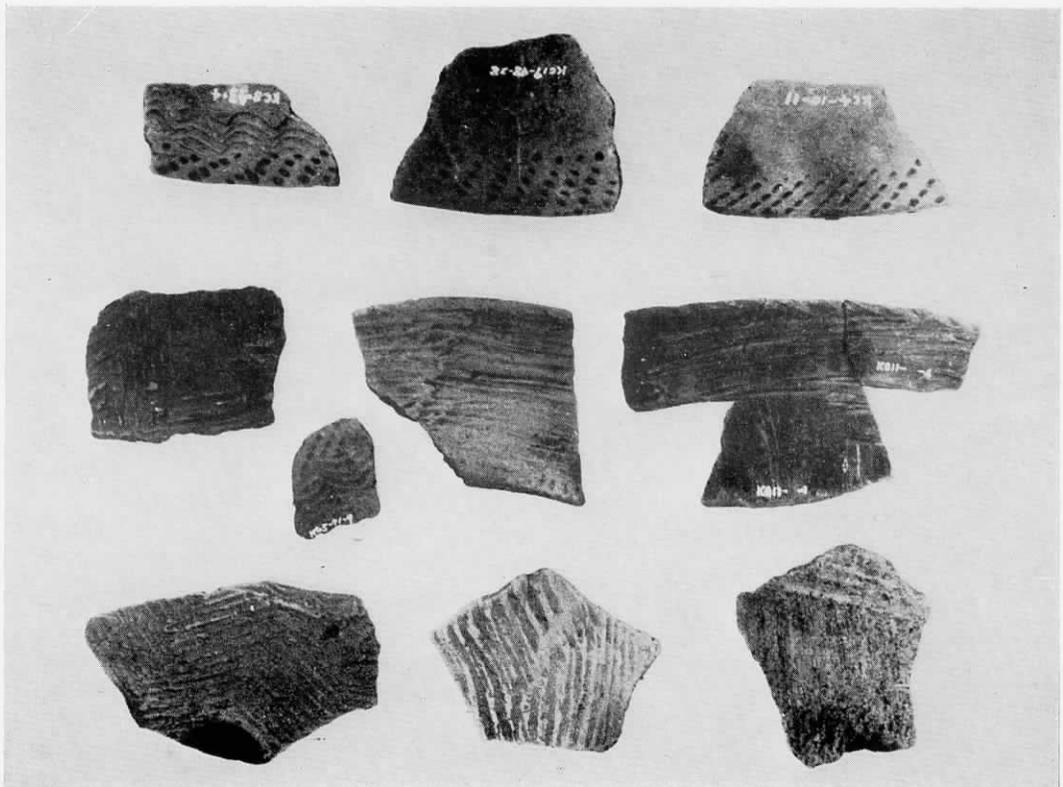
D

弥生式中期土器



A

弥生式中期土器



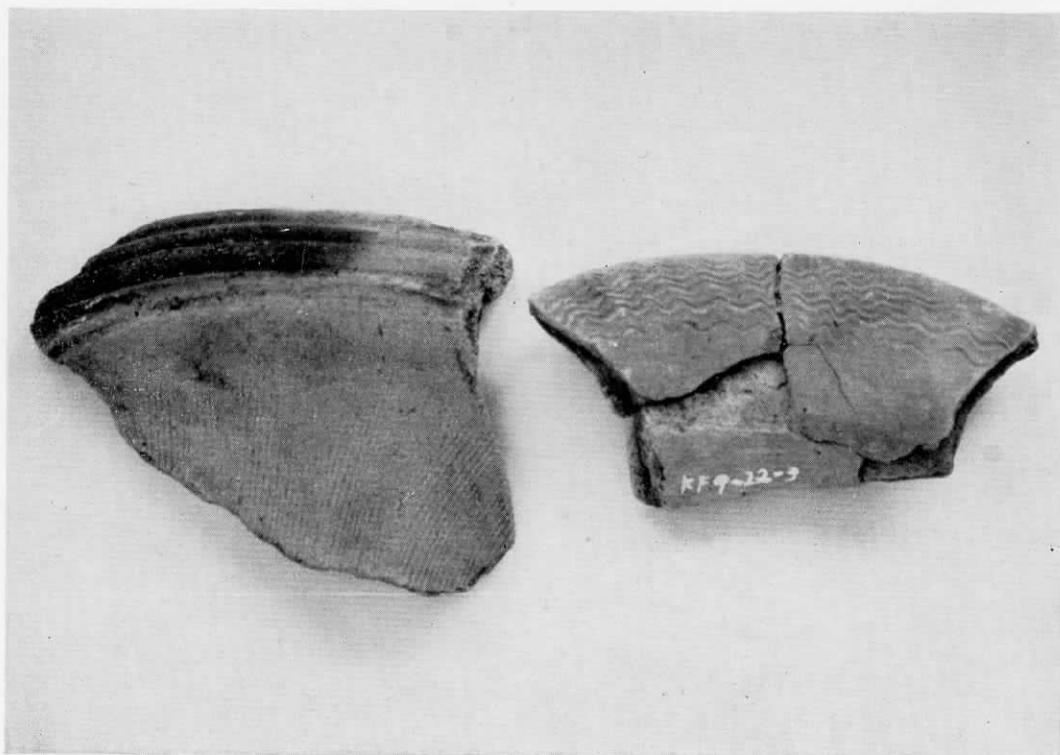
B

弥生式中期具田町式土器



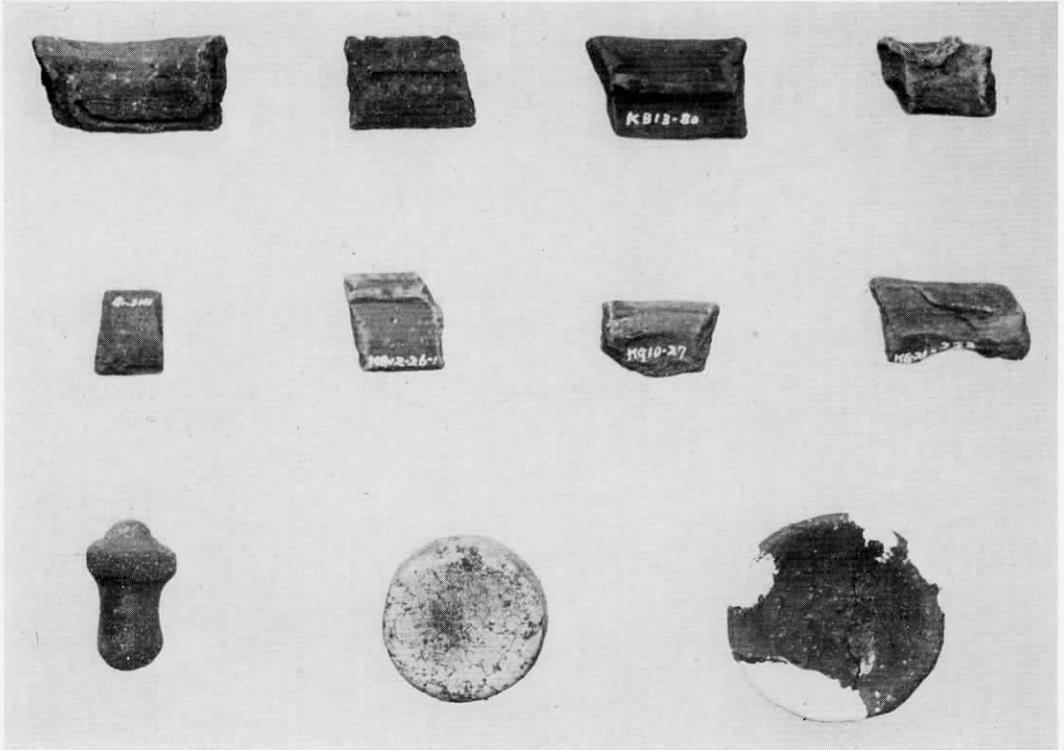
A

弥生式中期土器



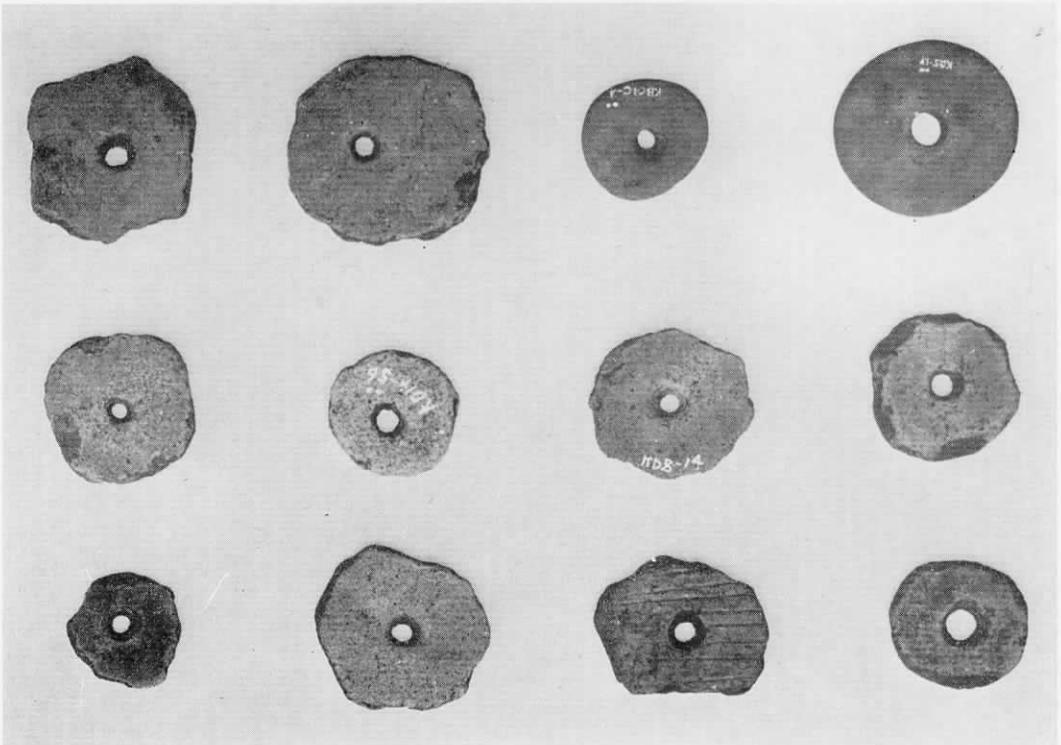
B

弥生式中期土器



A

上中段 滑車形耳飾・下段左 耳栓形土製品・下段中右 白状耳飾



B

紡錘車



A

土錘



B

土錘



A

杯 h 5.2cm



B

土師式甕 h 26cm



C

短頸甕 h 11cm



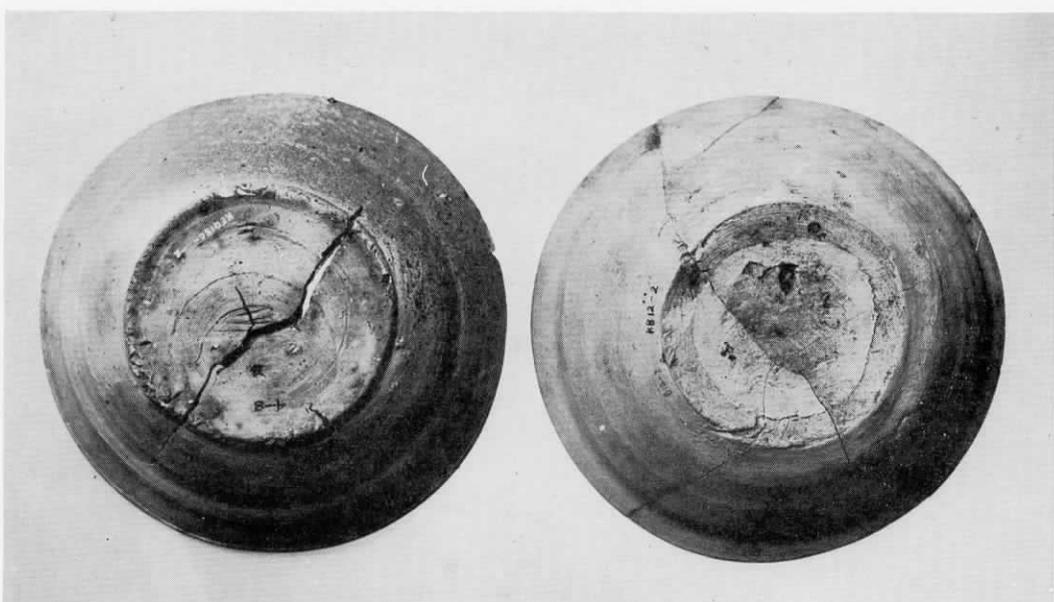
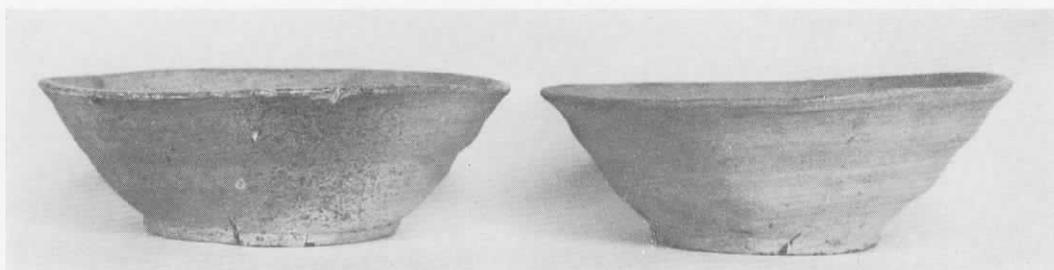
D

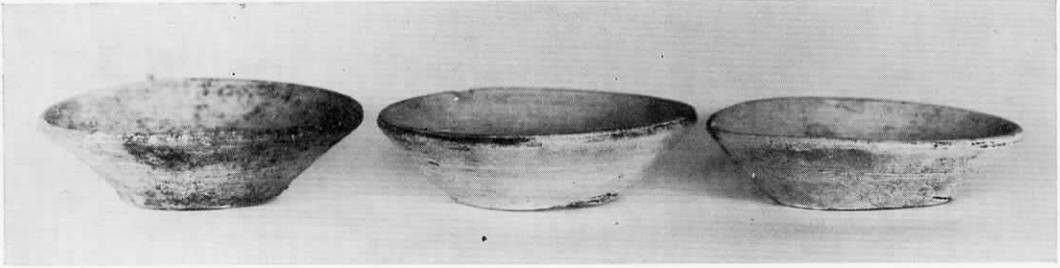
横瓶 h 19cm



E

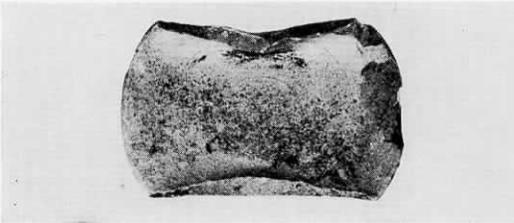
耳付き広口瓶 h 31.5cm



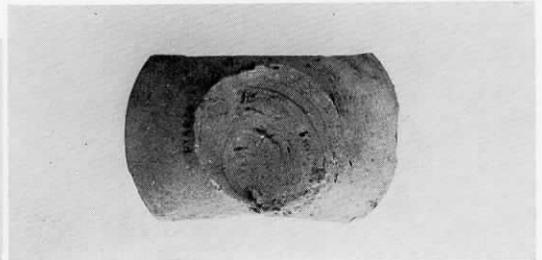


A

山茶碗



B



耳皿 C

同 底部



D

小皿 E



同 底部

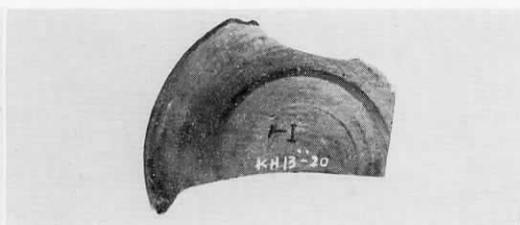


A

山茶碗

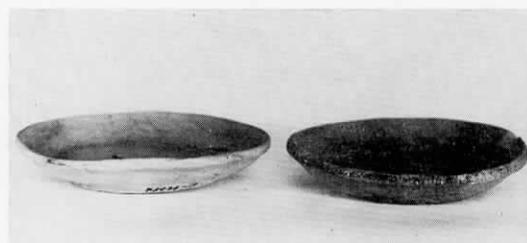


B



蓋 C

山茶碗



D



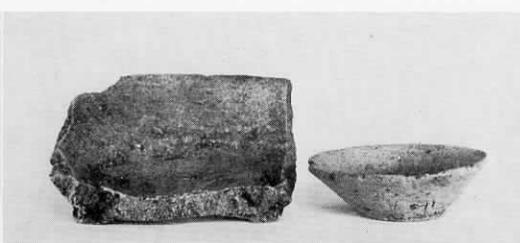
小皿 E

山茶碗 碗 皿

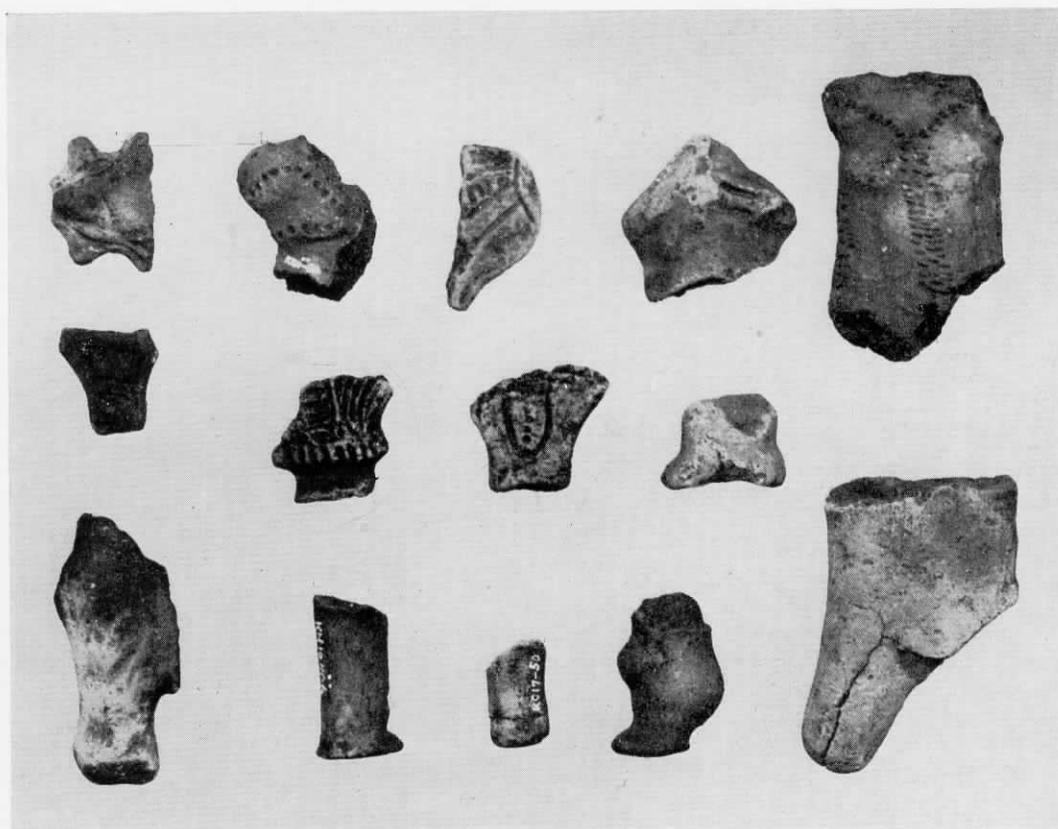


F

山茶碗 碗 皿 G



山茶碗



A

土偶



B

土偶



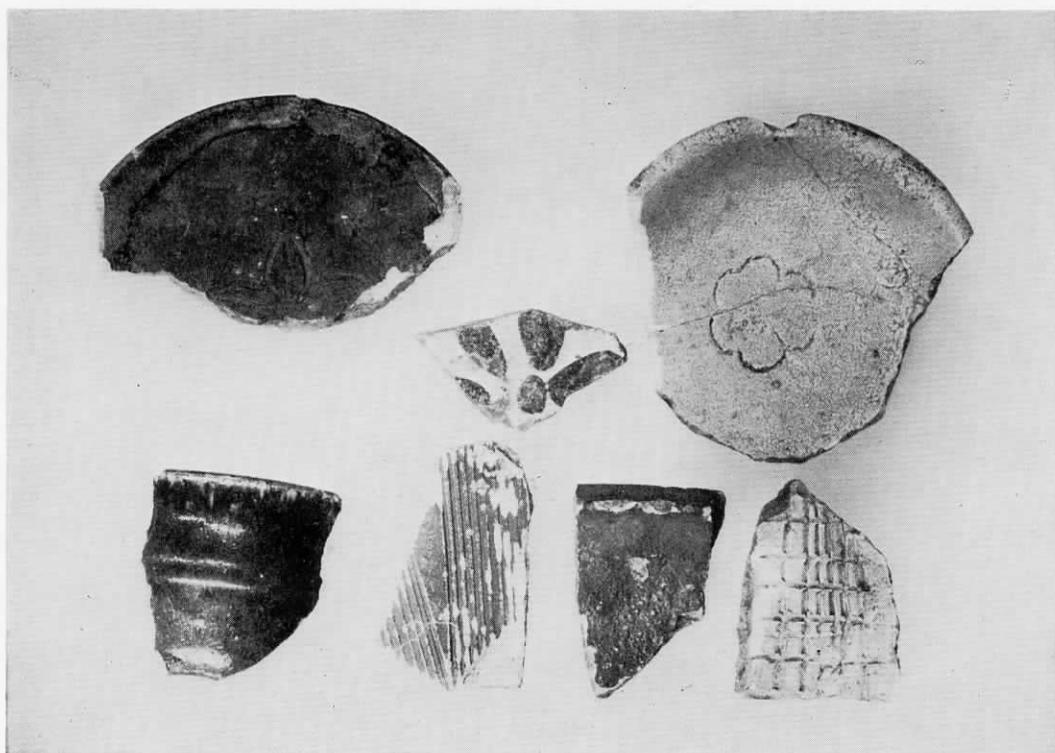
C

土偶



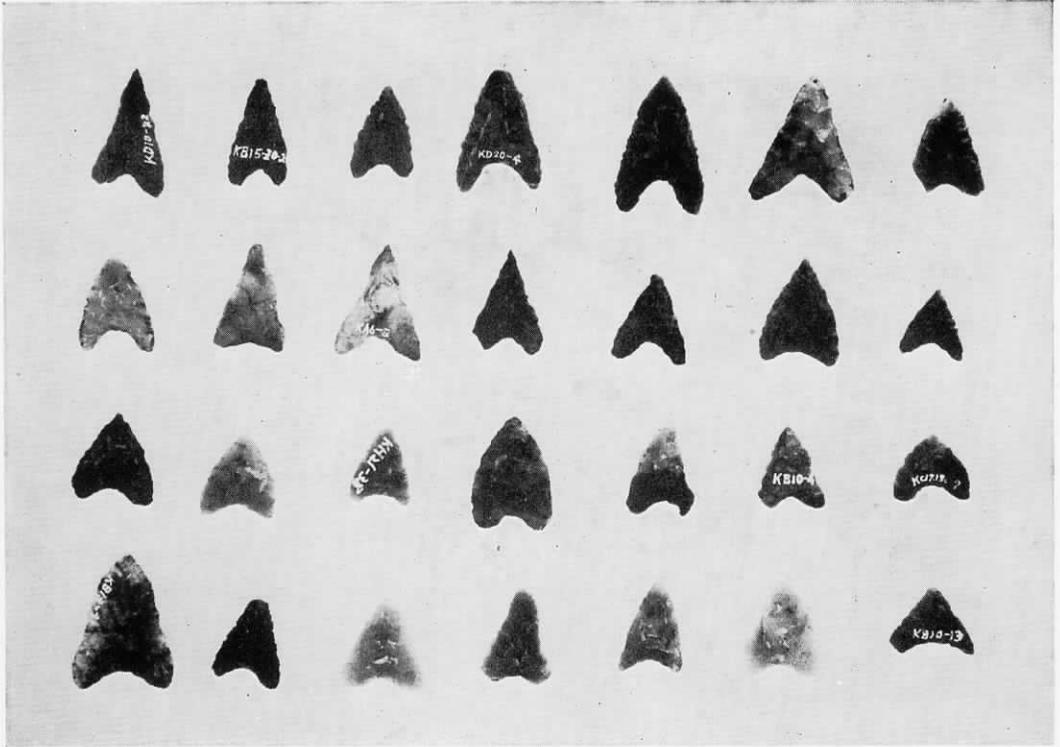
A

陶器片



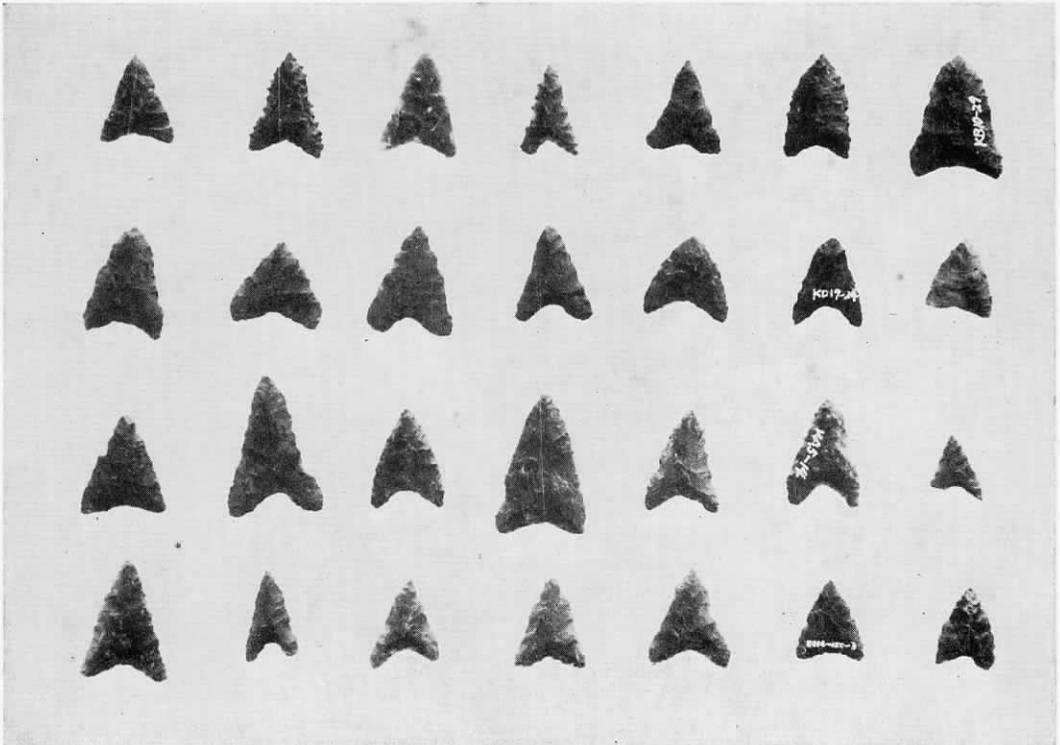
B

陶器片



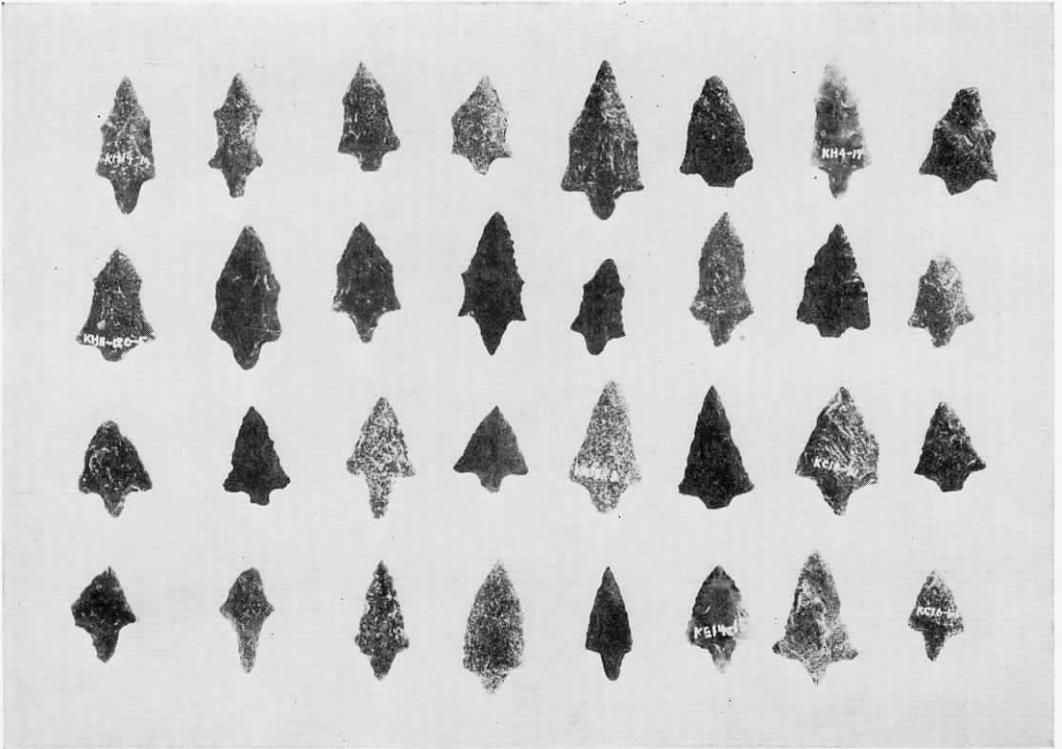
A

打製石鏃



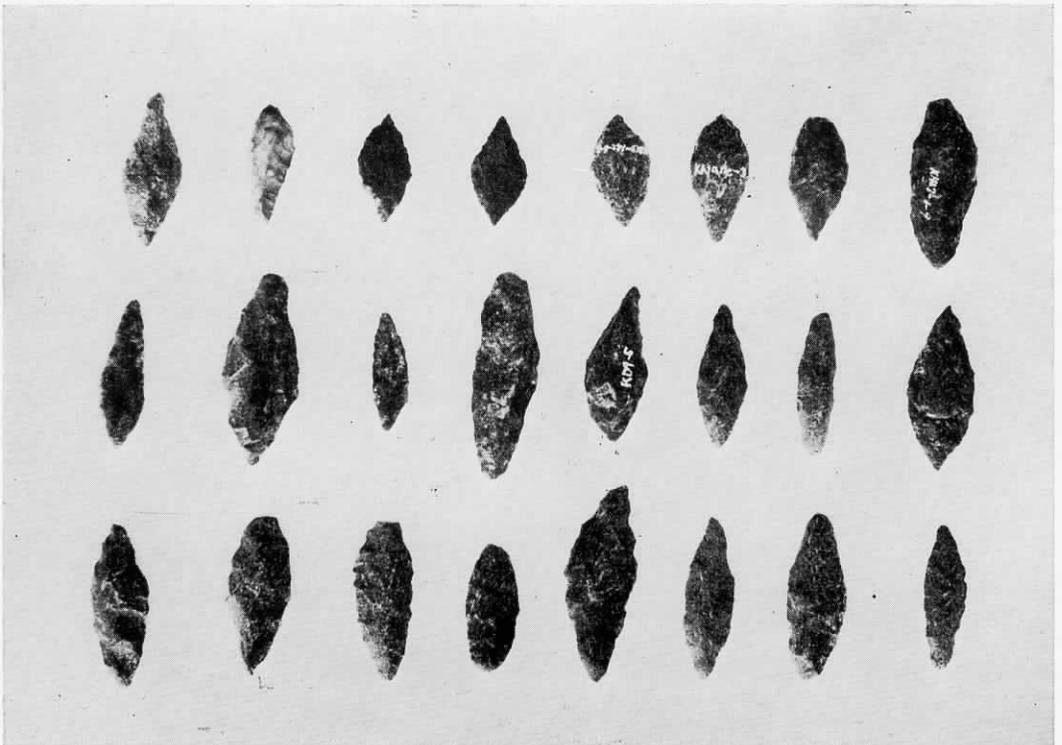
B

打製石鏃



A

打製石鏃



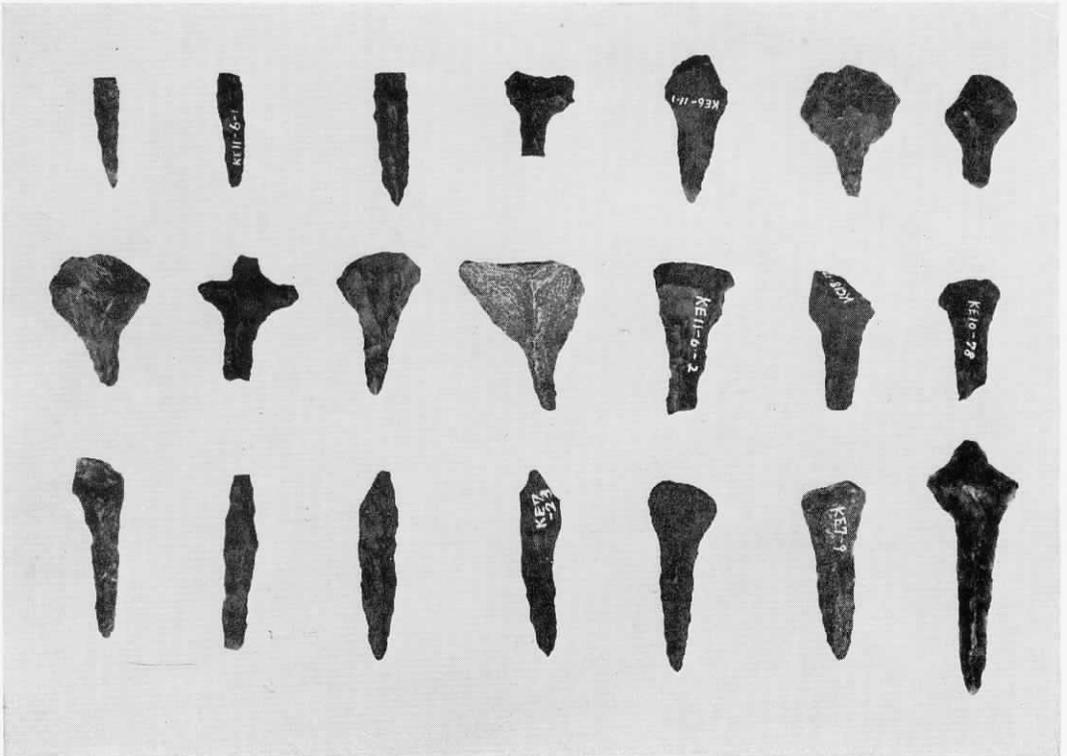
B

打製石鏃



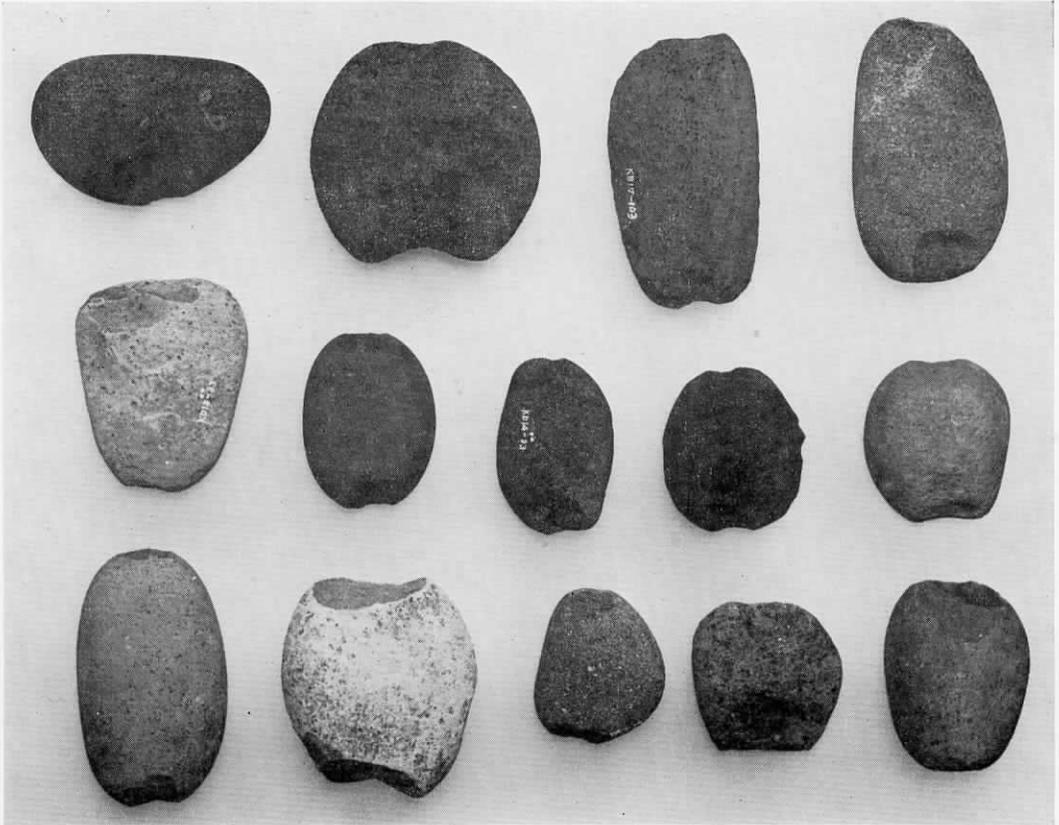
A

石匙



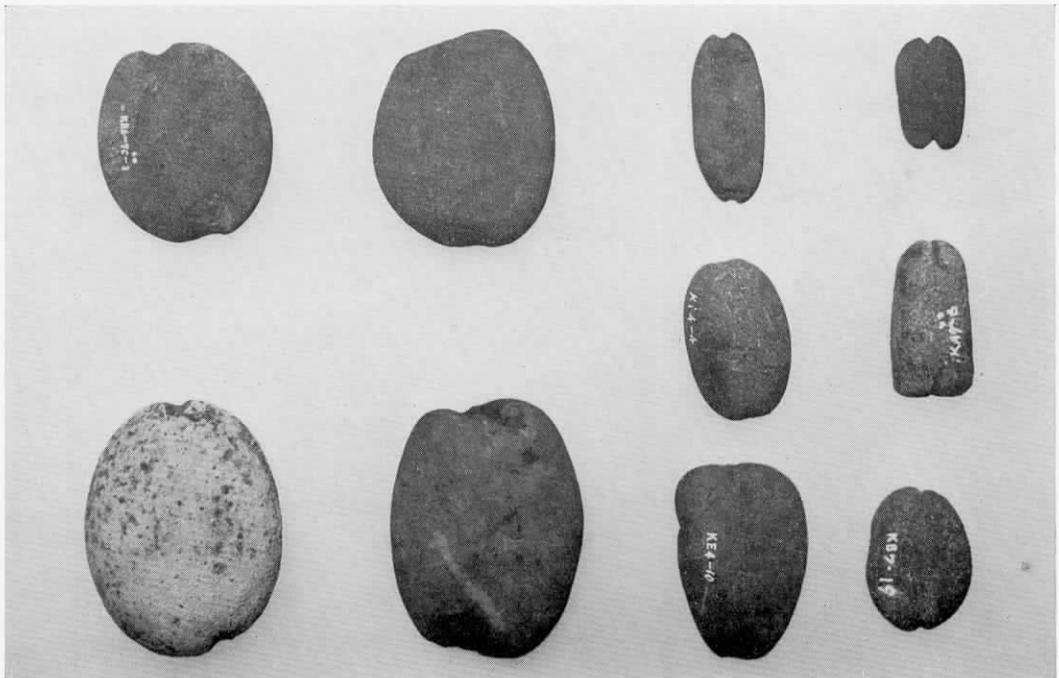
B

石錐



A

石錘



B

石錘



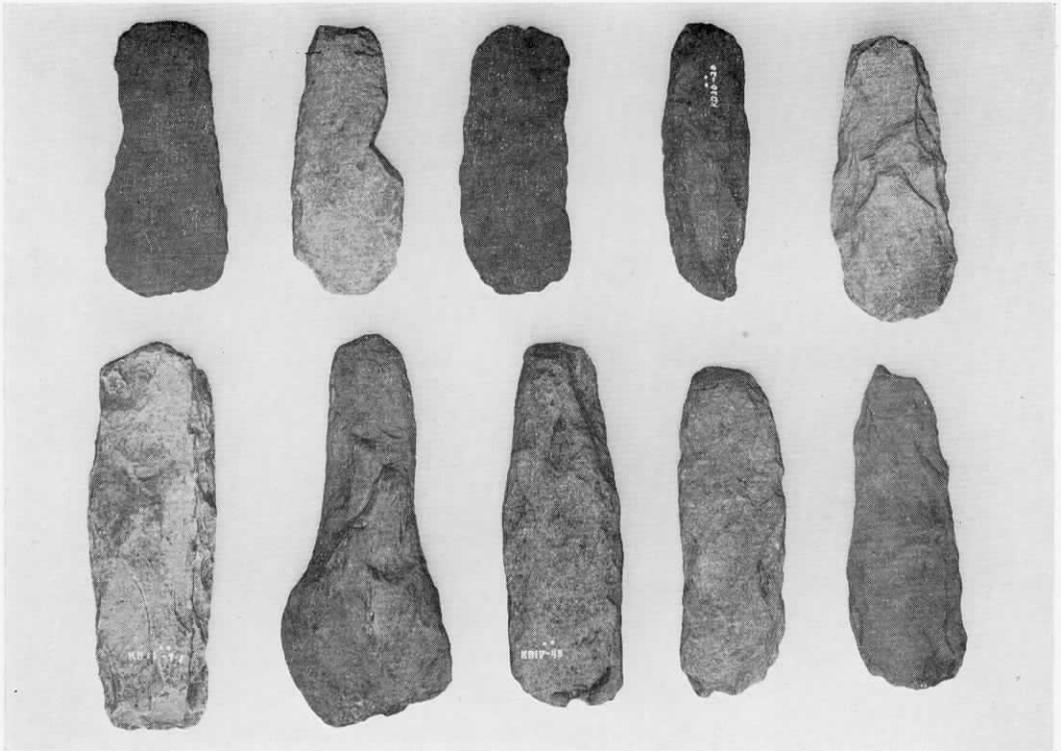
A

磨製石斧



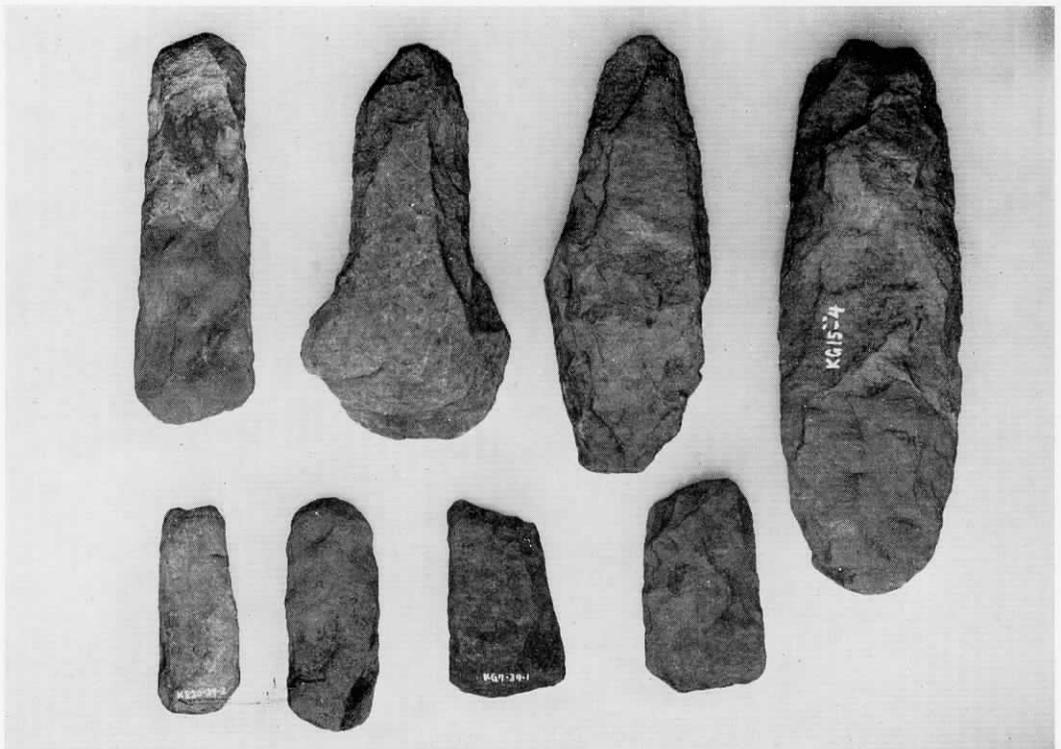
B

磨製石斧



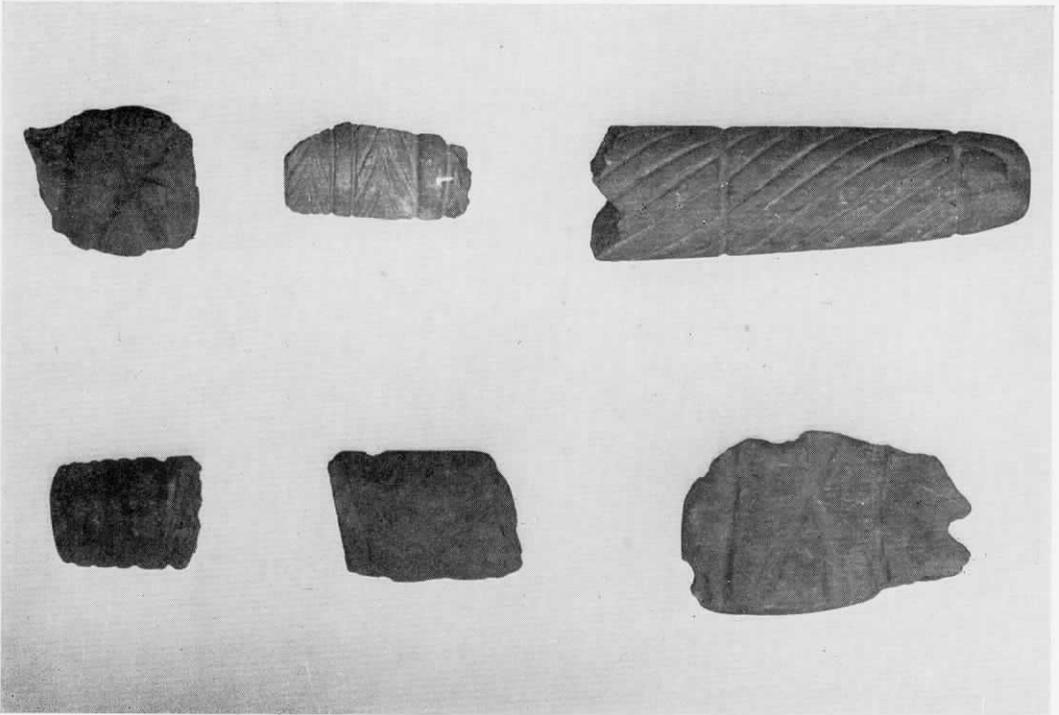
A

打製石斧



B

打製石斧



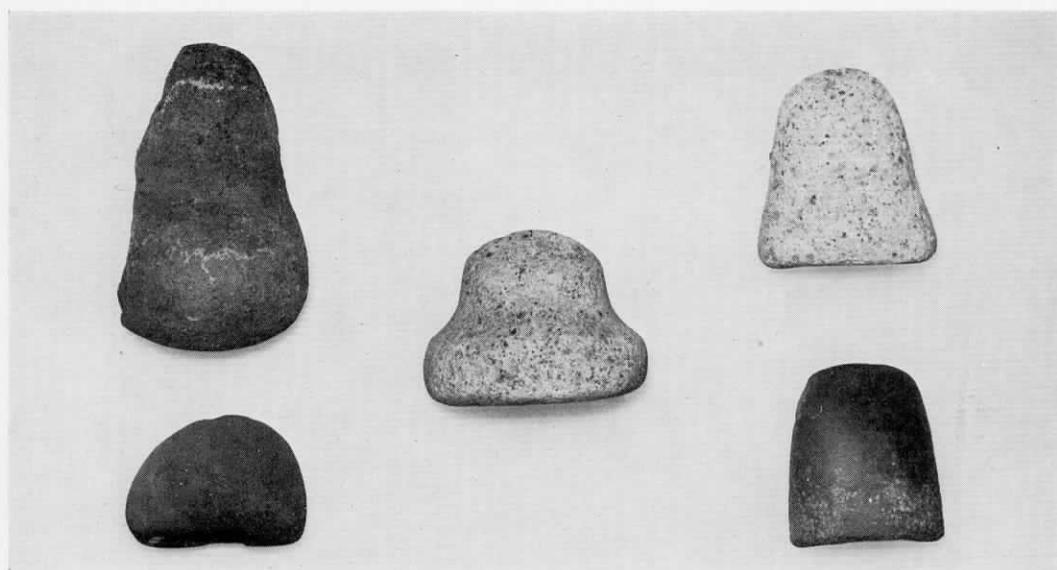
A

石刀



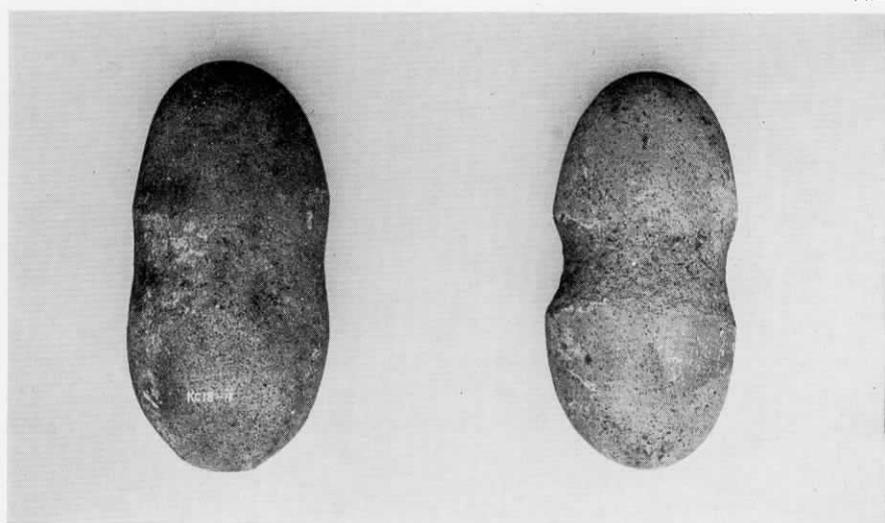
B

石刀



A

石冠



B

独钻石



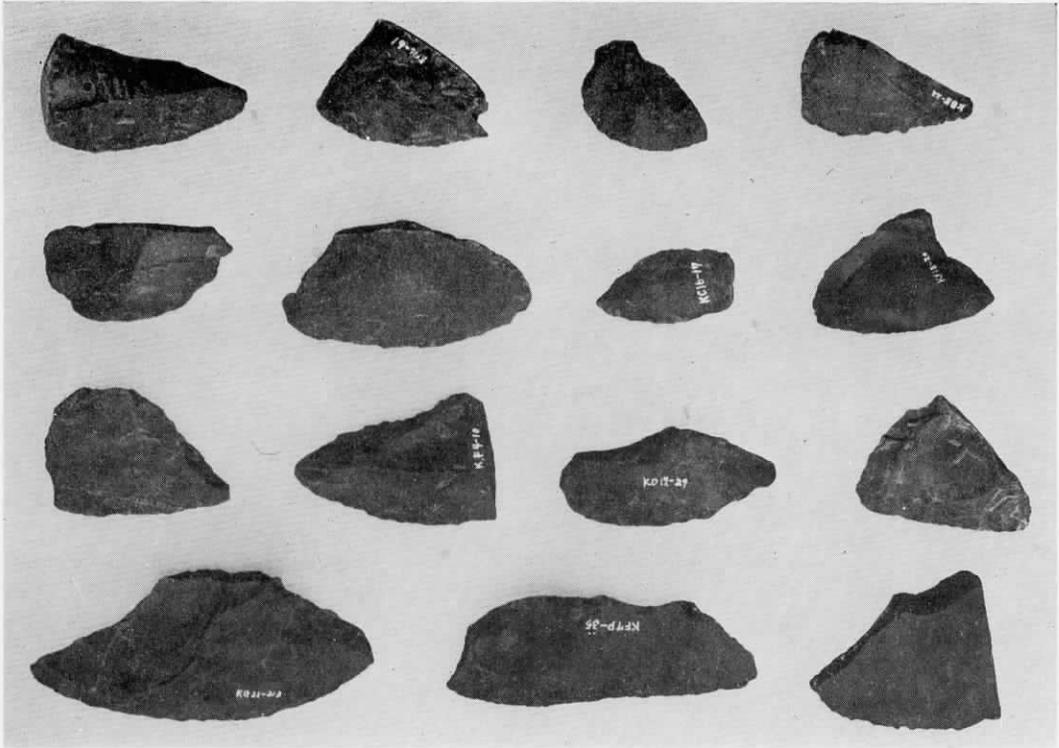
C

石包丁



D

凹盤状打製石器



A

スクレイパー



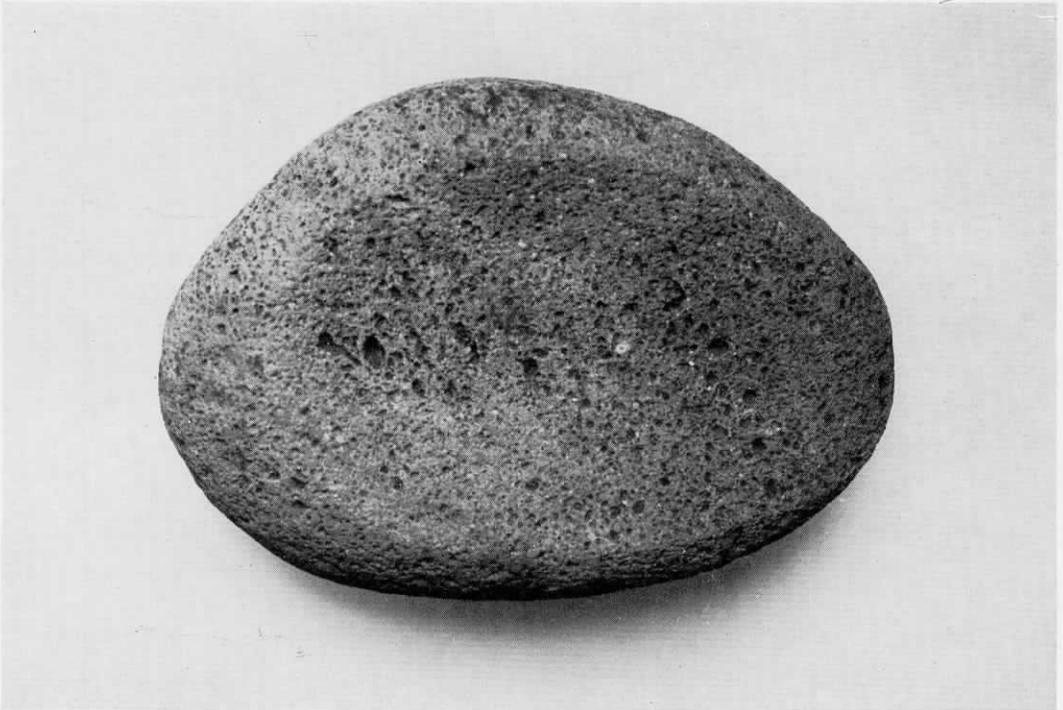
B

磨石 凹石



A

砥石



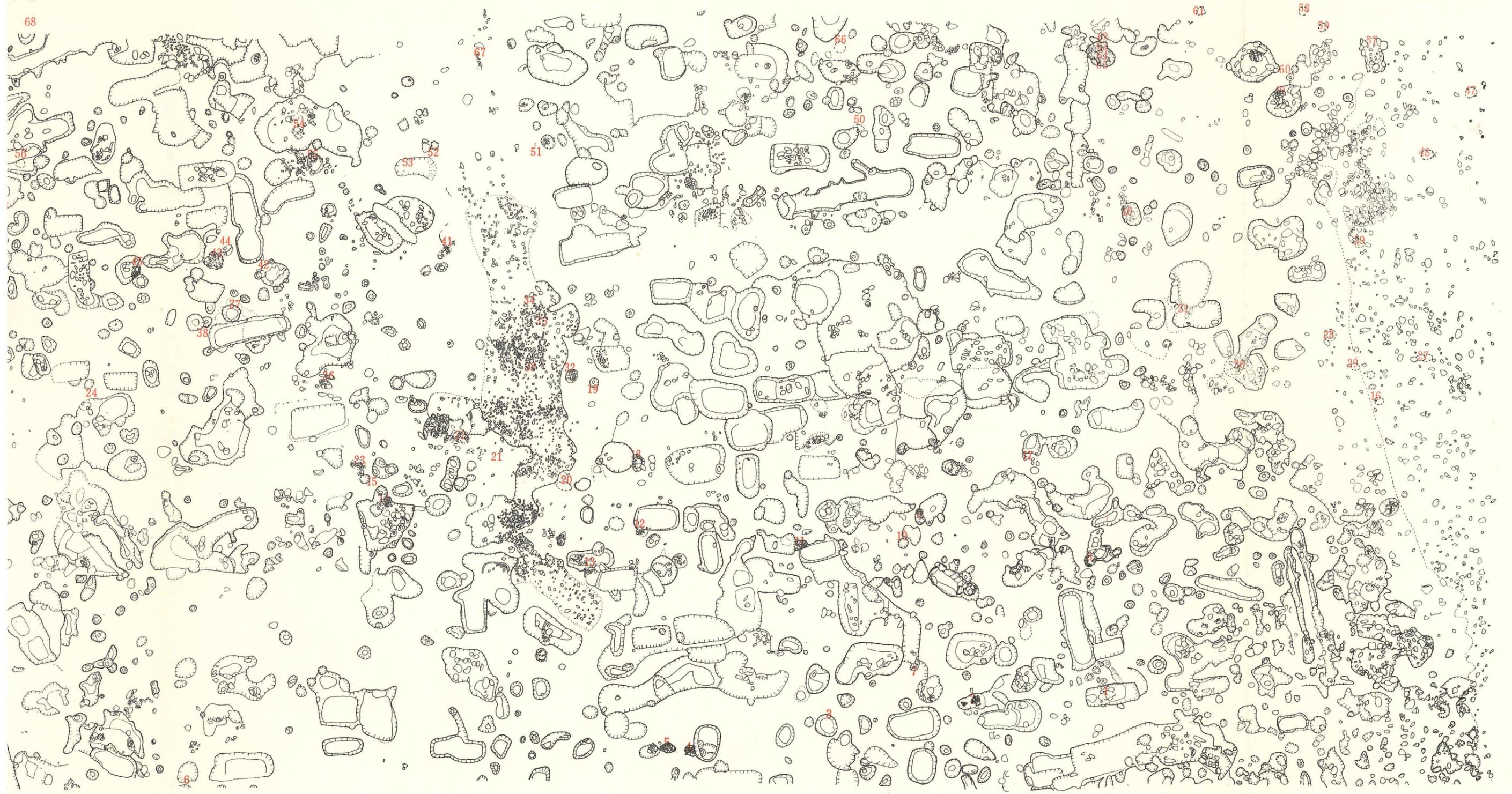
B

石皿 長径25cm 短径18cm



第1地点実測図

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|--------|------|---------|-------|---------|---------|------|--------|--------|-------|-------|--------|---------|---------|-------|---------|---------|--------|---------|
| 1 合口甕 | 2 合口甕 | 3 土器片群 | 4 横甕 | 5 合口甕 | 6 合口甕 | 7 横甕 | 8 横甕 | 9 縦甕 | 10 縦甕 | 11 甕 | 12 甕 | 13 甕 | 14 合口甕 | 15 土器片群 | 16 土器片群 | 17 横甕 | 18 甕 | 19 土器片群 | 20 合口甕 | 21 土器片 |
| 27 縦甕 | 28 縦甕 | 29 甕 | 30 甕 | 31 甕 | 32 横甕 | 33 土器片群 | 34 土器片群 | 35 甕 | 36 合口甕 | 37 合口甕 | 38 横甕 | 39 甕 | 40 甕 | 41 土器片群 | 42 土器片群 | 43 甕 | 44 土器片群 | 45 甕 | 46 甕 | 47 土器片群 |
| 53 土器片群 | 54 土器片群 | 55 甕 | 56 甕 | 57 土器片群 | 58 甕 | 59 甕 | 60 土器片群 | 61 甕 | 62 土器 | 63 土器 | 64 土器 | 65 土器 | 66 縦甕 | 67 甕 | 68 土器片群 | | | | | |



1 甕 2 甕 3 甕 4 甕 5 合口甕 6 合口甕 7 横甕 8 横甕 9 縦甕 10 縦甕 11 甕 12 甕 13 甕 14 合口甕 15 土器片群 16 土器片群 17 横甕 18 甕 19 土器片群 20 合口甕 21 土器片群 22 合口甕 23 横甕 24 甕 25 土器片群 26 土器片群
 27 甕 28 甕 29 甕 30 土器片群 31 甕 32 横甕 33 土器片群 34 土器片群 35 甕 36 合口甕 37 合口甕 38 横甕 39 甕 40 甕 41 土器片群 42 土器片群 43 甕 44 土器片群 45 甕 46 甕 47 土器片群 48 甕 49 土器片群 50 土器片群 51 甕 52 土器片群
 53 甕 54 甕 55 甕 56 甕 57 土器片群 58 甕 59 甕 60 土器片群 61 甕 62 土器 63 土器 64 土器 65 土器 66 縦甕 67 甕 68 土器片群